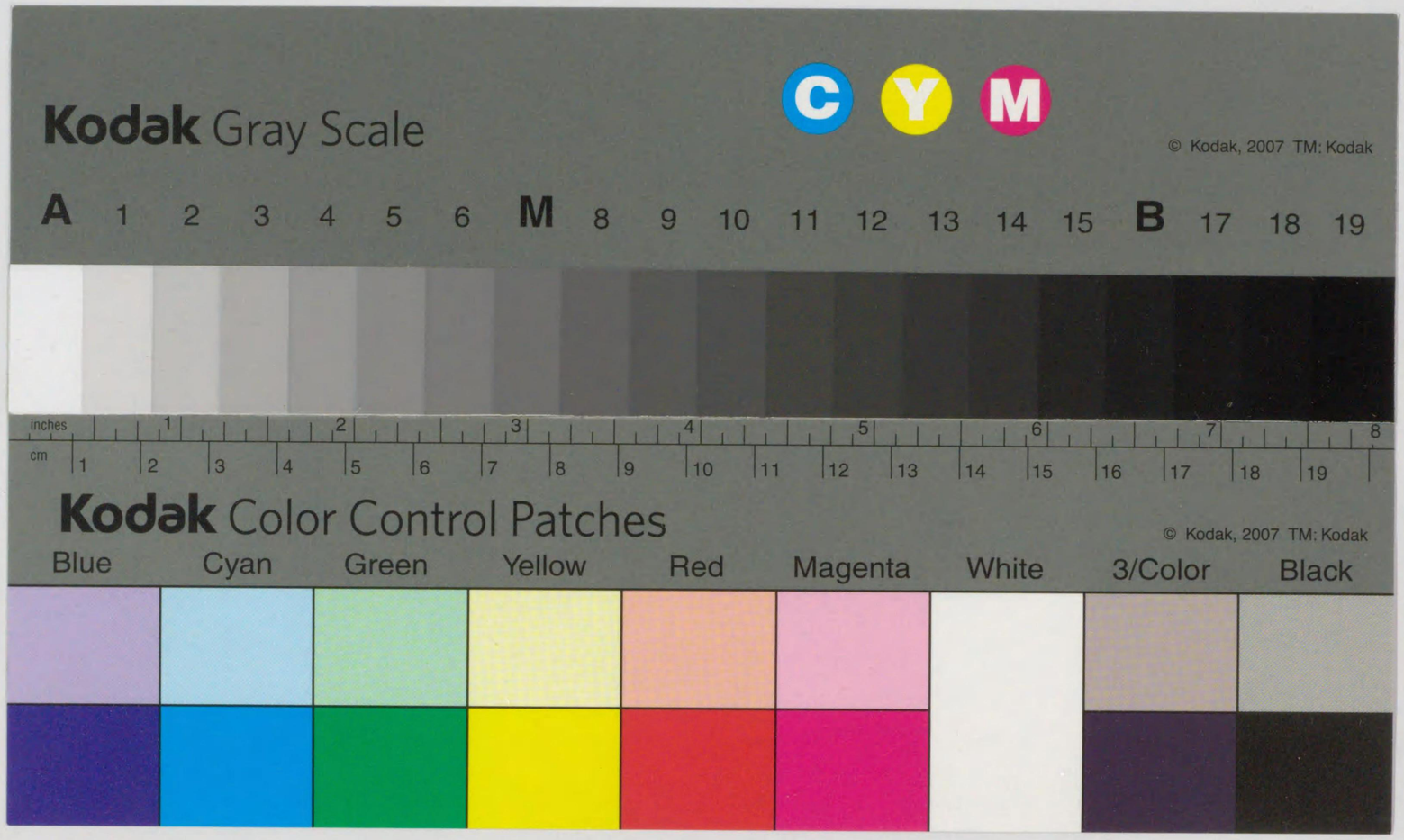
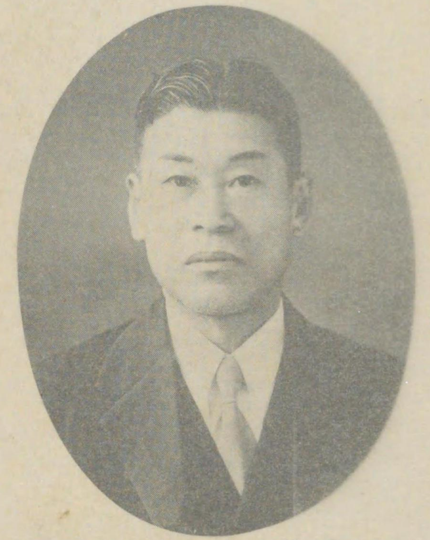


溜留温冷ナ仕色ト

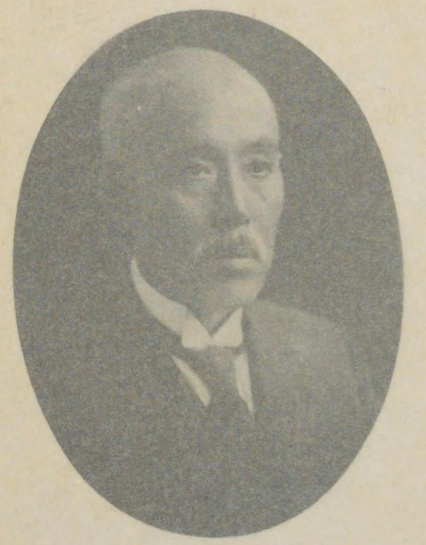
宮山下水道略誌

正誤表

頁	行	正	誤
五	二一	下水道。	下水通●
三二	二一	請負施行。	請負施工●
五七	一	十一。月	一●十●月●
六四	二三	十一。月。四日	十●月●四日●

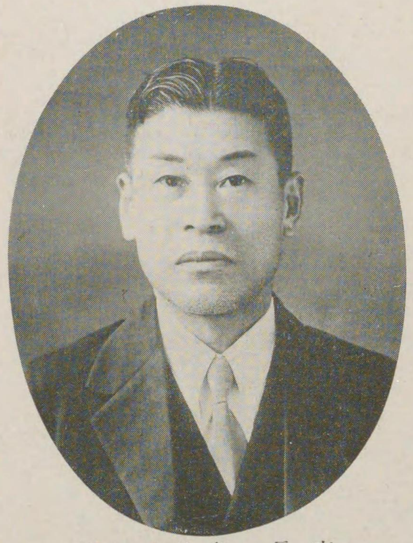


市長　森林右エ門

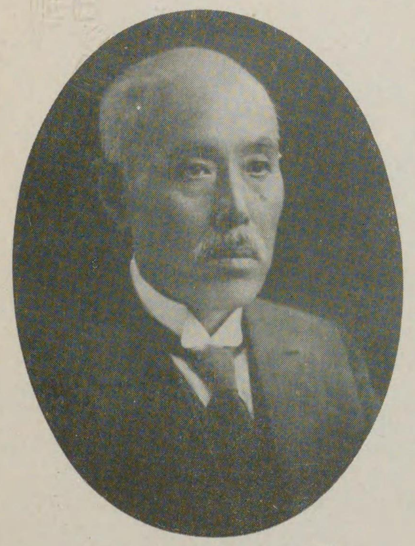


元市長　日野常太郎

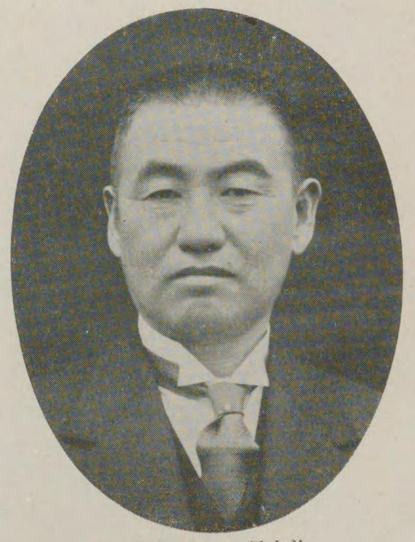
市会議長　小島太左エ門



市長　森林右エ門

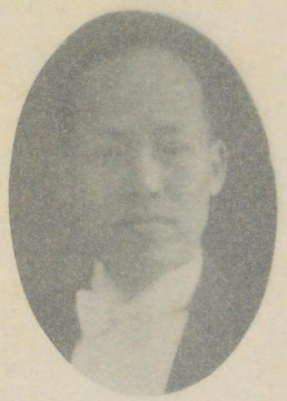


元市長　日野常太郎

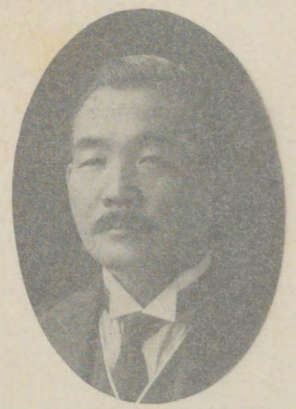


前市長　小島太左エ門

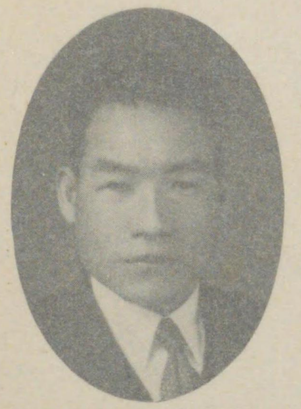
前助役　前島次郎



助役　小濱元夫

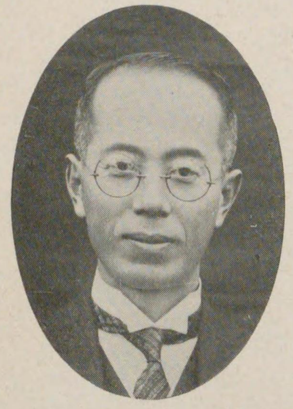


元助役　杉山竹治郎

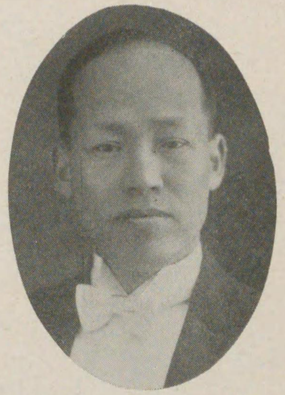


一實寺野小　長課水下

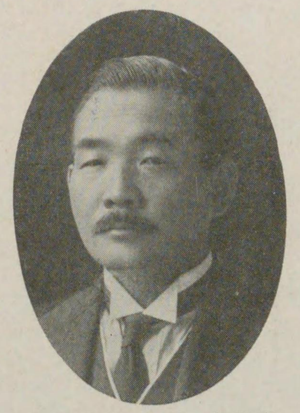
顧問　米元晋一



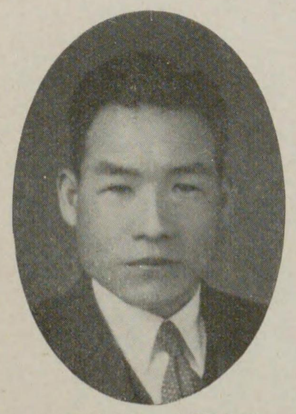
前助役　前島次郎



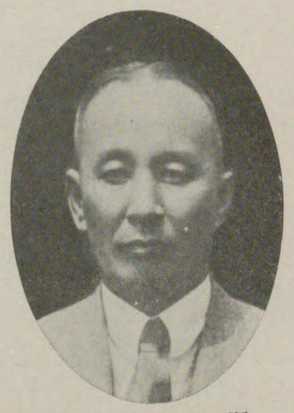
助役　小濱元夫



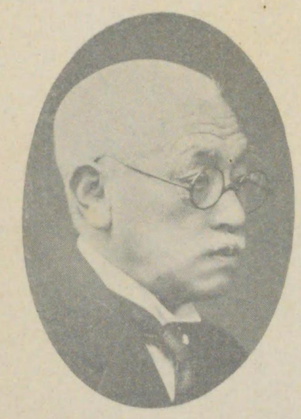
元助役　杉山竹治郎



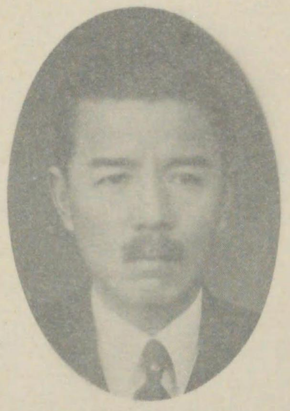
一實寺野小　長課水下



顧問　米元晋一

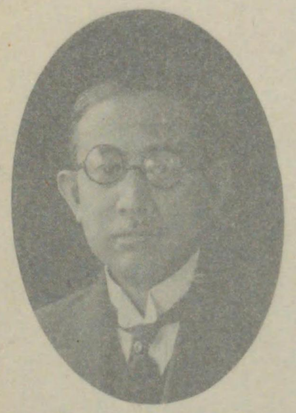


元市會議長　土川彌七郎

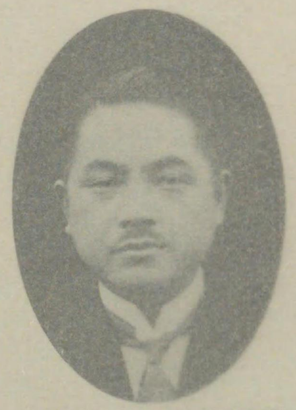


市會議長　田中利左衛門

市會副議長　小　島　克　實

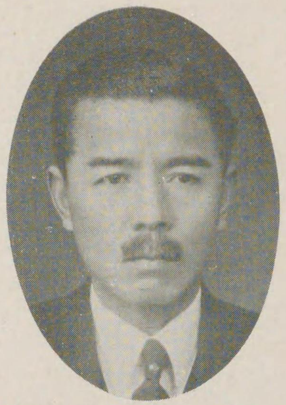


元市會副議長　佐分利新右エ門



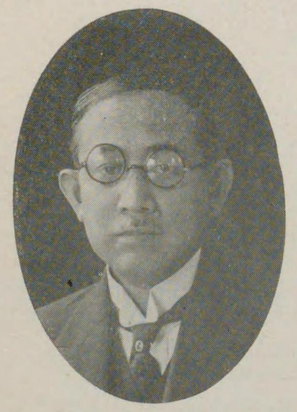
元市會副議長　森　幾松

元市會議長　土川彌七郎

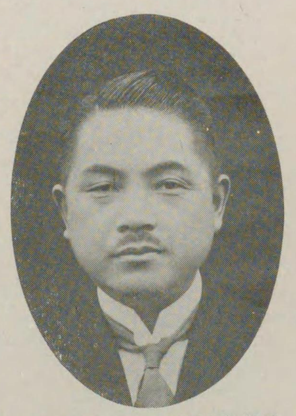


市會議長　田中利左衛門

市會副議長　小　島　克　實

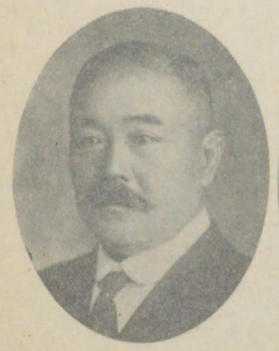


元市會副議長　佐分利新右エ門

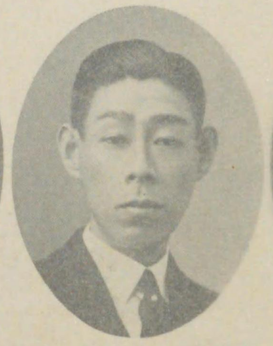


元市會副議長　森　幾松

下水道委員　（市會議席順）

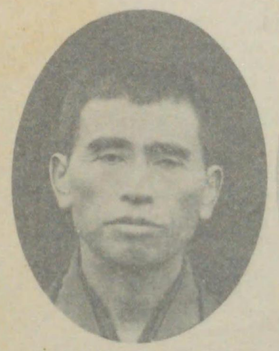


市會議員　丹菊仁三郎

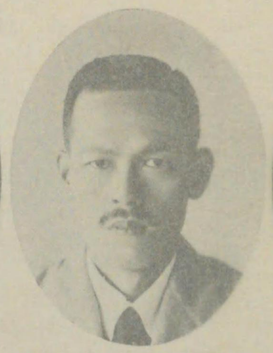


市會議員　宮木彦八郎

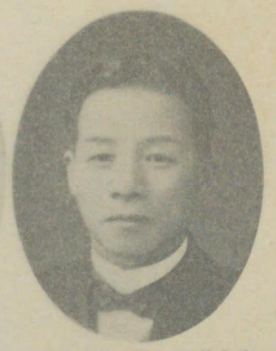
市會議員　尾關德次



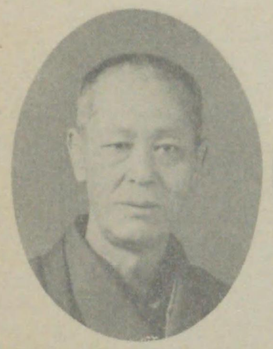
市會議員　岩井藤九郎



市會議員　森　鋤三郎



市會議員　林　利雄



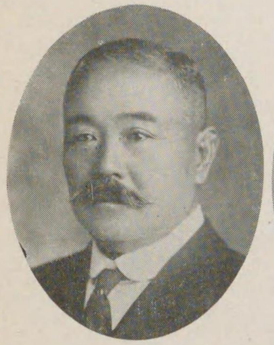
市會議員　鈴木龜次郎

市會議員　後藤宗一

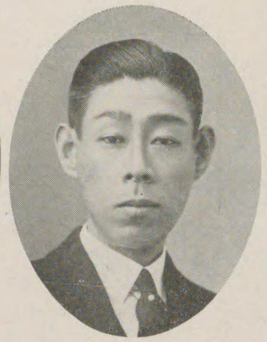
市會議員　今井本之信

下水道委員

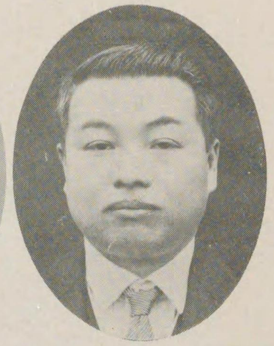
（市會議席順）



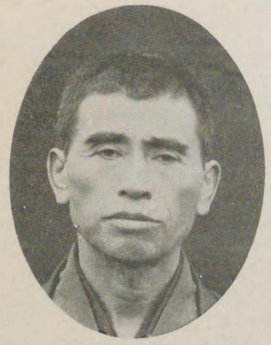
市會議員　丹菊仁三郎



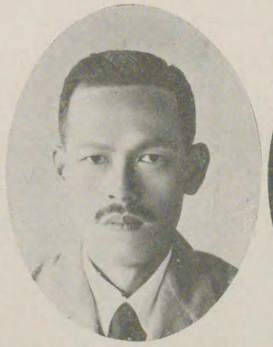
市會議員　宮木彦八郎



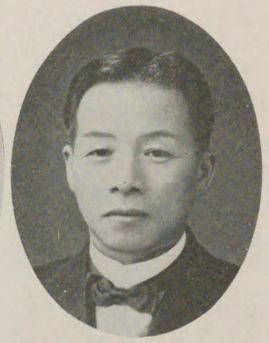
市會議員　尾關德次



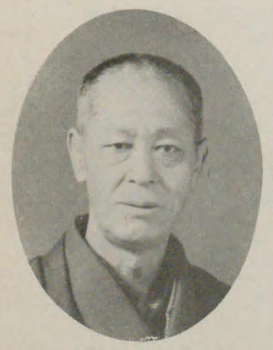
市會議員　岩井藤九郎



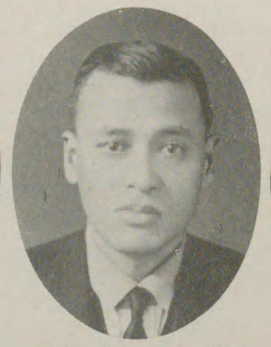
市會議員　森　鋤三郎



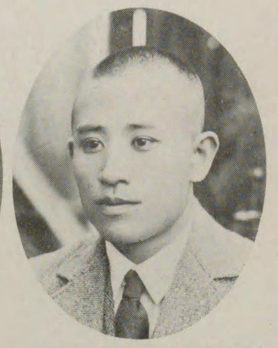
市會議員　林　利雄



市會議員　鈴木龜次郎

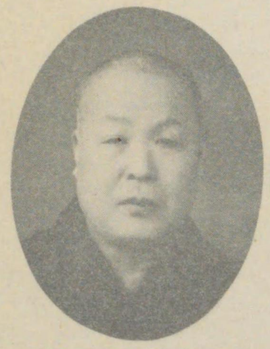


市會議員　後藤宗一

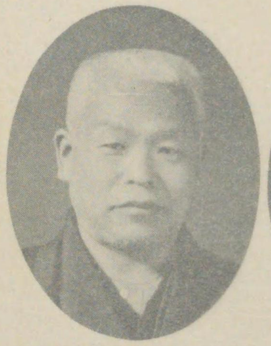


市會議員　今井末之信

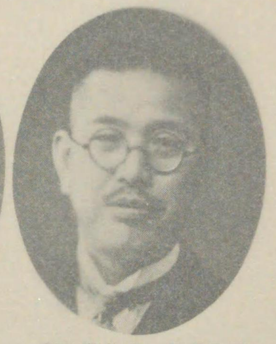
前下水道委員　（市會議席順）



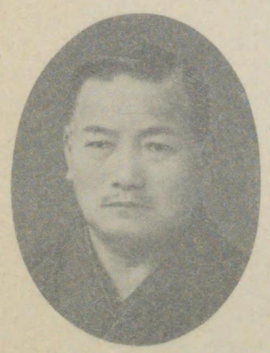
郎次代井中　員議會市



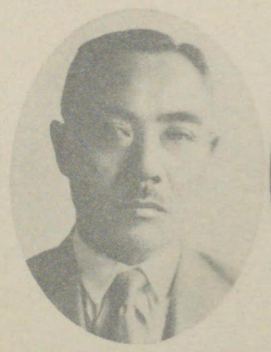
郎太市田脇　員議會市



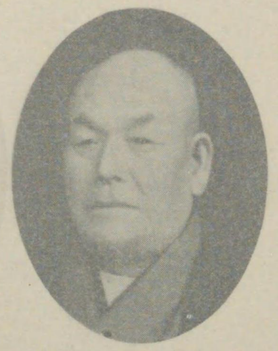
郎三藤井淺　員議會市



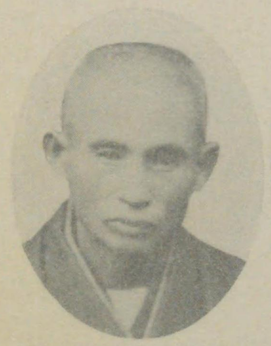
門工左文森　員議會市前



男賀多瀧　員議會市前



郎治竹田粟　員議會市前

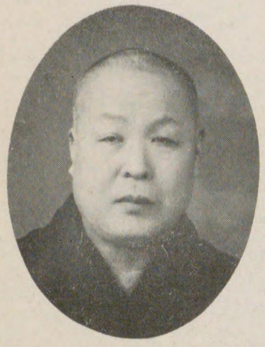


郎太秋井酒故　員議會市

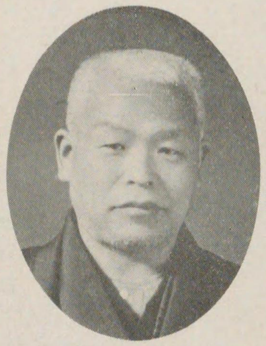
郎三民口山　員議會市前

前下水道委員

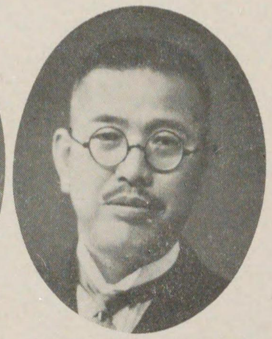
（市會議席順）



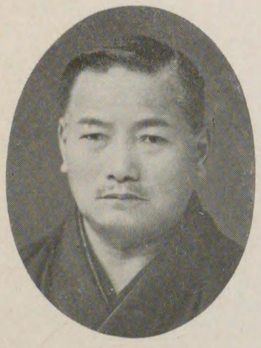
市會議員　中井代次郎



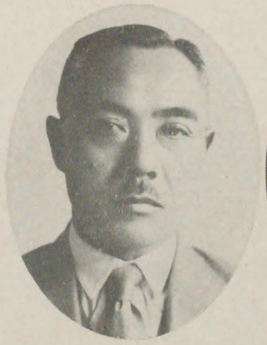
市會議員　脇田市太郎



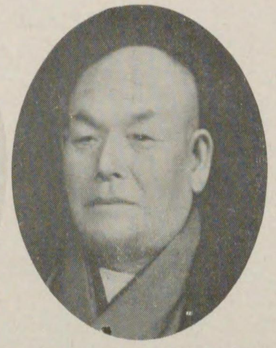
市會議員　淺井藤三郎



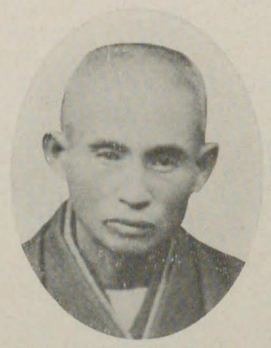
前市會議員　森文左エ門



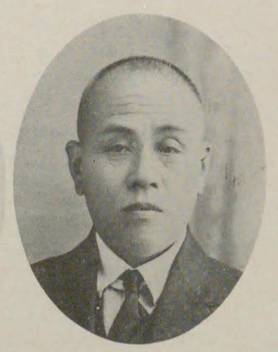
前市會議員　瀧多賀男



前市會議員　粟田竹治郎



市會議員　故酒井秋太郎

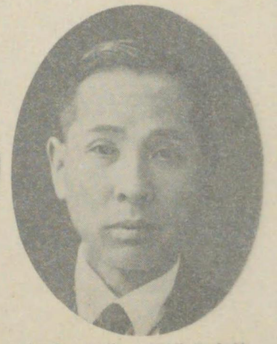


前市會議員　山口民三郎

元下水道委員

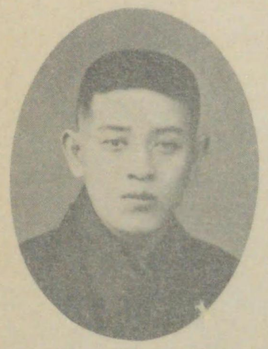
（市會議席順）

一源　藤加　員議會市

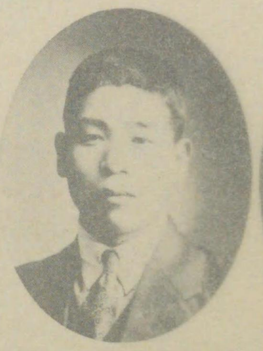


六孫　田岩　員議會市前

吾新　川坂　員議會市



郎治松箒舟　員議會市前

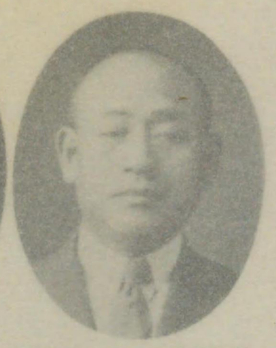


一英　井福　員議會市前

七源　內山　員議會市前

亟之貫木宮　員議會市元

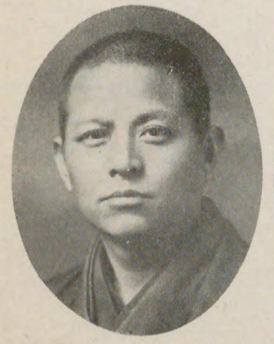
吉泰　田柴　員議會市元



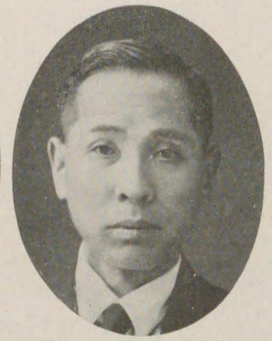
郎次梅竹大　員議會市前

元下水道委員

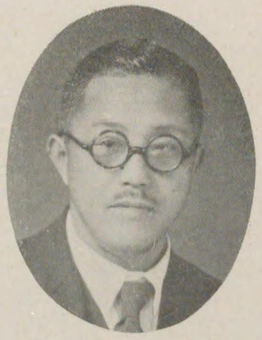
（市會議席順）



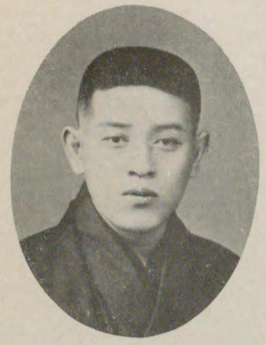
一源　藤加　員議會市



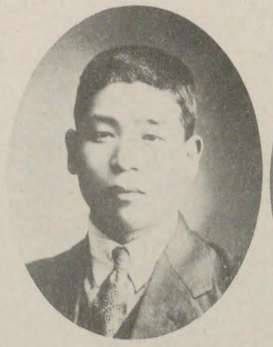
六孫　田岩　員議會市前



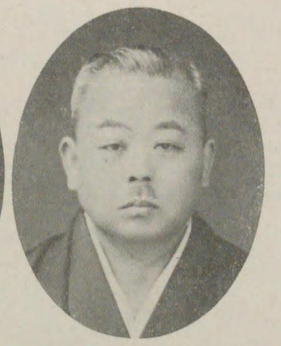
吾新　川坂　員議會市



郎治松籌舟　員議會市前

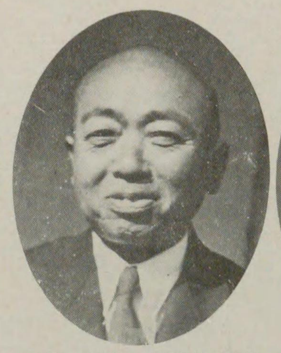


一英　井福　員議會市前

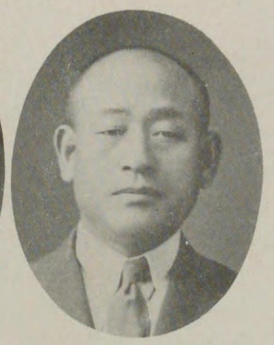


七源　内山　員議會市前

亟之貫木宮　員議會市元



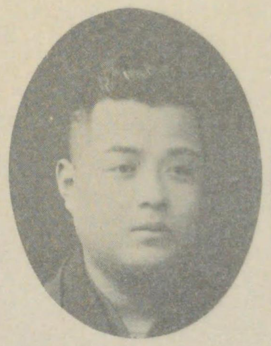
吉春　田柴　員議會市元



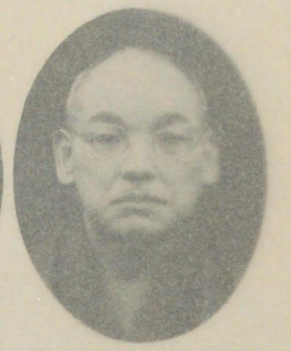
郎次梅竹大　員議會市前

元下水道委員

元市會議員　岩田由太郎

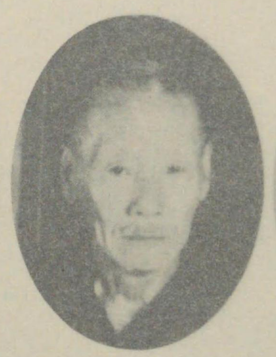


元市會議員　森下　賢一



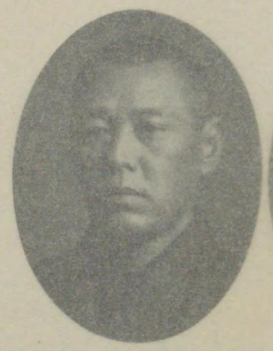
元市會議員　平林秀一郎

元市會議員　島豐　半七



元市會議員　伴　喜　幸

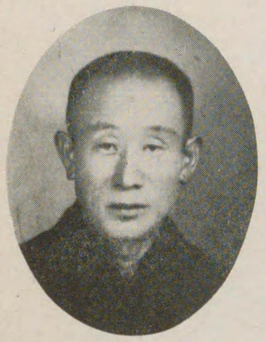
元市會議員　水野房治郎



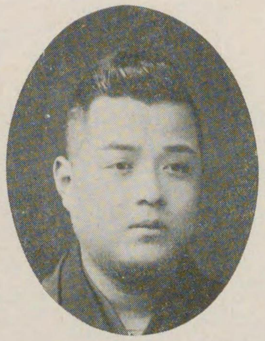
元市會議員　柴田政治郎

元市會議員　森　吉兵衛

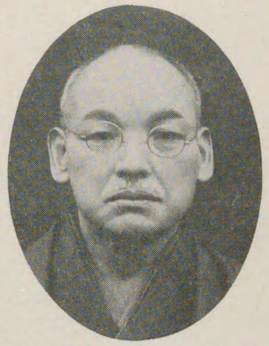
元下水道委員



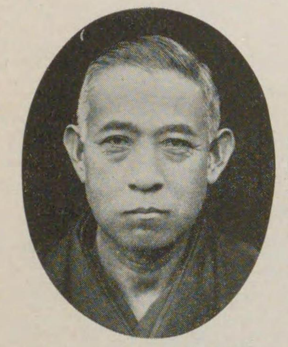
元市會議員　岩田由太郎



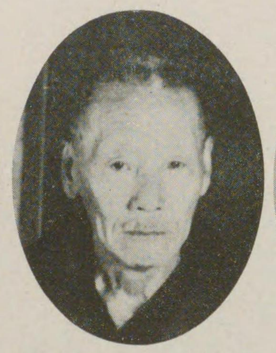
元市會議員　森下賢一



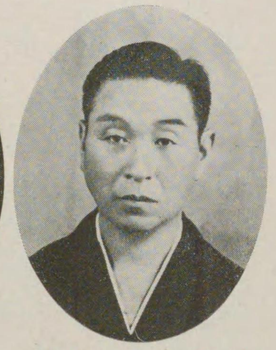
元市會議員　林平秀一郎



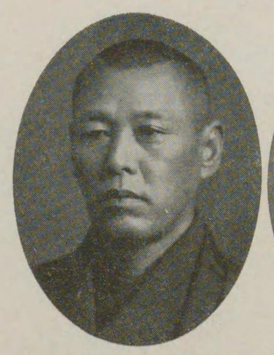
元市會議員　島豐七半



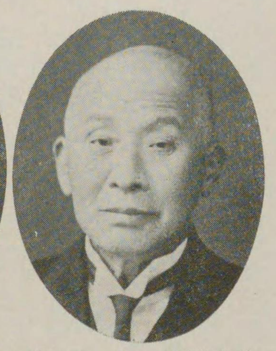
元市會議員　幸喜伴



元市會議員　水野房治郎

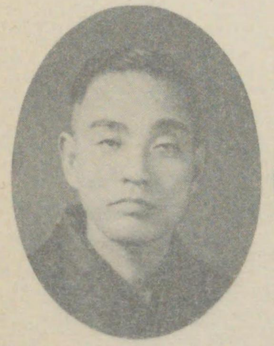


元市會議員　柴田政治郎

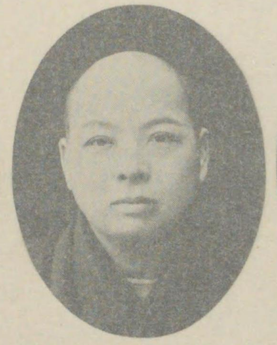


元市會議員　森吉兵衛

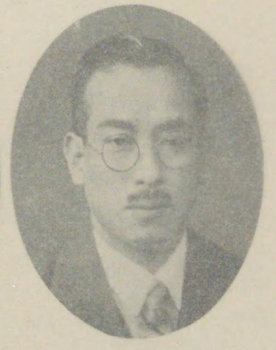
市會議員（議席順）



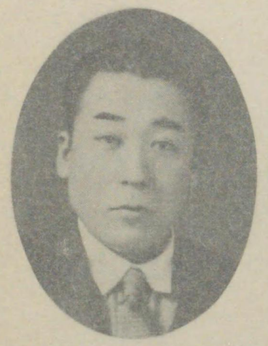
原田憂市



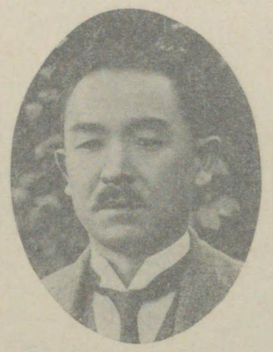
田中安逸



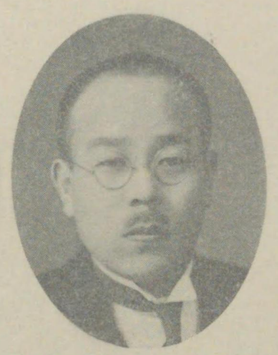
伴寅三郎



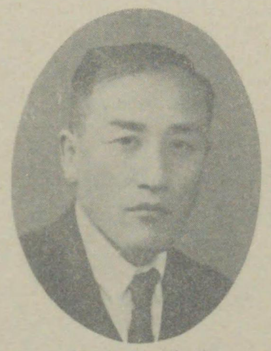
富板淺吉



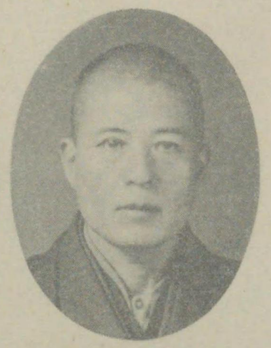
吉田萬次



伴利晴

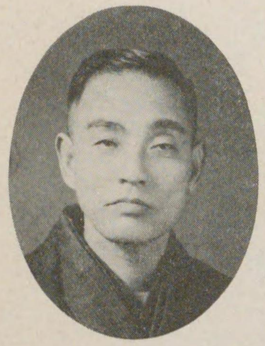


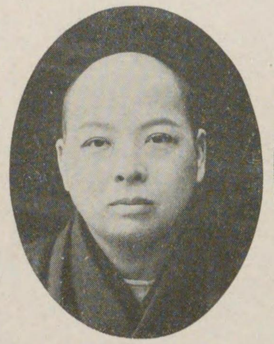
舟橋愛十郎

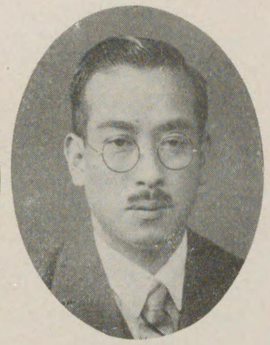


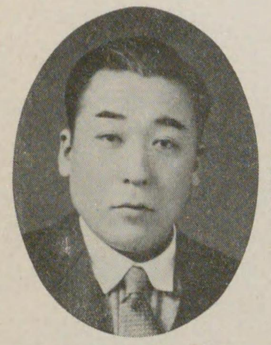
鶏飼猶市

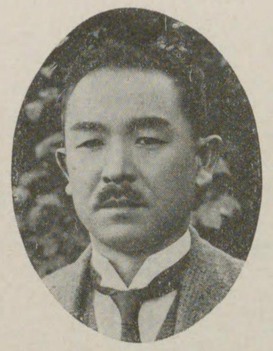
市會議員（議席順）

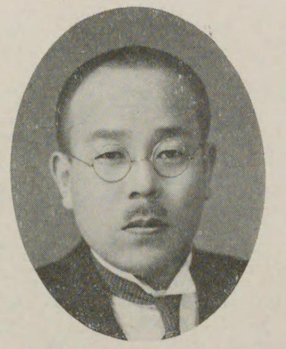

原田要市

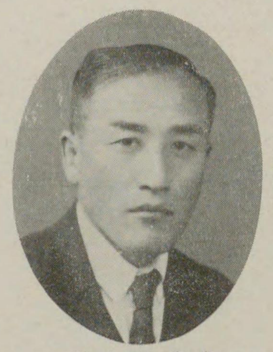

田中安逸

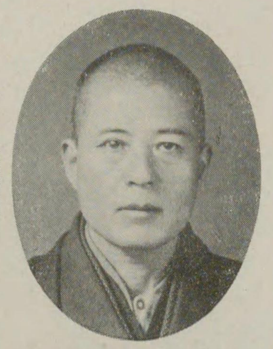

伴寅三郎


富板淺吉


吉田萬次

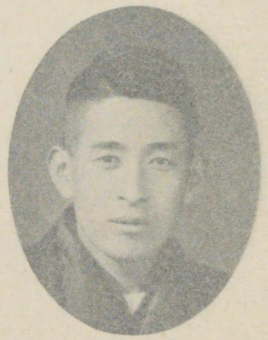

伴利晴


舟橋愛十郎


鵜飼猶市

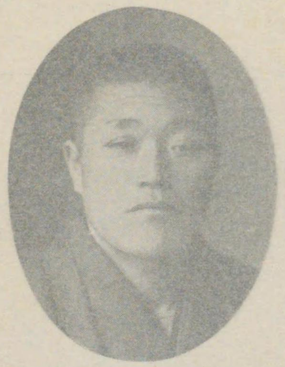
前市會議員（議席順）


宇佐美金次郎

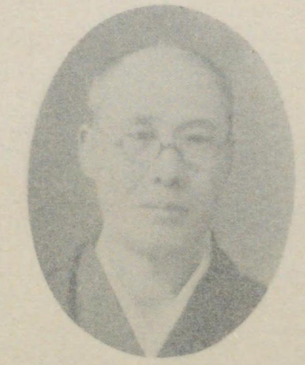

前田米三


佐藤次郎


松本森治

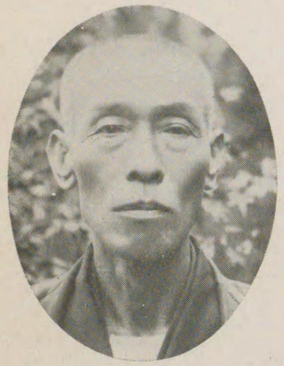

伴利三郎

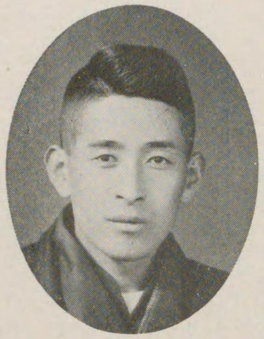

豐島豐七

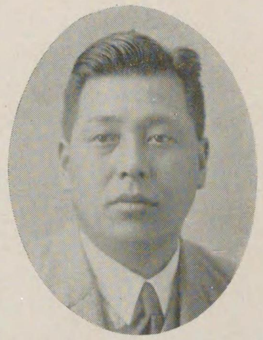

伊藤彦三郎


今井九右工門

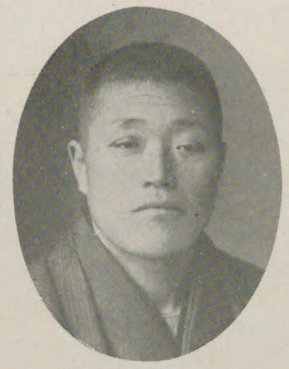
前市會議員（議席順）

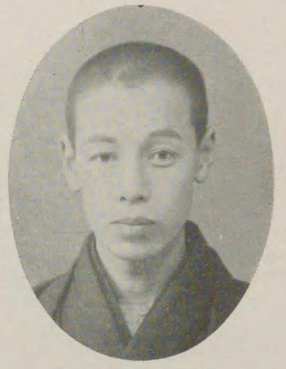

宇佐美金次郎

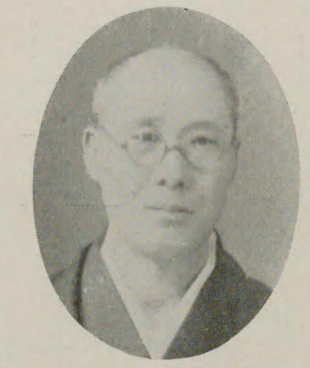

前田米三

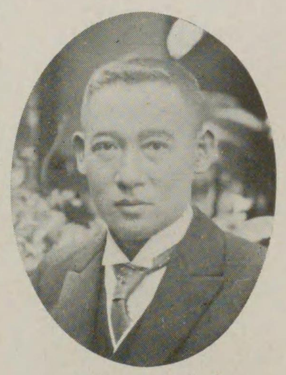

佐藤次郎


松本森治


伴利三郎

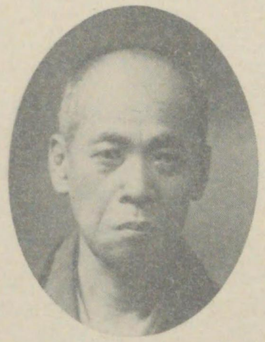

豐島豐七


伊藤彦三郎

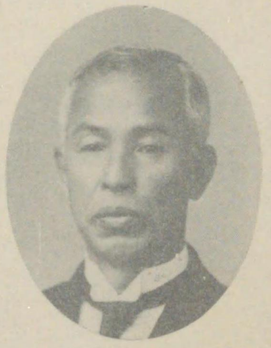

今井九右工門

元市會議員（議席順）

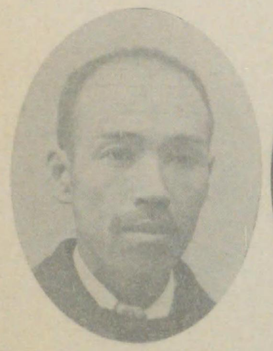
吉田友右工門



春日井鎌太郎

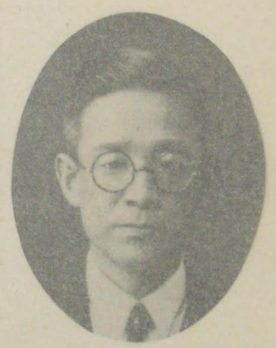


速水康次



松岡茂吉郎

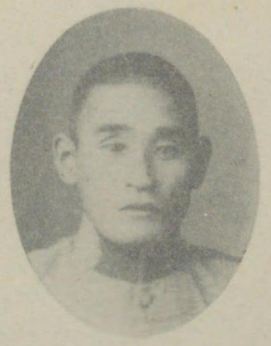
小笠原末太郎



田中鉄三郎（元吉藏）

鈴木金兵衛

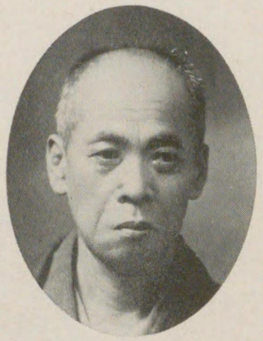
林曹五郎



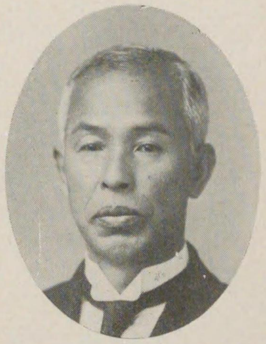
今井信太郎

元市會議員　（議席順）

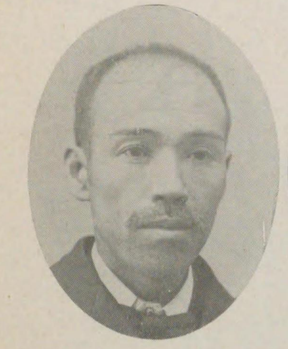
吉田友右工門



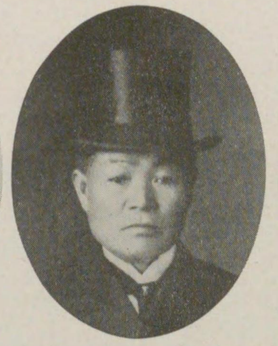
春日井鎌太郎



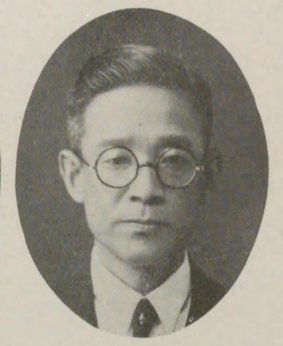
速水康次



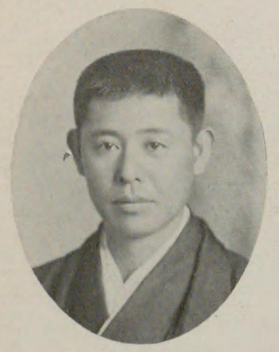
松岡茂吉郎



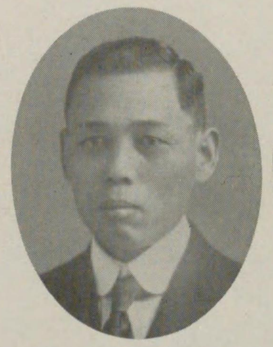
小笠原末太郎



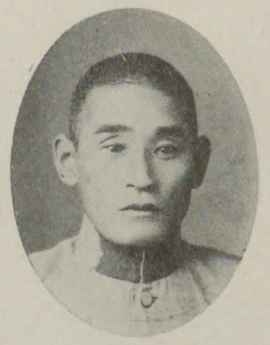
田中鉄三郎（元吉藏）



鈴木金兵衛



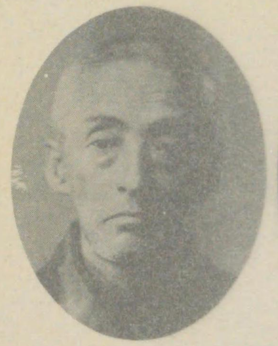
林　曹五郎



今井信太郎

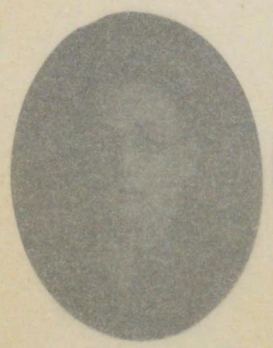
元市會議員（議席順）

野伴八左エ門



故田中鉄三郎

江父祖小三郎



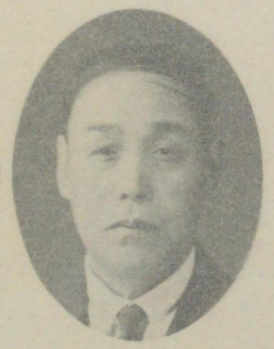
佐藤忠左エ門

柴田喜七

近藤彦三郎

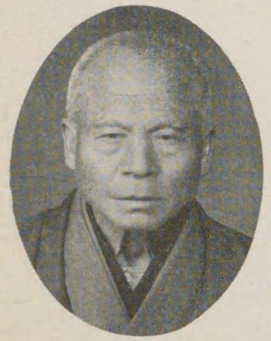
伴清八

河村清兵衛

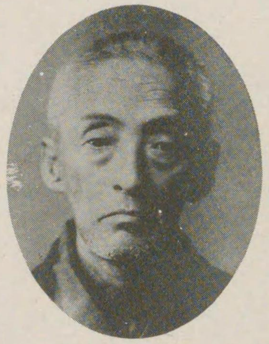


太田藤吉

元市會議員（順席議）

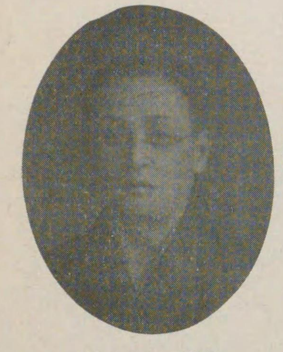


野伴八左エ門



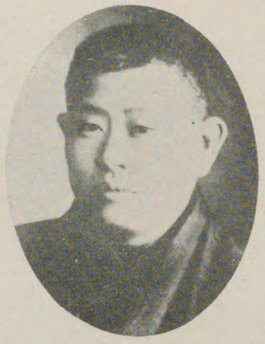
故田中鉄三郎

江父祖小三郎



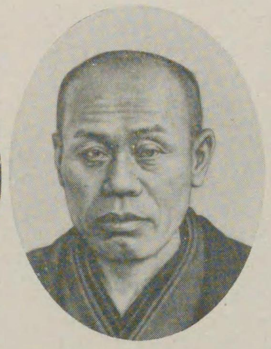
佐藤忠左エ門

柴田喜七

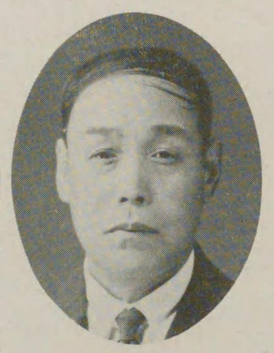


近藤彦三郎

伴清八



河村清兵衛

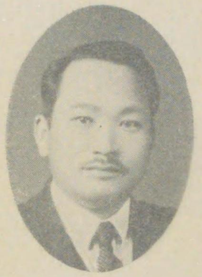


太田藤吉

臨時下水道課職員


師技藤齋


記書木鈴


補師技井松


手技國江


託囑島中

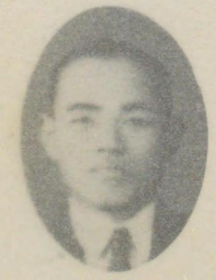

手技錘

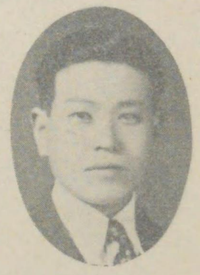

手技原菅


記書塚大

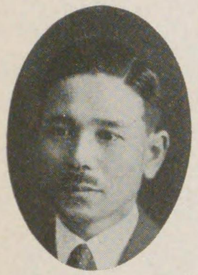

手技藤安


手技岡松

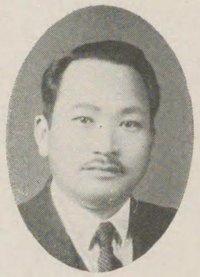

雇澤熊

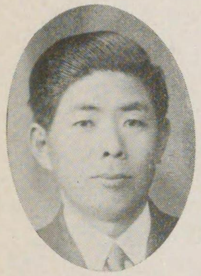

雇垣西

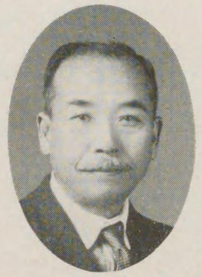
臨時下水道課職員

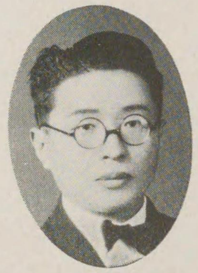

師技藤齋

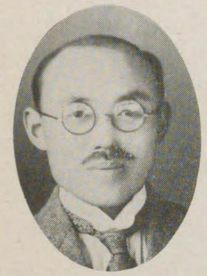

記書木鈴


補師技井松

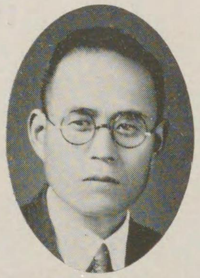

手技頭江


託囑島中

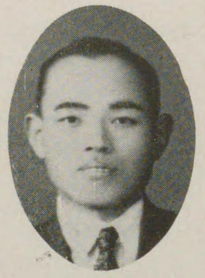

手技笹

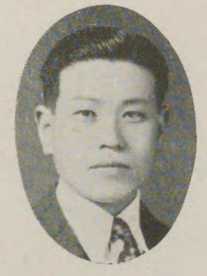

手技原菅


記書塚大

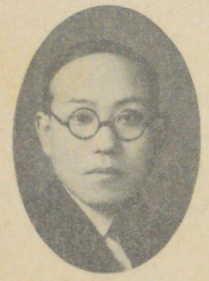

手技藤安

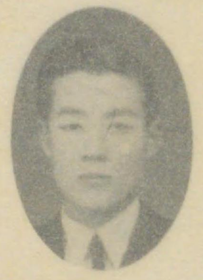

手技岡松

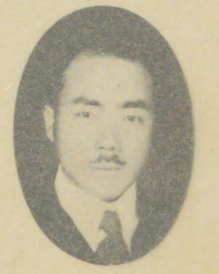

雇澤熊


雇垣西

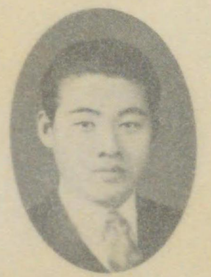
臨時下水道課職員


補記書口江


手技出平


補手技津谷小

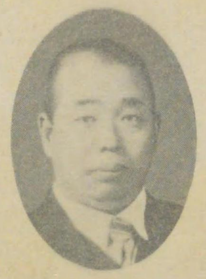

雇(文)齋


雇(力)藤安


補手技岡西

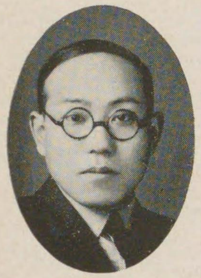

雇時臨村木

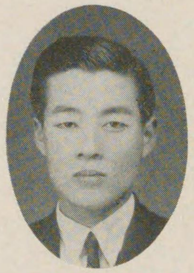

雇松植

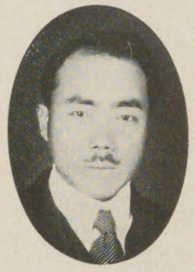

雇松戸

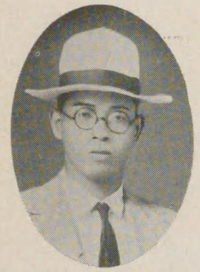

雇橋棚

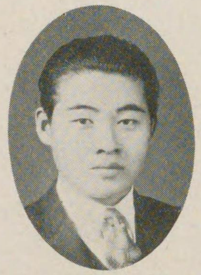
臨時下水道課職員

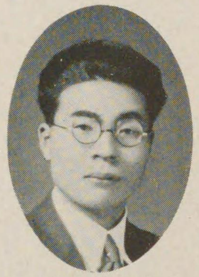

補記書口江

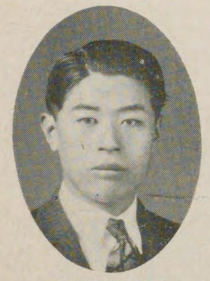

手技出平

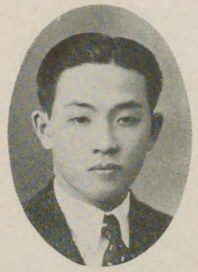

補手技津谷小

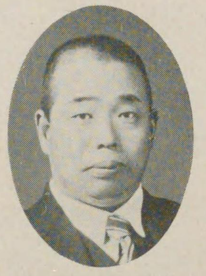

雇(立)藤齋

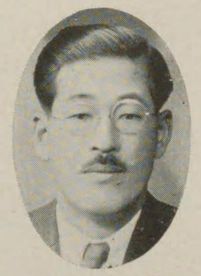

雇(力)藤安


補手技岡西


雇時臨村木


雇松植


雇松戸


雇橋棚

臨時下水道傭員


杉本久三男
伊藤勝義
山本多藏
清水文太郎
榊武雄
篠原幹
伴野倉一
伴野富士雄
伴野一雄
岡田源司
安福秀吉
杉山善一
深井金六
伊藤錠一
葛島新一
澤田光治
伊藤彦一
波多野康弘
星野吉治

臨時下水道傭員

榊　武雄　　安福秀吉

清水文太郎　　岡田源司

山本多藏　　伴野一雄　　葛島新一

伴野富士雄　　伊藤錠一

伊藤勝義　　深井金六　　波多野康弘

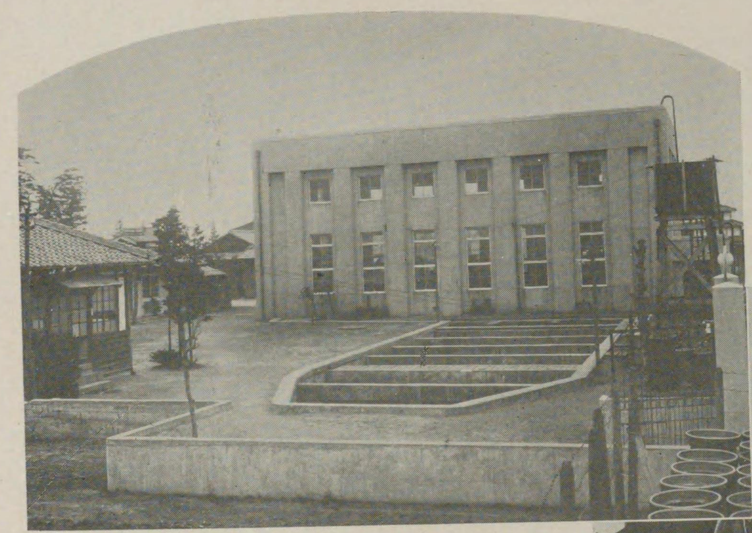
伴野倉一　　伊藤彦一

杉本久三男　　杉山善一　　星野吉治

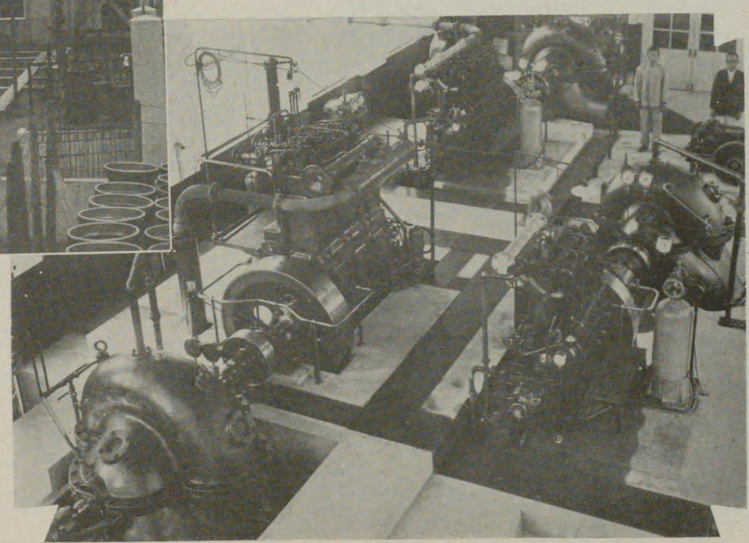
篠原　幹　　澤田光治

員傭雇水上時臨

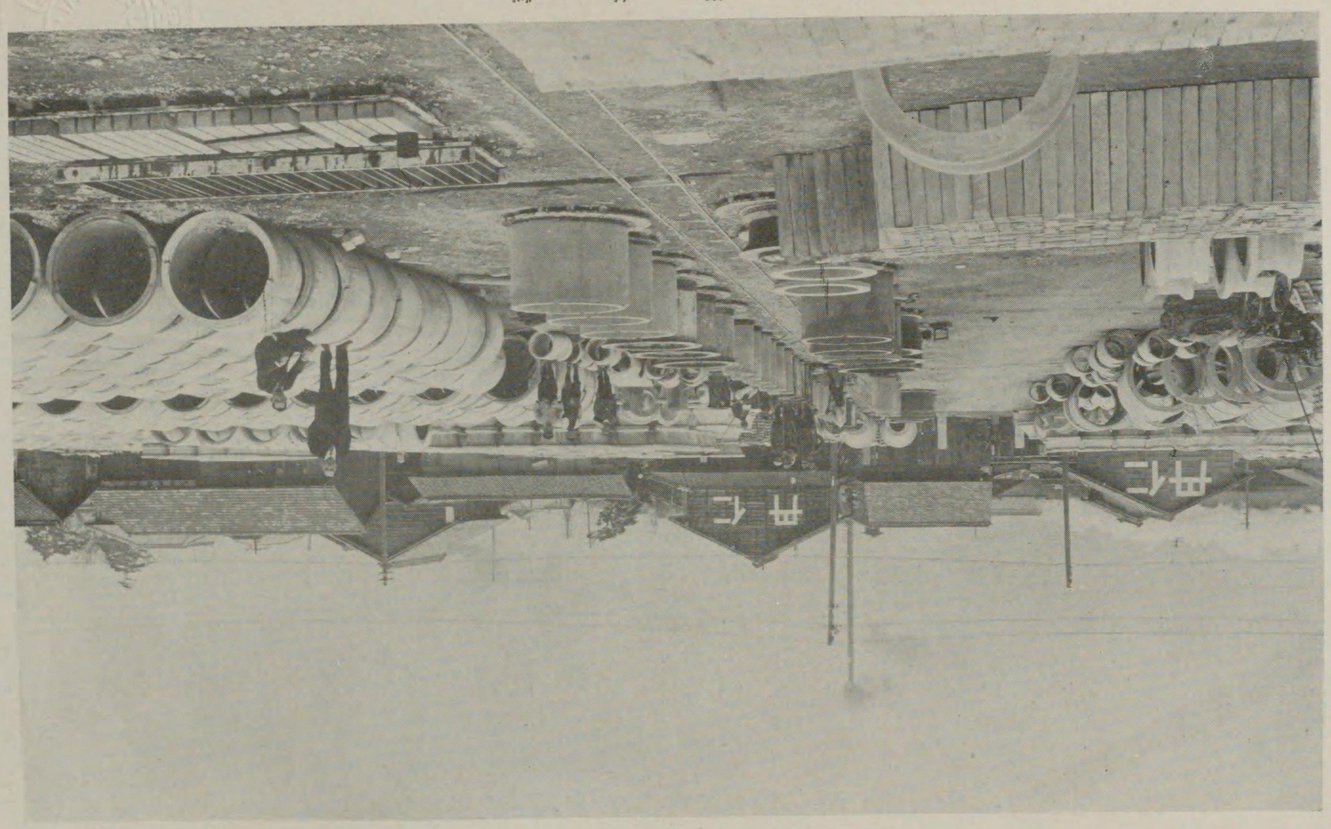
藤原	韓
黛田光治	黛田光治
沼三八本松	沼三八本松
星野吉治	沼山善一
中野倉一	中野倉一
藤田喜一	藤田喜一
黛井金六	黛井金六
近藤野理吉	近藤野理吉
中野富士雄	中野富士雄
藤田義一	藤田義一
山本金藏	山本金藏
中野一雄	中野一雄
葛島義一	葛島義一
岡田鶴吉	岡田鶴吉
水文太郎	水文太郎
輪	輪
雄	雄
定藏吉	定藏吉



抽水場全景

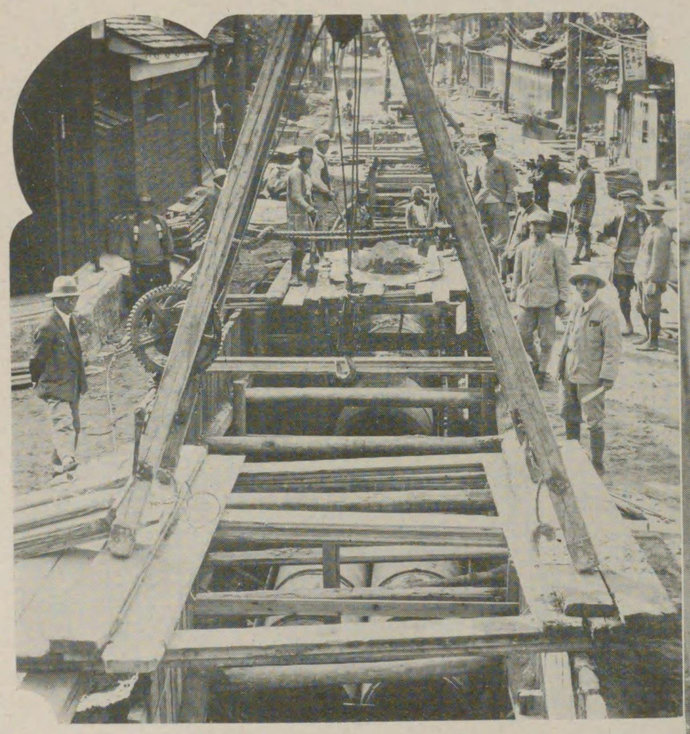


喞筒室內の一部

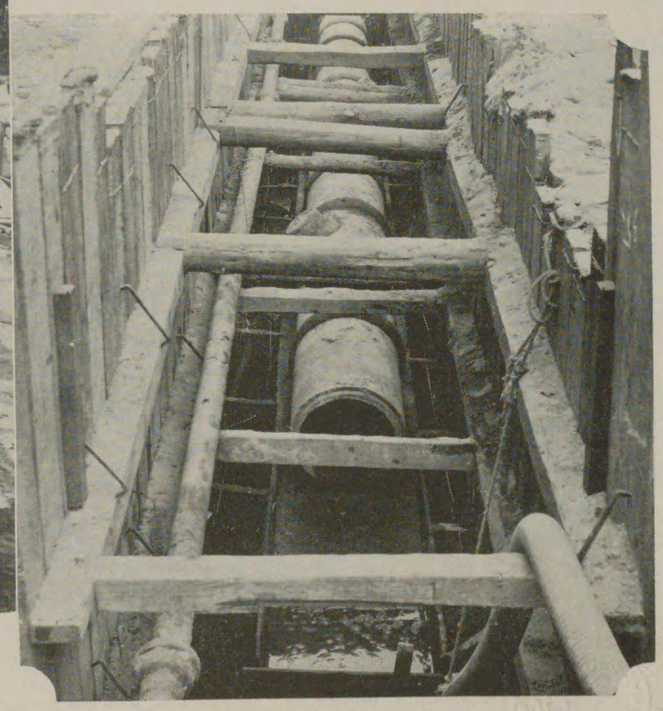


富士號發動機

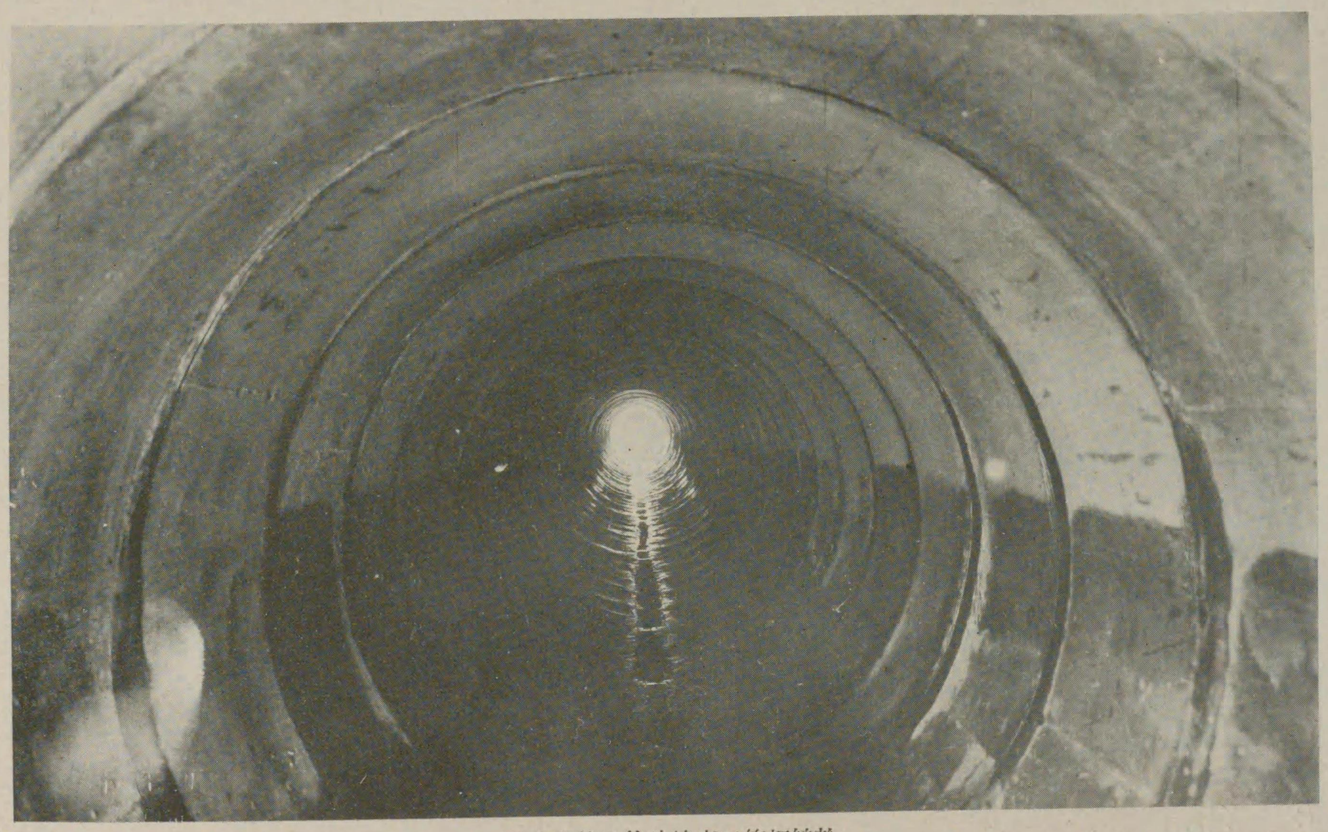
日本紡西南角下水管埋設基礎工事の狀況



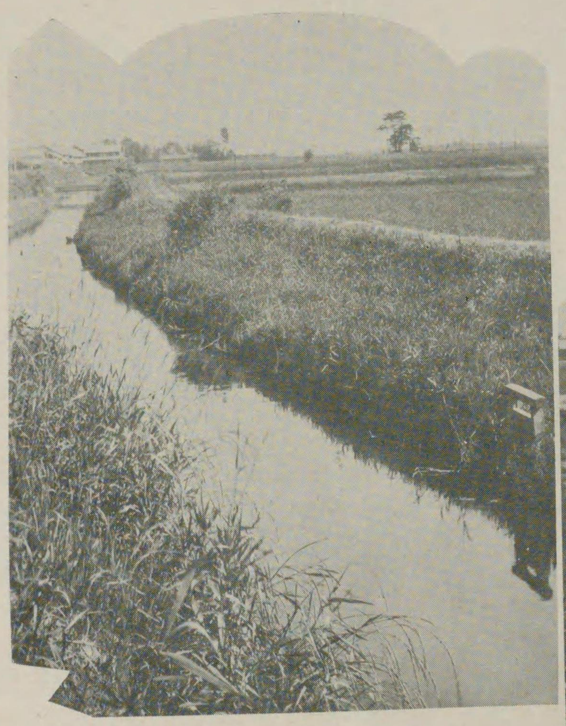
埋管工事の實況 其ノ一



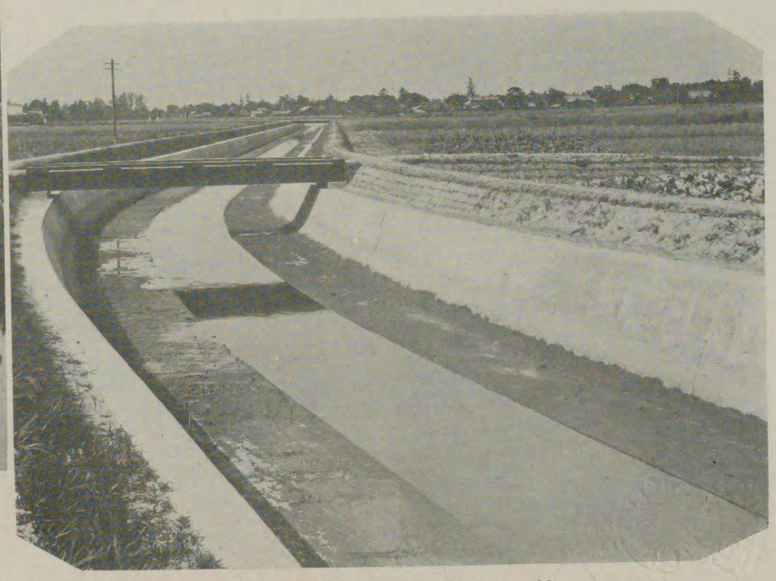
埋管工事の實況 其ノ二



幹線埋管工事竣功後の管内狀況

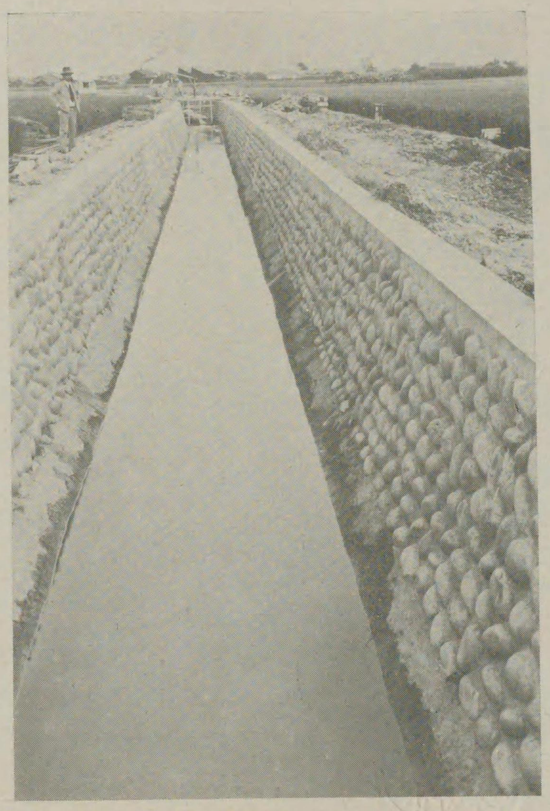


第一工區放水路修築前の狀況

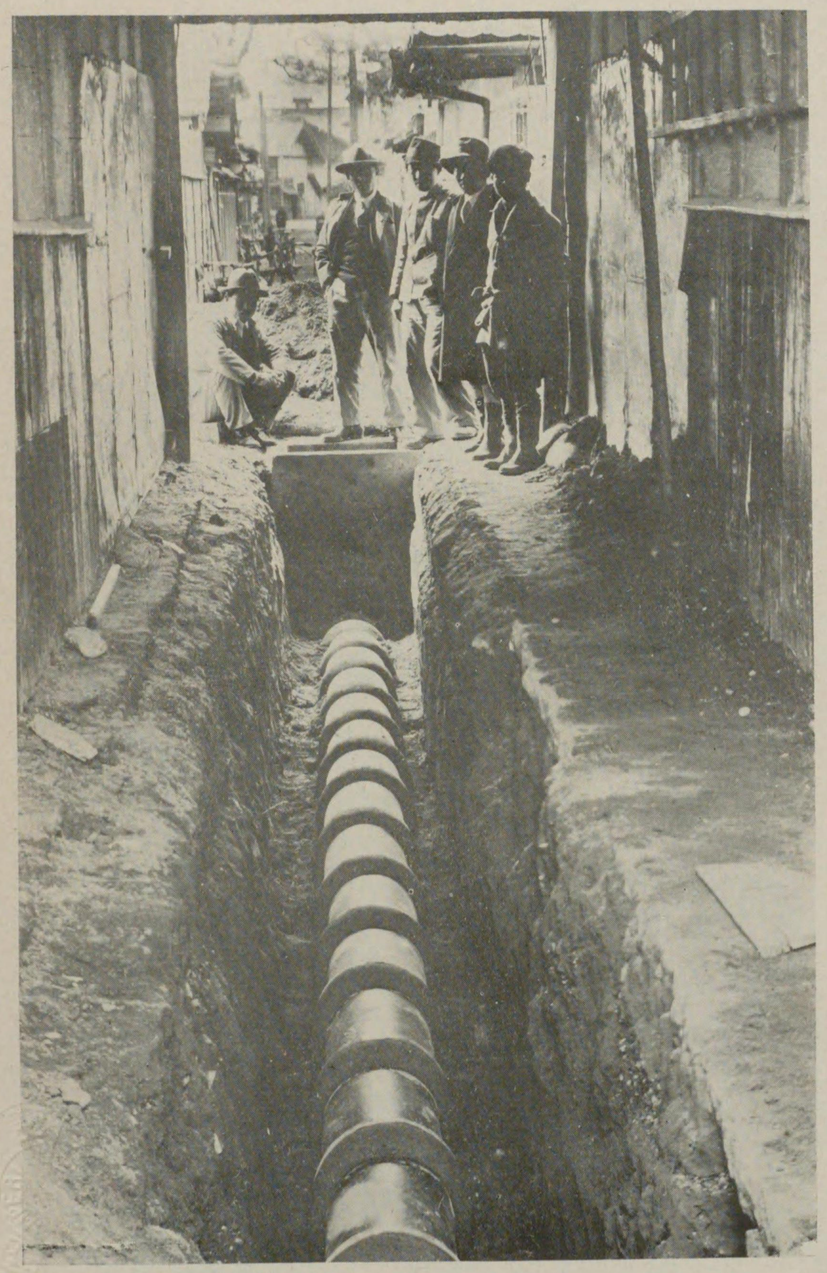


第一工區放水路竣功後の狀況

第四工區下水道吐口竣功後の狀況

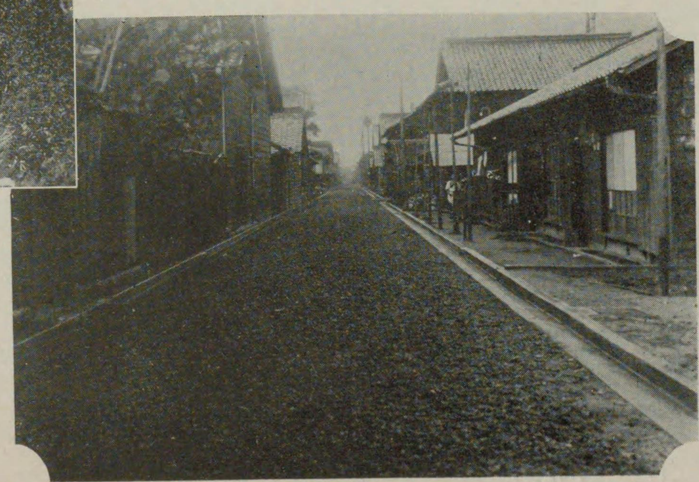


第二工區開渠修築工事竣功實況



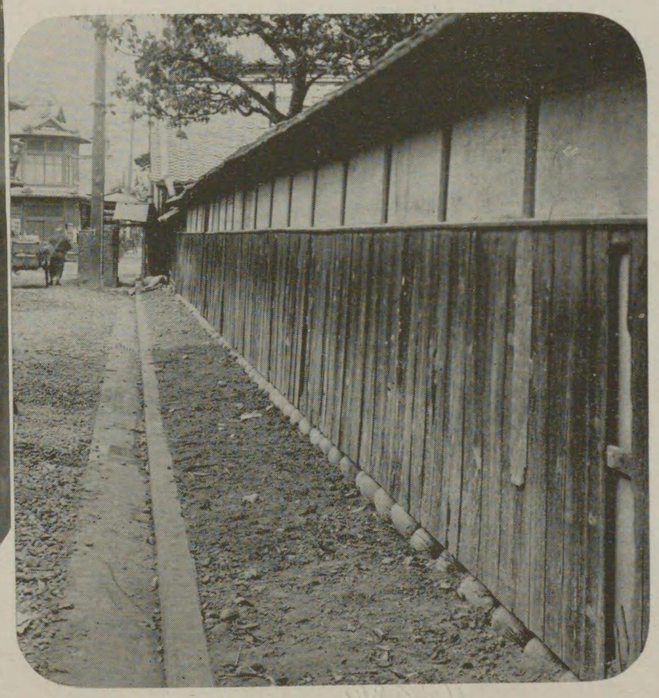
小下水布設狀況

況狀の前工施築修路水惡田川



況狀の後工施築修路水惡田川

況狀の前工施通町田神



況狀の後工竣溝側通町田神

序

我一宮市は南北を貫通する國道を中軸として東西に不規則に開鑿せられたる道路によりて形成せられたるもので、排水も亦何等統一せるものなく且つ土地低濕の爲め惡水停滯浸透井水に影響し又豪雨の際は雨水は汚水と混濁街路に汎濫し衛生上誠に寒心に耐えないものがあつた。故に町制時代より下水道施設の急務を唱へられたが、機運未だ熟さずして數年を經過した。其間町勢は隆々と進歩の波に乘つて市制へと躍進した。

是に於て大正十三年四月より本格的調査を進め大正十五年五月計畫案成るに及び六月一日市會の協賛を經て十五年十二月認可を得工費百五十萬圓を以て起工し昭和十一年三月市民待望の事業は豫定の通り竣功を見るに至つたのである。不肖本市長の任に就て日猶ほ淺く固より事業に參畫すること寡少な

りと雖も、先任市長の後を受けて統轄の任に當り今其の工成り將來本市住民の保健衛生の更新は勿論民生の福祉增進に寄與すること多大なるものあるを信じ最も欣幸とする所である。

顧ふに下水道起工以來十ケ年其間市會の改選さること三度、委員及市長並に關係職員に幾多の異動ありたるも、監督官廳の懇篤なる指導誘掖と委員及議政機關の熱烈なる貢獻と關係職員及從業員の終始撓まざる精勵と相俟つて有終の美を完ふし得たるものなりと確信し深甚の謝意を表する次第である

茲に下水道築造の沿革畧誌を刊して些か事業の報告を併せて記念とす、不肖此の完成に會ひ尙卷頭一言の所感を述ぶることを得るを無上の歡びとし敢て蕪辭を錄して序となす所以である。

昭和十一年五月二日

一宮市長　森　林　右　工　門

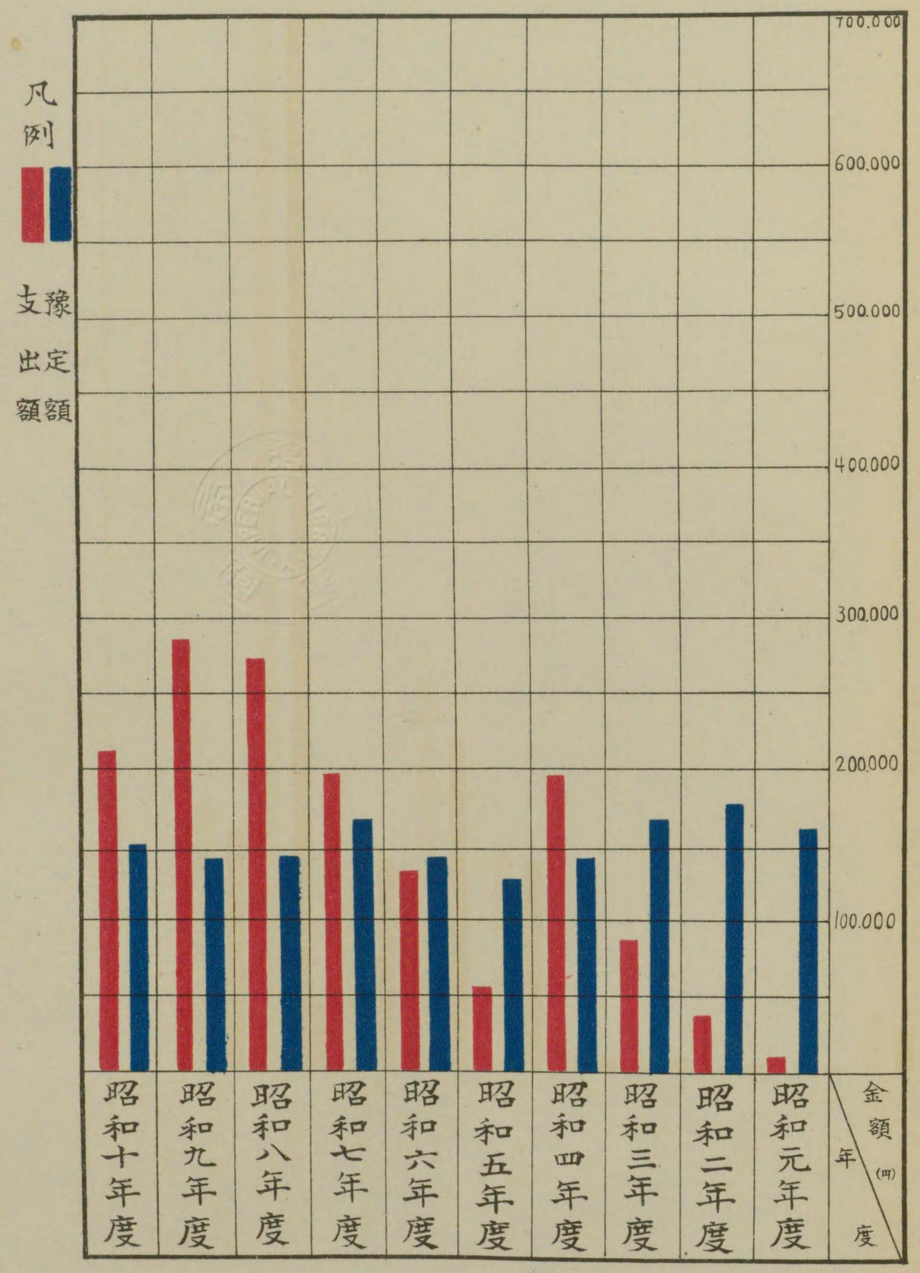
一宮市下水道略誌

目　次

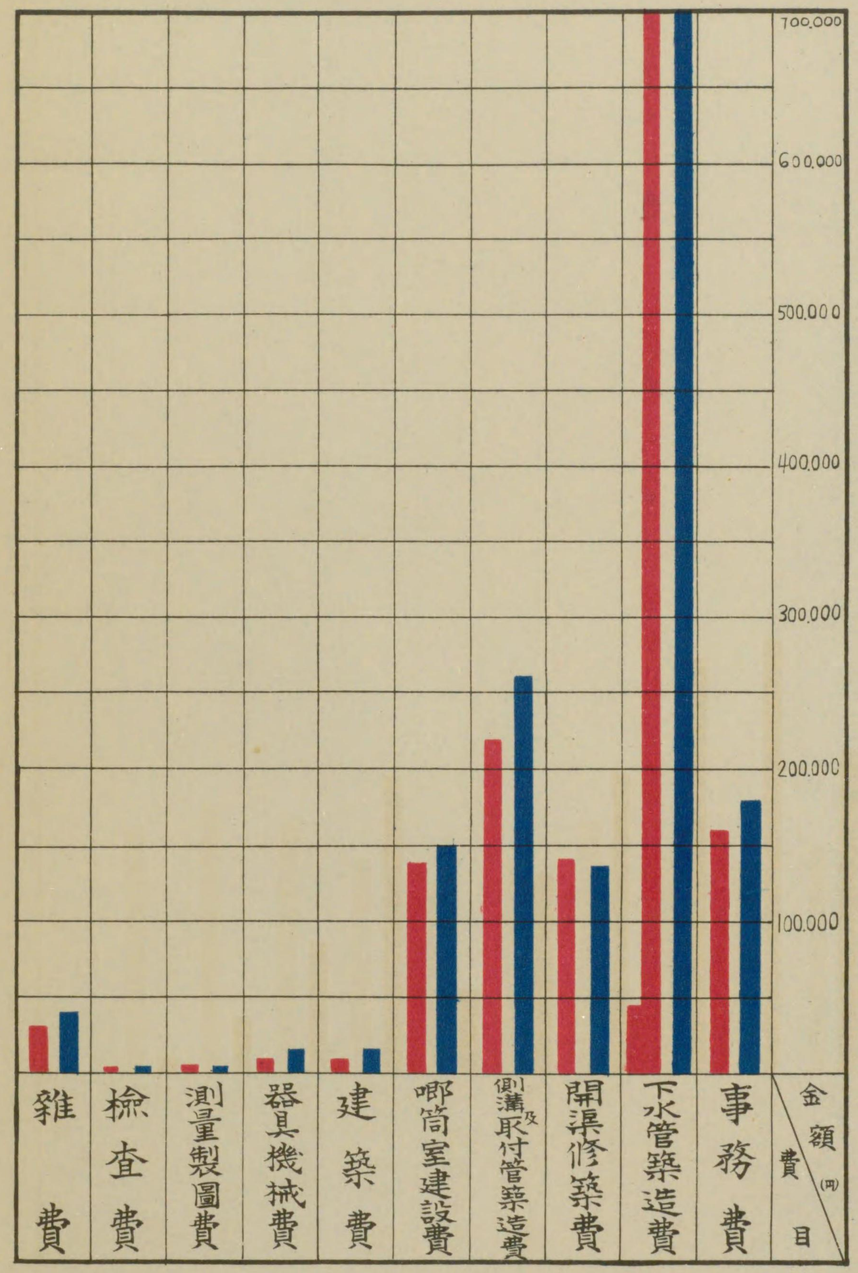
第六章　實施機關……五三

附記

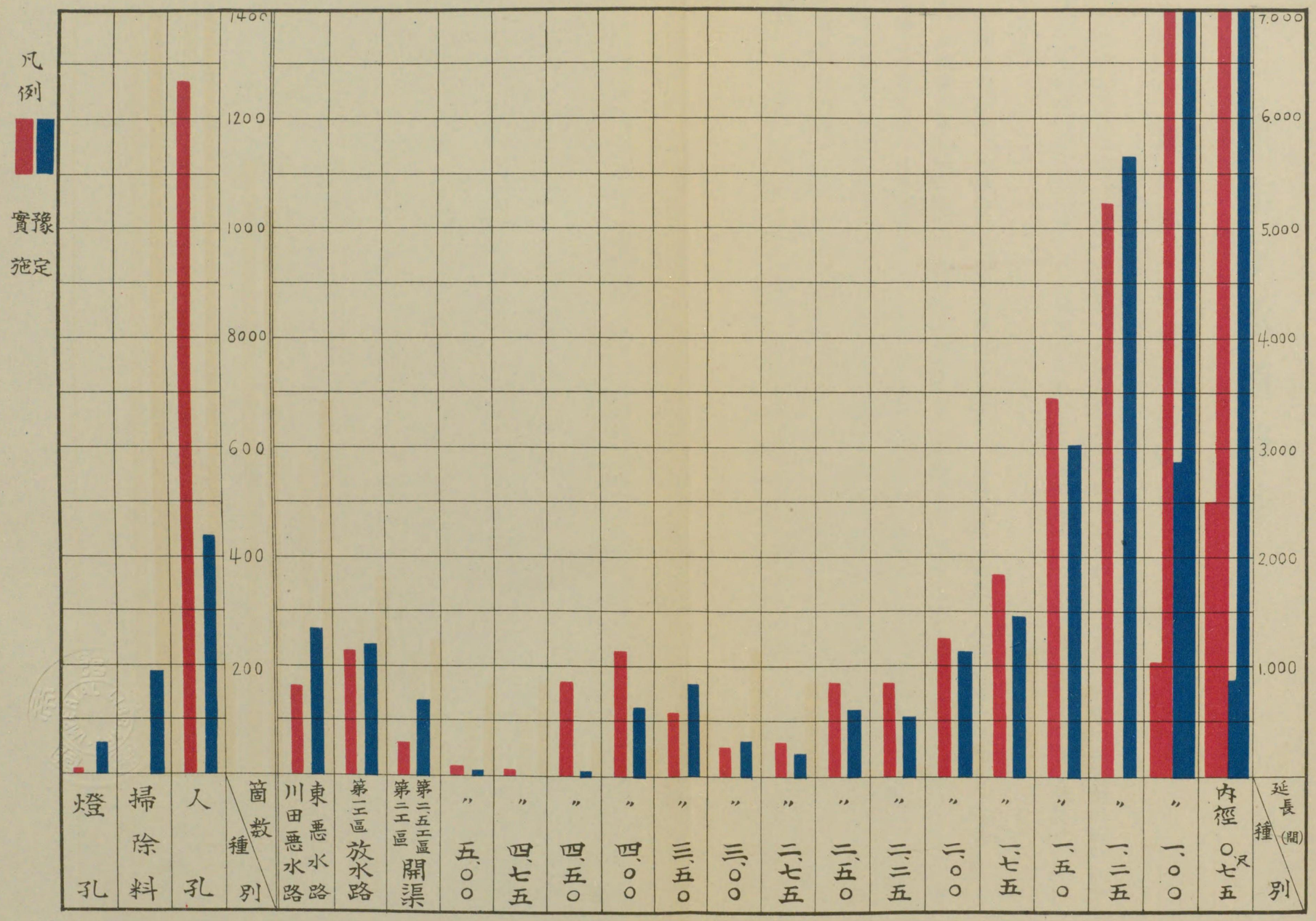
年度別支出一覽圖表



費目別支出一覽圖表



各種築造物出來高一覽圖表



一宮市下水道略誌

第一章　一宮市の沿革

一宮市の起源は極めて遠く、幾何の年所を經たるや詳ならざれども、今の國幣中社眞清田神社は、神武天皇即位三十三年三月三日に鎮座せられたりと言傳ふるによりても、既に其の當時開發せられしが如し。

元來此の地は、妙興寺村と共に眞清田莊をなし、鳥羽上皇の御息女八條院暲子內親王の所領なりしが、平賴盛の室大納言局が、八條院の女房たりし關係より、壽永二年九月廿五日其の領所となり、平家滅亡の際には一旦沒官領となりしを、賴盛の母池禪尼が源賴朝を助けし恩義により、同三年四月六日再び賴盛の所領に復歸し、其の子光盛其の孫女安嘉門院宣旨局之を傳へ、其の後宣旨局の妹たる久我通忠の室の所領に歸して遂に久我氏の家領となり、以て戰國時代に及べり、又一宮の名も早く既に東鑑、十六夜日記等に見え鎌倉時代より此の名ありしなり。斯くて戰國時代の末關十郎右衞門一宮城

を築きて之に居り、其子小十郎右衞門尉長安に傳へしが、長安は森長可に屬し天正十二年四月九日、長久手の役に戰死せり。

德川時代になりて慶長以來尾州藩の家臣瀧川氏外十七人の給知となりしが、寛永十一年藏入となり草高四千五百四石之に眞淸田神社の社領を加へ俗に五千石と呼べり。

正保元年代官熊澤與右衞門町割をなし、始めて市街地たる面目を整へ、尠からず住民をして百般の事項に涉りて利便を感ぜしめたり。

享保十二年村民の有力者相謀りて、村繁昌、村民救助を名として、市場の開始を時の代官美濃郡奉行栗田六之右衞門に出願し、毎月三・八の日に開立することとなり、之より各方面との取引は年と共に旺盛に赴き町の發達、繁榮を促せり。

斯くて明治維新となり諸政一變し爾來幾多の行政制度の變遷を經て、明治二十二年十月町村制施行に當り隣村一色村（戸數百五、舊高二百三十石）を併合の上町制を實施して一宮町と改稱せり。當時戸數二千五百、人口一萬一千餘なりしが鐵道の開通以來頓に活氣を加へたり。

明治二十四年濃尾大震災の際に激震圏內に屬し、町內の家屋過半倒壞し死者百八、負傷者無數を出し慘狀見るに忍びざるものありしも、幸にして官の救助と町民の努力とに依り、幾何もなく舊態以上

の觀を呈し所謂天災爲福の語を實現し、町勢は日新月歩の發展を遂げ、大正十年九月一日、町制を廢し其の區域を以て市制を施行せらるゝに至れり。當時戸數六千二百八十三、人口三萬七十五人なりしが、昭和十年國勢調査の結果は世帶數一萬九、人口五萬三千三百七十六を算するに至れり。

町制時代より市制時代に亘りて、一宮區裁判所、一宮警察署、一宮郵便局、縣立蠶業取締所支所、國立蠶業試驗所、一宮稅務所、縣立一宮中學校、市立一宮高等女學校、商工會議所、大日本紡績株式會社一宮工場、片倉製糸紡績株式會社一宮工場、東洋紡績株式會社一宮工場、其の他諸種の會社、組合事務所、銀行支店等の設置せらるゝもの甚だ多く商工業殷振を極む、特に近時、毛織物の產地として本市を中心に近傍町村を合せ年產額實に壹億五千萬圓に垂んとし其名聲籍甚たるものあり。

運輸交通機關として東海道省線は市街の中央部を貫通し、又名古屋鐵道は本市を樞軸として各地に通ず、即ち鐵道省線に連絡して尾西線は津島及彌富桑名方面に、蘇東線は起町に名岐線は北は奥町及笠松、岐阜市方面に、南は稻澤、批把島、名古屋に、一宮線は名古屋、小牧、犬山、高山地方に通じ又一宮市營乘合自動車は市の內外を疾走し、國縣道も亦市街を縱橫に貫通し運輸交通の至便なること實に稀に見る所なり。尙郊外に在りては耕地整理事業に伴ひ開通したる道路は、家屋の建築を促し市街區域年と共に擴大し大正十四年三月二十七日、都市計畫適用指定都市となり大正十五年十月一日に

は市街地建築物法施行せらる。

下水道築造工事も昭和元年度より昭和十年度に至る十箇年繼續事業として豫算百五十萬圓を以て施工、豫定の通り竣功し、又都市計畫事業は昭和四年十月三十日街路網を決定し、先づ第一期事業として九路線（延長四千三百三十一間六分）の新設擴築計畫を樹て昭和七年十月二十九日內閣の認可を受け七箇年繼續事業として實施するに至れり。尙上水道敷設事業も工費百五十萬圓を以て昭和九年度より三箇年繼續事業として目下工事施行中なるが之れが竣功を見んこと亦近きに在り。

本市の前途亦多幸なりと云ふべし。

第二章　事業起源

一、地勢及地質

本市は東經百三十六度四十八分、北緯三十五度十七分に位し、廣袤東西三十五町二十間、南北一里五町四十間、面積二百四十六萬五坪あり。濃尾平野の中部に位し東南西の三方面は廣濶十數里に涉る平野展開し、北方二里餘の地には木曾川東北より西南に繞流し川を隔てゝ美濃平野に臨む、土地極めて平坦にして一の山河丘陵なく、僅に國道を頂部として東西に緩勾配をなす。故に市の惡水排除の狀態も自然東西の二流域に限界せられ、西は稻荷惡水路より日光川に、東は川底惡水路によりて大江川に不完全ながら排除せられつつありたり。

地質は上層一、二尺までは粘土質を含む砂層にして、以下數十尺は赤褐色又は鼠色を帶べる粘土を含む細砂の厚層なり、又土地底濕の爲め、地下水高く湧出多量なれども飲用に適するもの極めて少數なり。

二、在來排水系統

（一）大江川に排水せる區域

大江川は用水路にして源を木曾川より取入る故に灌漑の關係上各所に堰堤を設け水位を高め引用に便す。本市附近に於ても亦此の狀態なり。故に水面は常に街地より高く直に排水すること困難なるを以て、川田惡水及神明惡水の二水路に集水し途中此の二水路は合して川底惡水となり市街地を距る千五百間の下流に於て大江川に合流せり。

而して之に排除せる區域は國道以東大江川に至る約二十五萬四千餘坪及大江川以東の市街地約十萬

一千餘坪の二區域にて何れも勾配緩にして排水最も困難なりき。

（二）日光川に排水せる區域

日光川は、本市の北部より西部に圍繞せる唯一の惡水路にして、水位は街地より低く大江川流域に比し勾配急なり。

而して大江川排水區域を除きたる西部全體約四十萬坪にして、稻荷惡水路及大宮浦惡水路、花池用水路の三水路により日光川へ排水せられしなり各水路の排水區域は、

稻荷惡水路區域は約八萬八千坪

大宮浦惡水路區域は約二十萬坪

花池用水路區域は約十二萬坪

にして各水路共不完全にして且鐵道横斷等の障碍あり排除完全ならざりき。

三、在來排水狀況

本市發展の跡を見るに、市の南北を貫通したる國道を中軸として、東西に不規則に開鑿せられたる街路によりて現下の如き街衢を形成するに至りしを以て、排水も何等統一せるものなく市内に於ける

汚水は排水路を有せずして自然に放任せられ自ら土壤に浸滲するに委するものあり、或は道路側溝によりて排水する區域あれども、其の構造の粗惡なる石積或は板柵にして流水を害し、加之土地平坦の爲勾配不足に起因し、汚水常に住宅附近に停滯腐敗し、惡臭を放ち、蚊蠅等隨所に孵化して、傳染病の媒介を爲し、又雨期に際しては汚水は雨水と混濁し溝渠に溢れて街衢に氾濫するを常とし、爲に住家は濁水と共に汚穢物の浸入を受け容易に排出せず、濕氣住宅内に充滿し、床板疊類等腐蝕することは勘からず、且又汚水は地下に浸透して井水に影響し、曩に市内全區域に渉りて井水二千九百九十一個に就き水質檢査をなしたる結果、飲料水に適するもの百中僅に二一、八を算するに過ぎず。一面市の戸口は益々增加し郊外地は漸次工場住宅等建築せられ、愈々排水に困難を來すべきにより下水道を一日も早く完備せしむるの外無きを認むること久しかりき。

四、下水道築造調査

大正九年度に於て下水道築造調査費金八百圓を計上し、屢々土木委員會を開催し、同年八月大阪市日本水道衞生工事株式會社と金八百圓を以て測量設計の請負契約を締結し、九月四日、同社鹽月技師來宮五日より測量に着手し四十日を以て終了、大正十年一月十八日設計圖面を接受し爾來考究中なり

しが、大正十年九月一日市制を布くに至り之が爲め市の施設計畫すべき事業も多端なれども下水道の布設は焦眉の急なるものとして、大正十三年度に於て該調査費金五百圓を計上し、四月七日愛知縣技師水谷鏘氏に依囑して其の實地踏査を乞ひ愈築造實施の方針の下に積極的調査をなすことゝなり、六月二十六日市會に於て調査費四千六百八拾七圓の追加豫算を決議し、九月二十日には市庶務規程を改正し第六課上、下水道係を設置し村本武を專任下水道係に任命し、又名古屋高等工業學校教授北澤忠男氏を顧問に囑託せり。而して當初は計畫全區域を日光川に放流するの案なりしが、愼重研究すること一ヶ年有餘大正十五年一月に至り第一、第三工區は大江川へ、第二、第四、第五工區は日光川へ放流することに決定。以後鋭意工事設計調書作製に努め、同年六月一日の市會に下水道築造案を提出し滿場一致原案を可決し、六月三日下水道築造認可申請書を其の筋に提出する運びに至れり。

第三章　事業計畫

一、總　說

本市の道路は概ね狹隘にして曲折多く且つ瓦斯管電纜等の埋設あるを以て、汚水及雨水に對し各別に下水道を築造することは、現在の道路幅員を著しく擴張せざる限り、絶對に不可能なるのみならず更に上水道鐵管埋設の必要あるを以て、之等作業上の困難を考慮し、一般に合流法を採用せり。合流法には此外工費の低簾、洗滌、維持の簡便なる等幾多の利益少からざるものあればなり。

今度下水道を布設せる區域は、衞生上最も急を要すべきもの、及近く市街地を形成すべき見込確然たるものに限りたり、こは畢竟市財政を考慮したる結果に外ならず、其の他は之を第二期に讓り他日の施行を期す。

大江川、日光川に放流する各流域は在來の流域に一致す、今各排水區域に付說明を加へん。

(一)　大江川排水區域

國道以東大江川以西の二十五萬四千餘坪を以て第一工區とし、大江川以東の街地十萬一千餘坪を第三工區とす。第一工區に於ける幹線は、從來の排水路の地域並地勢に應じ、公園通並神明線通りの二幹線を選定せり。第三工區は其の地勢に從ひ工事上の利便を考慮し、大正線より南へ岩倉線に出で大江川底を横斷し第一工區の幹線神明線に合流せしめたり。

右兩工區共土地低濕にして下水管に適する最少限度の勾配を以てするも管の終點に於て地表下十餘尺に及び自然流下によりては到底排除不可能の爲、終點柳戸町一丁目に抽水場を設け「ポンプ」により

て揚水の上放流す。尙抽水場下流放水路は勾配不同にして斷面一定せず、且兩側の施設不完備なるを以て全線に渉り底部及兩側は「コンクリート」にて築造し、完全なる改修を施したり。

（二）日光川排水區域

本流域は國道以西及眞清田神社以北の土地にして僅少なる底濕の土地あるも放水路なる日光川底と相當の落差あるを以て、排水上著しき困難を感ぜず自然流下によりて日光川へ放流す、本流域を分ちて第二工區第四工區第五工區とし、各工區の流域は從來と異らず。

第二工區は從來の稻荷惡水の沿線低地の地區にして、同惡水路を以て幹線とし西へ富古場町十四番地迄は管渠とし同所より下流は人家なく衞生上支障なしと認むるに依り開渠とし從來の惡水路を改築し辨天町地內なる從前の地點に於て日光川に放流す。之が構造は底部は「コンクリート」張、兩岸は玉石練積とせり。

第五工區は尾張一宮驛西の花池用水路の排水地域にして、集水上並施工上最も便なり、幹線を同區中央に位する市道久古見一號線に撰定し西へ一宮井筋迄進み同井筋を横斷し、北へ橋呑町二十一番地の二に至り、南橋呑線を西へ富古場町十七番地の五迄を管渠とし此所にて第二工區の開渠に合流せしめたり。

第四工區は眞清田神社以北の地域にして、幹線に撰定したる大正通は、同工區內最も低地にして大正通六丁目地先より西へ同五丁目に至る地點にて一宮用水下を横斷して、從前の大宮浦惡水の落口たる大正通二丁目（省線鐵道線路上流二百間）の地點に於て日光川へ放流す、本幹線は全部管渠とせり。

二、設計の基調

（一）汚水量

本市の人口は、大正十四年末の統計によれば三萬四千九百二十五人にして面積二百四十六萬餘坪を有し、一人の占有する面積七十坪四となり、內下水道布設區域に屬する人口は三萬一千人、面積七十六萬七千五百餘坪にして、平均一人當り二十四坪七五となり、其內密度の最大なるは第二工區の一人當り十六坪六とし、最少なるは第五工區の一人當り五十四坪二とす。計畫當時に於ては敢て人口稠密なりと言ふ能はざるも、近時商工業の發達と共に人口の增加著しきものあり。

最近數年間の人口增加率平均百人に付四、九人なるに徵し、其の急激なる增加を想像し得べく、尙將來一層の發展を期し得べきが故に之に對し相當の餘裕を見込み、現在並地勢等を參酌し左表の如く人口增加を推定し、汚水量決定の根本とせり。但し第一工區は區域最も廣大にして位置により人口增

加の趨勢も異なるものあるを以て二分して調査せり。

工區別	面積	大正十四年末密度		將來豫定最大密度	
		一人當坪數	人口	一人當坪數	人口
一	三四、六二六坪	一八・二	一三、九一六	一〇・〇 一三・三	一〇、五五七 一二、二〇五
二	八八、三七五	一六・六	五、三一八	一〇・〇	八、八三〇
三	一〇一、一九八	二二・五	三、六七九	一三・三	七、六〇八
四	二〇四、〇〇六	三四・三	五、九一八	一三・三	一五、二六三
五	一一〇、三三〇	五四・二	二、二一九	一三・三	九、〇四七
計	六六七、五三五	二四・二五	三一、〇五〇	一〇、六二	六二、五一七

汚水量は各戸より排除せらるゝ上水道の給水量を根據として決定すべきものなりとす。然るに本市は未だ上水道を有せざるを以て他都市の實例に徴し、且つ將來文化の進歩に伴ひ增量の餘裕を見込み五立方尺を一人一日最大汚水量と看做し、且時間的差異を考慮し其の二分の一即ち二・五立方尺を八時間に排除するものとし各管の流出汚水量を決定せり。

採用公式左の如し。

汚水量決定公式

$$Q=\frac{1000\times5}{2\times8\times60\times60}\times P=0.0868P$$

但シ Q＝汚水量立方尺/秒

P＝1,000ヲ單位トスル人口

（二）最大降雨量と雨水流下量

合流式下水道の計畫に當り最も必要なるものは短時間に於ける降雨量の精確なる觀測なりとす。然るに不幸にして本市は其設備を缺けるが故に止むを得ず、名古屋市に於ける愛知縣測候所の每時觀測の記錄及本市と最も近距離にして降雨の分布狀況に大差なき中島郡稻澤町元中島郡役所（本市の南方約一里）に於ける觀測一日最大降雨量とを彼此對比し、以て一時間最多雨量を推定せり。

愛知縣測候所に於ける觀測一時間最多雨量は、次表に記載せし如くにして其の最大は多く夏季に於て起り、既往三十四年間を通じ其の平均量を求むるに一時間三八、五粍となり、內四五粍以上を求むれば前後を通じて十回にして約四年に一回の割合なり。而して此の稀有なる雨量を標準として下水道を築造せんか、其の工費巨額に達し、市財政上實行不可能に陷るの虞あるべきにより、本計畫は一時間標準降雨量一吋四分の三即ち四四、五粍を採用せり、尙上記の標準降雨量の適否を精査考究せんに愛知縣測候所に於ける觀測一日最多雨量に對する一時間最多雨量の比率を求め、之を中島郡稻澤町に

於ける一日最多雨量に乘じて稲澤町に於ける一時間最多雨量を推定し、之を本市の一時間最多雨量とするを適當と認む。

愛知縣測候所の一日最大雨量は左表に示す如くにして、之に對する一時間最多雨量の比率は計算の結果平均三割五分に當れり、該比率は其の地理地形により各差異あるべきは論を俟たずと雖も、稲澤町と名古屋市とは距離僅に數里にして地形に於ても山嶽等更になく、降雨の分布狀況にも大差を生ずべき理由の存することなく相似たる狀況なれば、其の儘此の比率を採りて中島郡稲澤町の一日最多雨量に三割五分を乘じて一時間の最多雨量を求め、又稲澤町と隣接の地にある本市は之を採用して本市の最多雨量となす敢て不當にあらず。而して其の雨量は左表の通平均三一粍となり、四五粍以上の降雨は三十四年間僅に三回を出でずして、約十年間に一回の割合なり、畢竟本市附近の雨量は名古屋市の共れに比し比較的僅少なるを知る。

然るに名古屋市が愛知縣測候所に於ける毎時觀測の記錄に依り、標準雨量を決定し一時間雨量を四四、五粍と定め、明治四十三年以來下水道を築造し爾來著しき支障を見ざるに徵し、名古屋市の標準雨量を以て本市に適用するは蓋し安全なるのみならず、採定四四・五粍亦不當ならざるものと言はざるを得ず。

如上の理由によりて本市下水道は一時間四四・五粍（一吋四分の三）の降雨を標準となし各管の流域と土地の天然勾配とに應じ「ビュルクリー氏」公式を用ひ各下水管の流量を算することゝせり。又管徑の決定に當りては豫め固形物の停滯其の他の事情を慮り、第二工區及第四工區の幹線並準幹線に於ては、第二工區は計算流量の四割、第四工區は二割の餘裕を存せしめたり。

採用公式次の如し。

ビュルクリーチーグレル氏公式

$$Q = 1.0212CY\sqrt[4]{\frac{1224S}{A}}$$

但 Q＝流下量（毎秒立方尺）

S＝地表の平均勾配 1/500

A＝千坪を單位とする排水區域の面積

C＝0.5

Y＝1¾吋（標準雨量一時間44.5粍）

區別	年次	名古屋市				中島郡稲澤町			
		一時間最多雨量		一日間最多雨量		一日間最多雨量		推定一時間最多雨量	
		月、日	雨量	月、日	雨量	月、日	雨量	月、日	雨量
明治	二四	八・五	四三・〇粍	八・五	一四二・九	八・五	一二六・二粍	四四・二粍	
	二五	九・一三	二一・三	九・一三	七六・七	五・二七	一五九・二	二〇・七	
	二六	八・二四	三二・二	八・二八	一一五・二	四・二	九九・六	三四・九	
	二七	六・一三	五三・〇	三・一五	七六・四	三・一五	七〇・六	二四・九	
	二八	八・三	二八・〇	七・三〇	九九・六	七・二九	一六〇・〇	五六・〇	
	二九	九・九	三八・九	九・九	二四〇・一	九・八	二九七・二	一〇四・〇	
	三〇	六・一六	四九・六	九・二九	一六二・六	九・二九	一三三・九	四六・九	
	三一	八・一	五七・〇	六・五	一四四・九	七・一〇	一二〇・六	四二・二	
	三二	七・二二	三四・四	一〇・七	一六六・七	九・三	八五・〇	二九・七	
	三三	九・七	四七・一	一〇・九	一二五・三	七・八	六八・〇	二三・八	
	三四	九・二〇	二八・三	七・三	八二・一	一〇・二	九〇・〇	三一・五	
	三五	八・五	四〇・九	八・五	八五・一	七・一〇	一二二・八	四三・〇	
	三六	五・三二	二五・四	七・八	一〇四・三	九・一	八〇・〇	二八・〇	

區別	年次	一時間最多雨量ノ一日間雨量ニ對スル比	一時間最多雨量	一日間最多雨量	一日間最多雨量	推定一時間最多雨量
明治	三七	・二五	七・九	一一三・〇	三九・五	二四・八
	三八	・二六	七・一六	七〇・八	二四・八	二〇・六
	三九	・二七	九・一二	四二・三	一四・八	二二・四
	四〇	・二五	八・一五	八八・一	三〇・八	二三・〇
	四一	・二六	八・七	六四・〇	二二・四	二〇・六
	四二	・二〇	九・三	五九・〇	二〇・八	一九・一
	四三	・二五	八・三二	五九・五	二〇・八	一五・〇
	四四	・三一	六・一五	五四・五	一九・一	一五・七
	大正元	・四九	六・一六	四二・八	一五・〇	一四・〇
	二	・二三	一〇・三	四五・〇	一五・七	二八・七
	三	・三〇	九・三〇	八一・九	二八・七	二四・五
	四	・二六	八・四	七〇・〇	二四・五	二六・四
	五	・五五	五・七	七五・五	二六・四	三四・九
	六	・一四	九・二	一一六・三	四〇・七	四〇・七
	七	・二〇	六・二〇	九九・六	三四・九	三四・九
	八	・六二	七・一八	七一・〇	二四・八	二四・八

大正九	七・三〇	三三・一	八・四	七八・一	・四二	八・二七	一〇七・九	三七・八
一〇	九・八	二三・七	五・六	八〇・五	・二九	七・二三	八二・〇	二八・七
一一	九・二三	三〇・九	六・一〇	一一四・七	・二七	七・五	八九・二	三一・二
一二	六・九	二四・九	六・九	一〇一・九	・二四	一〇・一	八〇・五	二八・三
一三	一〇・九	五四・三	一〇・八	一四五・四	・三七	九・五	五〇・二	一七・六
平均		三八・五		二七・〇	・三五			三一・七

（三）下水管徑計算方法

下水管徑の計算は各管毎に其の流域及人口を調査し、前述の汚水量及雨水量を標準とし「クッター」氏公式により之を計算せり。然れ共管内を常に清淨に維持し汚物の停滯を防ぐは下水道管理上重要事項なるを以て相當の方法に依り、洗滌及掃除を施行すべしと雖も、尙多少の停滯を保し難く且つ豫想外の水量を慮り、管内流量は内徑二尺迄の管に於ては十分の七、二尺二寸五分以上は十分の八を滿流として計算し相當の餘裕を見込みたり。

而して流速は一秒時三尺以上の平均滿管流速を與ふるに努め、普通流入する固形物の沈澱を疑惧するの要なからしめたり。

三、設計の要旨

（一）管渠及矩形渠

下水道は特殊の事由を存するものを除くの外總て暗渠を用ひ、努めて惡臭の發散塵芥の流入交通の支障等を除くの策を採り、其の形狀は構造簡單にして最も實用的なる圓形管を多く採用せり。

下水本管の内徑及延長左の如し。

内徑	七寸五分	陶管	延長	五萬七千九十六尺七寸	
同	一尺	同	同	四萬八千四百十二尺七寸	
同	一尺二寸五分	同	同	三萬一千五百四尺一寸	
同	一尺五寸	同	同	九千六百二十四尺七寸	
同	一尺七寸五分	鐵筋コンクリート管	同	一萬一千百五十七尺六寸	
同	二尺	同	同	一萬一千七十尺二寸	
同	二尺二寸五分	同	同	七千七百十七尺八寸	
同	二尺五寸	同	同	五千百九十一尺一寸	
				五千二百三十六尺九寸	

同　二尺七寸五分　同　同　二千百六十一尺四寸
同　三　尺　同　同　千八百二尺三寸
同　三尺五寸　同　同　三千六百五十四尺六寸
同　四　尺　同　同　七千二百五十七尺七寸
同　四尺五寸　同　同　五千二百七尺六寸
同　四尺七寸五分　同　同　四百三十二尺

計　延長　二十萬七千五百二十七尺四寸

尙一部特殊管として⊗の如き二重管⊗の如き二條管、現場打馬蹄形渠、混凝土矩形暗渠を使用せり。各延長左の如し。

上部　一尺七寸五分
下部　三　尺
二尺五寸
二尺五寸　二　重　管　鐵筋コンクリート　延長　百七十三尺二寸
二　條　管　同　同　七十一尺一寸
横徑　五　尺　馬蹄形渠　同　同　五百五十七尺五寸
敷幅　四尺　深、二尺五寸　矩形暗渠　鐵筋コンクリート　延長　二千四百九十二尺五寸
同　同　二尺八寸　同　同　二千四百五十三尺九寸

計　延長　五千七百四十八尺二寸

總計　延長　二十一萬三千二百七十五尺六寸

下水管渠の材料撰擇に關しては、管徑の大小等に應じ相當の研究を遂げ、最も實利的なるものを採用するに努めたり。而して陶管は特に本縣の特產物なるのみならず、腐蝕磨滅の虞なく布設甚だ容易なるを以て小口徑の下水管には最も適當なるものなれば內徑一尺五寸迄は之れを使用せり。然れども內徑の大なるものは强度不充分、價格亦不廉なるを以て一尺五寸以上四尺七寸五分迄は鐵筋コンクリート管を使用せり。但し內徑一尺五寸のものは地質等の關係を考慮して兩者を併用せり。

（二）開　渠

開渠は本來低地にして埋管不可能なるか又は人家稀にして衞生上支障なしと認むる箇所に於て工費の節約を計らんが爲め築造するものにして、本市の開渠亦概ね在來の溝渠を改築するか或は田園の中にあり而して地質良好ならざるが故に、護岸は玉石練積及「コンクリート」を以て作り、基礎は杭地形を施し又は礫地形とし底部は「コンクリート」張立とせり。

其延長左の如し。

敷幅　五尺二寸　深　六　尺　延長　四百二十六尺

同　八尺　同　六尺二寸　同　千五十二尺
同　八尺　同　六尺七寸　同　四百三十三尺
同　十五尺　同　四尺　同　千二十尺
同　十五尺　同　五尺二寸　同　千八百六十尺
同　十八尺　同　五尺二寸　同　二千五百九十一尺
同　十六尺八寸　同　五尺二寸　同　千三百六十二尺

計　延長　八千七百四十四尺

（三）人孔及燈孔

(1)、人孔

人孔は下水管内の檢査及掃除の爲め出入する孔道にして、下水道の起點、屈折點及合流點に配置するの外直線部にありては管内徑の一二〇倍乃至一八〇倍毎に之を設置し、兼て通風を良好ならしむるものなり。

孔道上部は總て内徑二尺の圓形として、下部に至るに從ひ孔内作業或は下水管相互の連絡を圓滑ならしむる爲め、漸次之を擴大し孔底に「コンクリート」を以て圓狀の導水路を作り、流水の圓滑を圖ると共に汚水の停滯腐敗を防げり。其の構造は各管の接續する側壁の大部分は場所詰「コンクリート」なれども、其の上方は鐵筋「コンクリートブロック」を累積したるものにして、入口は鑄鐵蓋を以て覆ひ其の周圍には張石を行ひ、蓋には通風の爲氣孔を穿ち、直下には路上より流入の泥土を受ける爲め泥受皿を垂下せり。而して其の大さ及構造は用途に依り左の如く區別せり。

一、内徑三尺圓形人孔　九百二十二箇所
下槽内徑三尺にして本管内徑一尺二寸五分以下の管の會合點、並一尺七寸五分以下の中間部に設く

二、内徑四尺圓形人孔　百八十八箇所
下槽内徑四尺にして一尺七寸五分以下の管の會合點、並三尺管以下の中間部に設く。

三、内徑五尺圓形人孔　六十四箇所
下槽内徑五尺にして三尺以下の管の會合點並四尺以下の中間部に設く。

四、矩形人孔　八十八箇所
下槽内法三尺乃至九尺にして三尺五寸以上の管の會合點、並に四尺五寸以上の中間部に設く。

五、特殊人孔　二十一箇所
異形のものにして馬蹄形渠、伏越等の特殊の個所に設く。

人孔總計　千二百九十箇所

(2)、燈　孔

燈孔は下水管の屈折する箇所に設け、時々燈火を垂下し近接の人孔内より之を望視し、管内の檢査を便にせり。

燈孔　九箇所

(四)　吐　出　口

第二工區開渠吐出口は、日光川左岸堤防内に内法幅九尺高五尺長十尺四寸の場所打鐵筋「コンクリート」矩形暗渠となし、渠内には幅一尺の間仕切を設け、入口には角落しの設備をなせり。而して其の落口は玉石練張となし、水勢による川底の洗堀を防止し又對岸には長六十尺の玉石張護岸工を施せり

又第四工區幹線吐出口は日光川左岸葭原橋下流の袖に、コンクリート擁壁を築造し、管落口底部は長二十尺の間「コンクリート」を施工せり、又堤防天端にかゝる部分は鐵筋「コンクリートスラブ」を施工せり。尚吐口より下流百八十尺の日光川兩岸は玉石張護岸を施せり。

(五)　側溝及雨水桝

側溝は道路並宅地の一部よりの雨水を下水管に疎通せしめんが爲築造したるものにして、レの字型

として甲、乙の二種に分つ。甲は幅員三間未滿の道路に設け其幅八寸とし、乙は幅員三間以上の道路に設け其幅一尺とせり。

雨水桝は側溝中屈折箇所並約二十間毎に設け内徑五寸の陶管を以て下水管に接續せしむ、其の構造は方形にして鑄鐵製格子蓋を以て覆ひ塵芥の流入するを防ぎ、底部には沈澱槽を設け下水管内に土砂の流入するを防ぐ、之等の築造に關しては交通障害少く、且つ工事費、監督費を經濟的たらしむる爲め、本管工事と同時に小下水道の一部の取付をなし在來の流口を整理したる上に築造せり。

尚左記表示延長の一號とは全部新築したるもの、二號とは在來の側溝中「コンクリート」のものゝ緣石を利用して築造したるものなり。

甲側溝築造延長　一號　十四萬一千六百二十一尺
　　二號　一萬三百六十二尺

乙側溝築造延長　一號　十三萬一千九十五尺
　　二號　三萬七千七百三十七尺

雨水桝築造　三千六百十七箇所

(六)　各戸小下水取付

小下水道は各戸に屬する汚水、雨水を收容して之を公共下水道に連絡せしむるものにして、公共下水道と小下水道とは相俟つて初めて下水道の完全なる機能を發揮し得るものなり。故に之が促進には工事區域内の區長及町衞生組合長に趣旨傳達を依頼し、尙町内懇談會を開きて徹底に努めたり。而して公共下水道工事中と雖も、本管内部檢査を行ひ汚水を流入せしめて支障なきに至ると同時に小下水道工事を施行せしめたり。

各戸小下水布設個人負擔額は一戸當平均約金十五圓五十七錢、宅地一坪當約金參拾八錢なり。

小下水取付　四千九百十八箇所

小下水竣功出來高一覽

（昭和十一年三月十日現在）

區域	暗渠延長（單位尺）					桝（單位個所）			
	三寸管	四寸管	五寸管	六寸管以上	計	取付桝	集合桝	雨水桝	計
第一工區	二三、〇八一	七二、二三三	四二、〇三九	七、九五四	一四六、二九七	一、七七三	二、五六二	二、八三五	七、一七〇
第二工區	一〇、一八三	二八、八五九	一五、四九〇	四、六六四	五九、一九六	六九八	一、三九二	一、〇一三	三、一〇三
第三工區	四、二七三	二二、三三三	七、五四〇	二、一八六	二六、三三三	三八二	四三五	五二七	一、三四四
第四工區	九、二五三	三二、六五八	二〇、〇〇八	八、一二六	七〇、〇六五	八一三	一、四八〇	一、二五八	三、五〇〇
第五工區	五、九五二	一九、三三〇	一三、五三八	二、三三一	四〇、一四〇	五〇八	七八四	六九八	一、九〇〇

公設下水道工事と小下水道施設進行狀態

區域	戶數	面積（坪）	公設下水道工事着手年月日	小下水道受付開始年月日	公設下水道工事竣功時ニ於ケル小下水			
					戶數 出來高	戶數 出來高 %	面積 出來高	面積 出來高 %
第一、二工區	一、四九八	七五、三二四	四、三、一三	五、三、二九	五、四、一五	一二七	五、五〇七	六
〃三區	四三九	二三、四〇八	七、二、一〇	七、五、三一	七、六、八	一〇五	三、八〇三	一六
〃四區	一、〇〇二	五四、八五五	七、一、一五	七、四、二一	七、六、二八	三六六	一七、七四八	三二
〃五區	六四九	二九、六三三	七、八、一五	七、二、二一	八、一、二一	三四四	一六、五九〇	五六
第二工區	一、二九二	五六、五九二	八、六、二四	八、八、二	九、三、一〇	八二九	三三、九八二	六〇
第三工區	八三九	三六、二三八	八、七、一	八、二三、七	九、三、七	二〇七	一一、〇三〇	三〇
第四工區一	七七二	五一、一六二	九、四、二八	九、八、一八	一〇、二、二一	三五〇	二四、一二二	五四
〃二區	九二五	五八、三八四	一〇、二、一	一〇、二、一	一〇、九、三〇	三九七	一九、三三二	三三
第五工區	一、一七四	五四、一七二	九、三、一〇	九、一〇、一一	一〇、三、九	五六九	二五、〇四二	四六
計	八、五八九	四三一、三三六	—	—	三、二九四	三八	一五六、一五六	三六
計	五二、七四一	一六五、三九二	九八、六三五	二五、二五三	三四〇、〇三二	四、一七三	六、六五二	六、三三一	一七、一五六

区域	告示 小下水 告示年月日	告示 戸数 出來高	告示 戸数 %	告示 面積 出來高	告示 面積 %	告示後三ヶ月 戸数 出來高	告示後三ヶ月 戸数 %	告示後三ヶ月 面積 出來高	告示後三ヶ月 面積 %	昭和十一年三月十日現在 戸数 出來高	昭和十一年三月十日現在 戸数 %	昭和十一年三月十日現在 面積 出來高	昭和十一年三月十日現在 面積 %
第一、二工區	九、九、一	一、二〇二	八〇	五三、九〇九	七二	一、二五一	八三	五八、七〇一	七八	一、四〇八	九四	六八、一四六	九一
〃 三區	八、四、二六	二五九	六〇	一〇、四四一	四五	二九八	六九	二、五四	五〇	三九八	九一	一二、七三	七六
〃 四區	八、四、二六	八〇七	八二	三五、三六一	六五	八五四	八五	三九、八六八	七三	九八六	九九	四六、八五四	八六
〃 五區	八、八、三三	四五九	七二	三三、四七四	七六	四八三	七五	二四、〇〇三	八一	六一七	九五	二九、六〇三	九九
第二工區	九、七、一七	一、一二九	八七	四八、八三九	八六	一、一四三	八九	四九、九〇三	八六	一、二一九	九四	五二、八三一	九三
第三工區	九、七、一七	四九五	五九	二四、二三五	六七	五三四	六四	二六、二八九	七三	七二〇	八六	三〇、七九〇	八五
第四工區	一〇、一〇、一三	六一三	七九	三五、六九五	六九	六五二	八五	三七、五三六	七三	六九三	九〇	四八、六〇七	九三
〃 一區	一〇、一〇、一三	五〇六	五五	二四、三一六	四三	六三二	六八	三七、五九七	六五	七九一	八七	五三、六〇四	九三
第五工區	一〇、一〇、一三	八五六	七三	三九、九五二	七四	八九八	七七	四一、八八三	七七	九四三	九三	四九、四〇七	九一
計	—	六、三二	七四	二九五、二一二	六八	六、七四四	七九	三二七、四二四	七六	七、七七六	九一	三九七、六一六	九三

（七）抽水場

第三章總說大江川排水區域の項に於て述べたる如く、第一工區及第三工區は低濕の地にて自然流下によりては排水不能なるにより揚水の上排除す其流出量は次の如し。

第一工區　雨水量　六七・五二立方尺毎秒　汚水量　一・七二立方尺毎秒

第三工區　雨水量　三五・五二立方尺毎秒　汚水量　〇・六八立方尺毎秒

計　流出量　一〇五・四四　立方尺毎秒

右の流出量を排除する爲め四臺の「ポンプ」を用ふ、而して其原動機は電動機及「デイーゼルエンジン」にして其種類次の如し。

口徑	排水量	揚程	使用馬力	臺數	原動機種類
十二吋	三〇〇、〇（立方尺）	一三・〇（呎）	一五	一	電動機
二十四吋	最大 二、〇〇〇・〇 最小 一、六〇〇・〇	最大 一二・二 最小 九・二	五五	一	デイーゼルエンヂン
三十吋	最大 二、八〇〇・〇 最小 二、一〇〇・〇	最大 一二・六 最小 九・一	七五	一	同
三十吋	最大 二、九〇〇・〇 最小 二、二五〇・〇	一三・〇 一〇・二	一〇〇	一	同

抽水場には沈砂池を設け流速を毎秒約八寸に低下し土砂を沈澱せしめ、又塵芥除を設け浮游固形物を除く又吸水管に接し貯水池を設け放水口には放水池を設く、其他溢流路、汚泥池、建物等の設けあり、此等各設備の大要を述ぶれば左の如し。

(1)、沈砂池

沈砂池は、長さ四十尺幅二十四尺深十五尺五寸にして、此の池に於ける最大流水量毎秒百十六立方尺の時水深五尺五寸を有す、此斷面積百三十二平方尺にして間仕切及中央支柱を除くも有効流水面積百二十平方尺となり毎秒流速九寸を出でず、又最大流量以下の場合には流速九寸以下なるは明にして之れにより小粒の土砂を沈澱せしむるものなり。

塵芥除は前後二ヶ所に設け、前部のものは荒目（三吋）の鐵製格子造りとなし、後部のものは細目（二吋八分ノ一）のものとす。沈砂部は中央に間仕切を設け其高さは底部より五尺となし上部二尺の馬踏を設け掃除の際の通路とす、又兩側壁に接し同樣馬踏を設く、底部は中央に向ひ勾配を附す。

沈砂池の入口には角落を設け掃除に便せり。

(2)、貯　水　池

貯水池長四十四尺深十七尺とし幅は最小八尺最大十二尺とし底には沈砂池あり、一端に溢流口を設け不時の場合に於ける溢流に備ふ。

(3)、放　水　池

放水管に接し放水池を設け管口をして常に水面以下に保たしめ「ポンプ」始動の際「ポンプ」に滿水の便にす、又放水池の一端に溢流口を設け溢流路によりて貯水池と連結す。

放水池は長六十四尺幅最大十八尺最小八尺深九尺五寸とす。

(4)、溢　流　路

溢流路は、建物倉庫地下を利用し幅五尺深八尺五寸として放水池に近く角落を設く。

(5)、汚　泥　池

汚泥池は、沈砂池に接し長四十二尺幅八尺深六尺とし三尺は地下に埋込、地上高三尺とす、地下三尺は濾過層となし下部は大礫を敷き上部に至るに從ひ細砂層となす。底部には勾配を附し濾過水を四ヶ所に集め五寸の管により排水し更に一ヶ所に集水して貯水池に排除する裝置とす。

(6)、建　　物

「ポンプ」室（五十九坪六合）、倉庫（七坪五合）何れも鐵筋混凝土作りとす、其他木造の事務所（八坪六合五勺）管理人住宅（二十一坪一合二勺）職工住宅（十三坪二合五勺）物置及鐵工所（六坪九合六勺）の設けあり。

第四章　實施概要

一、工事實施經過

本工事は昭和元年度より昭和十年度に至る十ヶ年繼續事業として左記の如く施工せり。

一、大正十五年十二月十日　築造認可を得。

二、昭和二年六月四日　第一工區實施設計認可を得。
　此の排水面積約二十五萬五千坪之を五區に分つ。

三、同　年九月十三日　抽水場實施設計認可を得。

四、同　年十二月一日　製管所を設け製管事業を開始す。

五、昭和三年三月三十一日　抽水場敷地を買收す。

六、同　年十月六日　抽水場敷地に於て起工式を擧ぐ。

七、同　年九月十五日　抽水場築造及馬蹄形混凝土管築造工事を請負施工にて着手、昭和四年十二月二十六日竣功。

八、同　年十二月一日　川底惡水放流先護岸修繕工事請負施行にて着手、十二月二十六日竣功。

九、昭和四年三月十二日　第一工區の內第一區の埋管工事請負施行にて着手。

一〇、同　年四月二十五日　第四工區幹線の一部埋管工事請負施行にて着手、昭和五年一月二十四日竣功。

一一、同　年十一月十七日　第一工區の內第二區埋管工事管の据付け直營施工にて着手す。

一二、昭和六年一月十二日　第一工區の內第一區幹線馬蹄形渠既設部分修理工事直營施行にて着手、五月二日竣功。

一三、同　年五月二十日　第一工區第一、二區內幹線圓形管渠既設部分埋設替並に修理工事、同附帶取付管復舊、並に路面修築工事直營施行にて着手、十二月十二日竣功。

一四、同　年七月十五日　第一工區第一、二區內支線管渠既設部分埋設替工事、同附帶側溝取付管路面修築工事（其ノ一）直營施行にて着手、昭和七年一月二十一日竣功。
　同日津島線四ッ谷地內側溝、兩水桝並取付管工事直營施行にて着手、十二月二十五日竣功。

一五、同　年八月十五日　石山溫泉南埋管並人孔新設工事直營施行にて着手、昭和七年一月二十一日竣功。

一六、同　年十一月二十日　第一工區第一區幹線馬蹄形渠補助管新設請負工事にて着手、昭和七年三月二十七日竣功。

一七、昭和七年一月十五日　第一工區第四區下水管敷設工事同附帶側溝、雨水桝、取付管及路面修築工事請負施行にて着手、八月三日竣功。

一八、同　年二月十日　第一工區、第三區下水管敷設工事同附帶側溝・雨水桝、取付管及路面修築工事請負施行にて着手、七月四日竣功。

一九、同　年五月十日　第一工區の內第一、二區汚水桝取付管築造工事直營施行にて着手、昭和八年九月十八日竣功。

二〇、同　年七月一日　第一工區の內第一、二區支線管渠既設部分埋管替工事同附帶側溝取付管、路面修築工事（其ノ二）直營施行にて着手、十月十五日竣功。

同日第四工區字船付地內幹線一部管渠敷設工事請負施行にて着手、八月十日竣功。

二一、同　年八月十五日　第一工區の內第五區下水管敷設工事同附帶側溝雨水桝、取付管路面修築工事請負施行にて着手、昭和八年二月二十七日竣功。

二二、同　年九月一日　第一工區第二區支線管渠一部敷設工事同附帶路面修築工事直營施行にて着手、十月十五日竣功。

二三、同　年九月二十日　第一工區第二區の一部、雨水桝、取付管敷設工事請負施行にて着手、昭和七年一月六日竣功。

二四、昭和七年一月十日・第一工區第一、二區汚水桝取付管、築造工事直營施行にて着手、六月十三日竣功。

二五、同　年十月二十五日　第一工區放水路修築工事請負施行にて着手、昭和八年五月十五日竣功。

二六、同　年十一月廿四日　第二工區實施設計認可せらる。

排水面積約九萬九千坪之を二區に分ちて施工す。

二七、同　年十二月十日　第二工區開渠修築工事、及第二工區第一區下水管敷設工事及同附帶側溝雨水桝、取付管、路面修築工事請負施行にて着手、昭和八年六月十七日竣功。

二八、昭和八年三月一日　第三工區大江川橫斷ヶ所下水管敷設工事及同附帶工事路面修築及大江川護岸復舊工事直營施行にて着手、五月十五日竣功。

二九、同　年三月十五日　第二工區開渠及吐口修築工事請負施行にて着手、六月十七日竣功。

三〇、同　年四月一日　第一工區內汚水桝、取付管築造工事直營施行にて着手、九月十五日竣功。

三一、同　年五月一日　第一工區川田惡水路一部切替工事直營施行にて着手、六月十三日竣功。

三二、同　年六月三日　第三工區實施設計認可せらる。

排水面積約十萬一千坪之を一區として分割せず施工す。

三三、同　年六月二十四日　第二工區第二區下水管敷設工事同附帶側溝雨水桝、取付管及路面修築工事請負施行にて着手、昭和九年五月一日竣功。

同日第一工區第一區、第二區側溝雨水桝、取付管並に路面修築工事（其ノ一）請負施行にて着手八月二十一日竣功。

三四、同　年七月一日　第三工區下水管敷設工事同附帶側溝、雨水桝、取付管及路面修築工事請負施行にて着手、昭和九年四月十七日竣功。

三五、同　年九月一日　第一工區第一、二區側溝、雨水桝、取付管並に路面修築工事（其ノ二）請負施行にて着手、十一月二十九日竣功。

同日第一工區及第二工區第一區の内汚水桝、取付管工事（其ノ一）直營施行にて着手、十二月十日竣功。

三六、同　年九月二日　第二工區開渠底張及土揚敷、新設工事直營施行にて着手、十二月二十八日

竣功。

三七、同　年八月二十九日　去月二十六日の大雷雨の爲め崩潰したる第二工區開渠一部復舊工事直營施行にて着手、九月十日竣功。

三八、同　年十月五日　第一工區第二區の一部（明治町）下水管敷設工事及同附帶路面修築工事請負施行にて着手、十一月四日竣功。

三九、同　年十二月一日　第一工區第一、二區側溝、雨水桝、取付管、並に路面修築工事（其ノ三）請負施行にて着手、昭和九年三月五日竣功。

同日第一工區及第二工區の内汚水桝、取付管工事（其の二）直營施行にて着手、昭和九年六月十二日竣功。

同日第一工區第一、二區支線管渠既設部分埋設替工事同附帶取付管修理及路面修築工事（其ノ三）請負施行にて着手、昭和九年三月三十日竣功。

四〇、昭和九年一月三十一日　第四工區第五工區實施設計認可せらる。

第四工區は排水面積約二十三萬坪之を二區に分ち、第五工區は排水面積約十三萬坪あり。

四一、同　年三月十日第五工區下水管敷設工事及同附帶側溝、雨水桝、取付管並に路面修築工事請

負施行にて着手、昭和十年二月二十八日竣功。

四二、同　年三月十五日　第一工區第一、二區支線管渠既設部分埋管替同附帶取付管修理及路面修築工事（其の四）

第一工區第二區側溝雨水桝、取付管及路面修築工事（其ノ四）請負施行にて着手、九月七日竣功。

四三、同　年四月二十八日　第四工區第一區下水管敷設工事同附帶側溝、雨水桝、取付管並に路面修築工事請負施行にて着手、昭和十年二月二十八日竣功。

四四、同　年六月十日　第一、二、三工區汚水桝取付管工事直營施行にて着手、昭和十年五月一日竣功。

四五、同　年七月二日　第一工區第五區の一部側溝、雨水桝取付管並に路面修築工事請負施行にて着手、七月三十一日竣功。

四六、同　年十一月二日　第一工區放水路修築工事請負施行にて着手、昭和十年三月二十九日竣功

四七、昭和十年二月一日　第四工區第二區下水管敷設工事同附帶側溝、雨水桝、取付管並に路面修築工事請負施行にて着手、十月一日竣功。

四八、同　年二月二十一日　昭和九年十一月十六日申請下水道築造工事設計變更の件認可せらる。

蓋し東惡水路の修築工事を取止め川田惡水路を暗渠とするの件。

四九、同　年四月十一日　川田惡水路修築工事同附帶側溝雨水桝、取付管並に路面修築工事請負施行にて着手、昭和十年十月二日竣功。

五〇、同　年四月二十日　第一、二、三、四、五工區汚水桝取付管工事（其ノ一）直營施行にて着手、十月十日竣功。

五一、同　年九月一日　第一、二、三、四、五工區汚水桝、取付管工事（其ノ二）直營施行にて着手、昭和十一年一月十日竣功。

以上

各工區の面積及汚水並雨水量管延長表

（本表ハ出來高ヲ示ス）

東西區域	工區	面積	豫定人員	雨水量	汚水量	下水管線路延長
東部地域	第一工區	二五四、六二六坪	二、六二人	立方尺毎秒 六七・五三	立方尺毎秒 一・七二	七四、六一〇・六尺
西部地域	第二工區	九八、六九九	九、八〇	四七・〇七	一・一三	二六、八九六・〇
東部地域	第三工區	一〇一、一九八	七、六〇八	三五・五二	〇・六八	二三、五〇二・〇
西部地域	第四工區	三三〇、七〇〇	一七、三四六	六八・三二	一・五〇	五三、二二・六

西部地域	第五工區	一三八、九五〇	九、六九五	六一●五三	一●三三	三五、三四九●〇
計		八一四、二六三	六六、二九一	二八〇●八六	六●三六	二一三、五八〇●二

二、土地買收

昭和二年二月十二日委員會を開會し抽水場敷地を坪金拾圓にて買收の協議をなし、爾來地主と交渉の結果坪金拾圓五拾錢ならでは交渉纒らざるを以て、三月十六日午前十時より委員會、午後一時より市會を開き之を附議したるに市會に於ては實地踏査の必要ありとして午後三時より現地の視察をなし翌十七日の繼續市會に於て原案を可決せり、依て三月三十一日之を買收す。

抽水場用地　五四七坪　五、七四三・五〇円

三、家屋建築

本工事遂行に當りて建築したる重なる建物は抽水場建物の外製管所には「セメント」倉庫（鐵筋コンクリート造）工作場、工務所、宿直室、コンクリート混合機上屋、便所等此總建坪九拾坪七合五勺の建築を、抽水場前には「セメント」倉庫（四拾五坪）を、其他セメント試驗室、仕組構造見張小屋四棟（八坪）砂利溜桝材料置場、柵、板圍、打拔井戸等の建築をなせり。

今其費用を表示すれば左の如し。

抽水場建物費	二八、一四四圓
製管所建物費	三、四四〇圓
抽水場前倉庫等費	一、八八八圓
其他の建物費	二、九〇四圓
計	金參萬六千參百七拾六圓

四、購入物件

巨額の資金を投じて實施する、下水道築造事業遂行に當り最も考慮を要するは其計畫、施工の宜しきを得ると共に工事諸材料及機械器具類の購入なり。

故に之れが購入に就ては先づ材質、生產地、價格、納期等に付き、充分の調査をなしたるは勿論、購入の時機を誤らざらんことを期し、工事の進行と相俟つて最も合理的に對處し常に購入の成績を擧ぐるに努めたり。

而して各種物件の購入方法は、特殊の事情あるもの、外は信用ある多數の商店、會社より見積を徵し、取捨撰擇をなし重なる物件は委員會に諮りて決定せり、今茲に主要材料並に機械器具類に就き之を詳述するの煩を避け一括して表記すれば左の如し。

(一) 機械器具

名稱	形質	單位	數量	價格	摘要
喞筒	十二吋	臺	一	二、四六四円	抽水場揚水ニ使用 價格ハ附屬品荷作運賃据付試運轉費ヲ含ム
同	二十四吋 ディゼル機關	〃	一	四、三九六	〃〃
同	三十吋	〃	一	六、一四〇	〃〃
同	三十吋	〃	一	六、五六八	〃〃
同	眞空ポンプ及冷却ポンプ	〃	二	四五〇	〃〃
同	眞空ポンプ	〃	一	一、二七八	〃〃
同	四吋發動機直結	〃	二	二三六	埋管ニ際シ湧水替出ニ使用
同	四吋電動機連結	〃	二	二三六	〃
同	五吋電動機直結	〃	一	一七四	〃
同	四吋手押喞筒	〃	三	二三九	〃
電動機	十五馬力	〃	一	七一〇	抽水場揚水ニ使用 價格ハ附屬品荷造運賃据付試運轉費ヲ含ム
發動機	五十五馬力	〃	一	八、〇五〇	〃〃
同	七十五馬力	〃	一	一〇、四五〇	〃〃
同	百馬力	〃	一	一四、〇八二	〃〃
同	八馬力眞空喞筒直結	〃	一	一、〇七二	〃〃
電動機	五馬力四吋喞筒直結	〃	二	二〇〇	埋管ニ際シ湧水替出ニ使用
同	七馬力五吋喞筒直結	〃	一	一五七	〃
發動機	六馬力四吋喞筒直結	〃	二	一、二九〇	〃
道路輾壓機	六噸、四噸	〃	二	九、四〇〇	埋管後道路整地用
天井走行起重機		〃	一	一、五二〇	抽水場用
ギアカップリング		〃	一	一、六二〇	〃

(二) 主要材料

(本表は製管用材料及請負工事に對し支給したるもののみを揚げ請負人負擔の材料は含まず)

名稱	單位	數量	價格	摘要
陶管	本	一二一、四二八	九五、〇二二円	内徑一尺五寸以下五寸マデノ下水管渠築造ニ使用
セメント	袋	二一八、四五四	二七五、三八八	製管並ニ埋管用

砂利	立坪	三、一一八・七三坪	六八、一三三	〃	
砂	立坪	一、五九六・五五	二四、六九三	〃	
礫	立坪	一、四五三・八	二二、四五六	〃	
丸鐵及鐵線	貫	七八、〇九一	三三、一九二	〃	
割栗石	立坪	三五・六八坪	一、一九五	開渠、吐出口築造ニ使用	
玉石	個	三三、九〇〇	一、四三四	開渠護岸其他ニ使用	
人孔鐵蓋	個	一、三九〇	一八、九二九		
燈孔鐵蓋	個	八〇	三七〇		
雨水桝鐵蓋	個	四、〇七一	四、四五六		
足、手掛鐵物	個	三、三八八	六三七		
生松板、丸太押角 生杉丸太等			一〇、四三一	埋管用	

五、製作物件

下水管は主として交通頻繁なる市街地に布設するものなれば、努めて工事の容易なると竣功の速なるものを撰ばざるべからず、此の目的に適應するものは鐵筋コンクリート管とす。依て本市下水道築造に當りて製管所を特設し内徑一尺五寸以上、四尺七寸五分迄の鐵筋コンクリート管及ブロック、人孔、雨水桝等を製作したり。今其の種類別、數量を示せば次の如し。

名稱	形質	單位	數量	摘要
鐵筋コンクリート管	内徑一尺五寸	本	三、八三二	
〃	長サ三尺	〃	三、八三一	
〃	〃一尺七寸五分	〃	二、七一二	
〃	〃二尺	〃	一、七三五	
〃	〃二尺二寸五分	〃	一、七八八	
〃	〃二尺五寸	〃	七二〇	
〃	〃二尺七寸五分	〃	六七一	
〃	〃三尺	〃	一、二六二	
〃	〃三尺五寸	〃	三、六三六	
〃	〃四尺 長サ二尺	〃	二、五八六	
〃	〃四尺五寸	〃	二一六	
〃	〃四尺七寸五分	〃		
計			貳萬貳千九百八拾九本	

名稱	形質	單位	數量	摘要
人孔一上部號	3×2×2	個	五〇三	3×2×2トハ下底三尺、上底二尺、高二尺ヲ示ス以下之ニ準ズ
同二號	3×2×1.5	〃	五三二	〃
同三號	4×2×2	〃	二〇一	〃
同中一部號	4×1.5	〃	一八四	4×1.5トハ圓形ノ内徑四尺、高一尺五寸ヲ示ス以下之レニ準ズ
同二號	3×1.5	〃	一、〇〇九	〃
同三號	2.25×1.5	〃	二五	〃

計　貳千四百五拾四個

名稱	形質	單位	數量	摘要
基礎ブロック一號	七寸五分管用	個	三、四五八	埋管ニ際シ使用ス
同二號	一尺管用	〃	三、三一六	〃
同三號	一尺二寸五分管用	〃	一、九二三	〃
同四號	一尺五寸管用	〃	一、九五二	〃
同五號	一尺七寸五分乃至二尺七寸五分管用	〃	一、六四四	〃

同六號	三尺乃至四尺五寸管用	〃	三、二四六	〃
同四尺角		〃	六一	〃
同二尺角		〃	一〇	〃

計　壹萬五千六百拾個

名稱	單位	數量	摘要
側溝ブロック	個	二、二八五	
護岸ブロック	〃	四、〇七〇	
端石ブロック	〃	五、〇八八	
笠石ブロック	〃	七六	
雨水桝ブロック	〃	三、六五〇	
側溝緣石ブロック	本	九二、二九五	

名稱	單位	數量	摘要
雨水桝	個	三、六五〇	
基礎杭	〃	四七四	
枝管	〃	三、〇四二	
枝管蓋	〃	七、九三九	
胴木代用杭	本	三九	
境界杭	〃	三六〇	

第五章　財政

本市多年の懸案たりし下水道築造の事業を實施するには總工費百五拾萬圓の多額を要し、其の財政

方策の良否は事業の前途及市の一般財政上直接重大なる關係を有するを以て、最も堅實なる財政計畫を樹立すべく、各般に亘りて愼重嚴密なる調査研究を遂げたる結果、昭和元年度より同十年度に至る十ヶ年繼續事業とし、且國縣費補助金を受くべく極力其筋の了解を得るに努め、國庫補助金五拾萬圓縣費補助金貳拾五萬圓を受け、金七拾五萬圓を市費を以て支出すべきことゝなれり。然るに國、縣費補助金は年度割の長期なる爲め、一時的繰入金は過重となり、之の財源を本市財政上課稅に需むることは到底不可能なるを以て、大部分は起債に需むべく計畫を樹て大正十五年六月一日市會に於て繼續年期及支出費設定及起債の件を決定し、同年六月七日、內務大藏兩大臣に起債許可の稟請をなし昭和元年度より昭和三年度迄三ヶ年分金二十四萬七千圓の許可を得たるも、國、縣費補助の年度割交附金初年度に於て意外に少額なりし爲め、昭和二年度及三年度の事業遂行上支障を來すを以て、之れを昭和三年二月十日金參拾八萬貳千圓に變更の許可を得、次で昭和四年六月二十一日昭和四年度より同六年度に至る三ヶ年の起債額金參拾參萬貳千圓、次で昭和八年三月廿八日、昭和七、八兩年度の起債額貳拾參萬八千圓、次で昭和十年三月廿九日昭和九、十兩年度起債額金參拾參萬圓の許可を得たり。此起債許可總額金百貳拾八萬貳千圓は遞信省、內務省預金部、日本生命保險株式會社等より事業年度に分割して借入れをなし、五ヶ年据置き其後十ヶ年間に均等年賦償還することゝし、其の償還財源には國縣費補助金及一般歲入金を充當することゝせり、而して其利率は初めには八分、六分三厘、五分四厘四分八厘等種々にして又比較的高率のものもありたれども、之れ等は順次低率のものと借替へ償還をなし、昭和十一年三月末借入元金現存額百拾參萬八千八百九拾六圓にして利率は何れも四分五厘以下のものゝみとなれり、今起債の年度割を示せば左の如し。

昭和元年度	金八　萬　圓
同　二年度	金拾六萬七千六百圓
同　三年度	金拾參萬四千四百圓
同　四年度	金拾壹萬六千圓
同　五年度	金拾　萬　圓
同　六年度	金拾壹萬六千圓
同　七年度	金拾參萬八千圓
同　八年度	金拾　萬　圓
同　九年度	金拾參萬貳千圓
同　十年度	金拾九萬八千圓

之の起債を繰入れたる各年度別收支左の如し。

收入

年度別＼區分	補助金 國庫	補助金 縣費	補助金 市費	市債	繰入金	計
昭和元年	—	—	八〇、〇〇〇円	—	八〇、〇〇〇円	
〃 二年	一、〇〇〇円	二、五〇〇円	一六七、六〇〇	三、九〇〇円	一七五、〇〇〇	
〃 三年	一、〇〇〇	三、〇〇〇	一三四、四〇〇	一七、六〇〇	一六五、〇〇〇	
〃 四年	一、〇〇〇	三、〇〇〇	一二六、〇〇〇	二、〇〇〇	一四〇、〇〇〇	
〃 五年	一、〇〇〇	三、〇〇〇	一〇〇、〇〇〇	二、〇〇〇	一二五、〇〇〇	
〃 六年	一、〇〇〇	三、〇〇〇	一二六、〇〇〇	二、〇〇〇	一四〇、〇〇〇	
〃 七年	一、〇〇〇	六、〇〇〇	一三八、〇〇〇	二〇、〇〇〇	一六五、〇〇〇	
〃 八年	一、〇〇〇	七、〇〇〇	一〇〇、〇〇〇	三、〇〇〇	一四〇、〇〇〇	
〃 九年	一、〇〇〇	六、三〇〇	一三、〇〇〇	八〇一	一四〇、〇〇〇	
〃 十年	一、〇〇〇	一〇、八〇〇	二七、二〇〇	一、〇〇〇	三三〇、〇〇〇	
計	九、〇〇〇	八〇、五〇〇	一、三〇一、二〇〇	一〇九、三〇〇	一、五〇〇、〇〇〇	

備考　市債百參拾萬壹千貳百圓の豫定の所、昭和十年度に至り工事費殘額を生ずる見込にて壹萬九千貳百圓の起債を取り止めたるを以て起債總額は百貳拾八萬貳千圓となれり。

支出

年度別＼區分	給料	雜給	需用費	工事費	計
昭和元年	五七、一四円	一、五〇一、六六円	八三九、六三円	七、三〇八、九二円	九、七〇七、三四円
〃 二年	七、一二六、七二	二、三二六、一五	二、一一八、四一	二五、五一五、〇三	三七、〇六六、三一
〃 三年	八、〇四六、六八	二、二六六、七二	三、七四七、一二	七三、一八九、一二	八七、一〇九、六三
〃 四年	九、四九二、七七	二、九三四、九九	一、七八五、二六	一八一、一七三、九五	一九五、三八六、九七
〃 五年	八、三〇五、四二	三、九四二、二八	一、五八九、四二	三九、五〇六、〇八	五三、三四三、二〇
〃 六年	二、七三九、五三	四、七七九、八七	一、九五九、一七	一二三、五六五、九二	一三二、〇四四、四九
〃 七年	一三、六〇〇、六七	六、〇三五、一四	一、七八三、六二	一七五、五四四、七九	一九六、九六四、二三
〃 八年	一四、八二八、一五	七、六二六、八二	一、四八三、七〇	二四八、四八八、九九	二七二、四三七、六六
〃 九年	一五、三八二、〇〇	六、三四一、〇〇	七三一、一七	二六三、四七九、四〇	二六五、九三四、五八
〃 十年	一六、〇〇〇、〇〇	一九、〇三五、七九	二、八八四、〇〇	一七二、八九五、八一	二一〇、八一五、六〇
計	一〇四、五六九、〇八	五六、六四一、四三	一八、九二一、五〇	一、三〇〇、六六八、〇〇	一、四八〇、八〇〇、〇〇

一宮市下水道築造工事國庫並縣費補助年度割一覽表

年度	國庫補助	縣費補助	合計
昭和二年度	一、〇〇〇円	二、五〇〇円	三、五〇〇円
〃 三年度	一、〇〇〇	一二、〇〇〇	一三、〇〇〇
〃 四年度	一、〇〇〇	一二、〇〇〇	一三、〇〇〇
〃 五年度	一、〇〇〇	一二、〇〇〇	一三、〇〇〇
〃 六年度	一、〇〇〇	一二、〇〇〇	一三、〇〇〇
〃 七年度	一、〇〇〇	六、〇〇〇	七、〇〇〇
〃 八年度	一、〇〇〇	七、〇〇〇	八、〇〇〇
〃 九年度	一、〇〇〇	六、二〇〇	七、二〇〇
〃 十年度	一、〇〇〇	一〇、八〇〇	一一、八〇〇
〃 十一年度	一、〇〇〇	一三、九〇〇	一四、九〇〇
〃 十二年度	一〇、〇〇〇	一四、〇〇〇	二四、〇〇〇
〃 十三年度	一〇、〇〇〇	一四、〇〇〇	二四、〇〇〇
〃 十四年度	一〇、〇〇〇	一四、〇〇〇	二四、〇〇〇
〃 十五年度	一〇、〇〇〇	一四、〇〇〇	二四、〇〇〇
〃 十六年度	二〇、〇〇〇	一五、〇〇〇	三五、〇〇〇

〃 十七年度	二二、四〇〇	二〇、〇〇〇	四二、四〇〇
〃 十八年度	四〇、六〇〇	二五、〇〇〇	六五、六〇〇
〃 十九年度	四〇、〇〇〇	二五、〇〇〇	六五、〇〇〇
〃 二十年度	五〇、〇〇〇	一四、六〇〇	六四、六〇〇
〃 二十一年度	三〇、〇〇〇	—	三〇、〇〇〇
〃 二十二年度	七〇、〇〇〇	—	七〇、〇〇〇
〃 二十三年度	七〇、〇〇〇	—	七〇、〇〇〇
〃 二十四年度	五八、〇〇〇	—	五八、〇〇〇
〃 二十五年度	四九、〇〇〇	—	四九、〇〇〇
合計	五〇〇、〇〇〇	二五〇、〇〇〇	七五〇、〇〇〇

第六章　實施機關

一、市　會

大正十三年四月以後通常豫算市會、外特に下水道の件により市會を開くこと十二回、市參事會を開

くこと一回なり。而して其間市會議員に當選せられたる諸士は實人員七十八名なり。

二、委員會

初め下水道築造に關しては、市是調査委員會に於て審議し來りたるも、大體の成案を得たるを以て大正十四年十一月十八日市會の議決を經て臨時上下水道委員會規定を制定して同委員を選擧し、上水道の調査をも兼ね居たるが、昭和八年九月に至り上水道の調査も完了し同工事も施行する運びに至れるを以て、同年十一月二十一日臨時上下水道委員會規定を廢止し、改めて臨時上水道委員會規定及臨時下水道委員會規定を制定するに至れり。

前記各委員は何れも市會議員中より選擧し、市是調査委員會は十三名、臨時上下水道委員會及臨時下水道委員會は各九名を以て組織し、下水道築造に關し、市長の諮問に答へ又は意見を開陳せられたるは、勿論本工事遂行上或は調査に或は他都市の下水道視察に、或は築造認可、補助許可、市債認可の促進運動に、或は宮田用水組合、蘇東耕地整理組合、一宮耕地整理組合等に對する折衝に、等々鋭意市當局を援けて本事業完成の爲めに努力盡瘁せられたるは誠に多とする所なり。

而して大正十三年四月以降委員の職に就かれたる諸士は四十二名にして、其間委員會を開會したるは實に壹百四回に及べり。

三、事業關係者

大正十三年四月一日以後今日に至る間の市會議長、同副議長市是調査委員、臨時上下水道委員、臨時下水道委員、其の他の市會議員又市長、助役、收入役、下水道關係職員の氏名、在任、在職期間次の如し。

(一)、市會正副議長

市會議長	土川彌七郎	大正十年十一月十九日	當選	大正十四年十一月四日 滿期
市會議長	森林右工門	大正十四年十一月十八日 昭和四年十一月二十一日 同八年十一月二十一日	當選 當選 當選	昭和四年十一月四日 滿期 同八年十一月四日 滿期 同九年五月三日 辭職
市會議長	田中利左衞門	昭和九年五月三日	當選	至現在
市會副議長	佐分利新右工門	大正十年十一月十九日	當選	大正十四年十一月四日 滿期
市會副議長	森幾松	大正十四年十一月十八日	當選	昭和四年十一月四日 滿期

市會副議長	田中利左衛門	昭和四年十一月二十一日	當選
		昭和八年十一月四日	滿期
		同 八年十一月二十一日	當選
		同 九年五月三日	辭職
市會副議長	小島克實	昭和九年五月三日	當選
		至	現在

(二、下水道委員

伴喜幸	大正十一年一月十七日	臨時市是調査委員推薦	大正十四年十二月四日	滿期
水野房治郎	大正十一年一月十七日	臨時市是調査委員推薦	同 十四年十二月四日	滿期
小島太左工門	大正十一年一月十七日	臨時市是調査委員推薦	同 十四年十二月四日	滿期
宮木貫之烝	大正十一年一月十七日	臨時市是調査委員推薦	同 十四年十二月四日	滿期
	同十四年十一月十八日	臨時上下水道委員推薦	昭和四年十一月四日	滿期
加藤源一	大正十一年一月十七日	臨時市是調査委員推薦	大正十四年十二月四日	滿期
	同 十四年十一月八日	臨時上下水道委員推薦	昭和四年十一月四日	滿期
	昭和四年十一月廿一日	臨時上下水道委員推薦	同 六年三月九日	辭職
土川彌七郎	大正十一年一月十七日	臨時市是調査委員推薦	大正十四年十二月四日	滿期
星野致知	大正十一年一月十七日	臨時市是調査委員推薦	同 十四年十二月四日	滿期
森林右工門	大正十一年一月十七日	臨時市是調査委員推薦	同 十四年十二月四日	滿期
平林秀一郎	大正十一年一月十七日	臨時市是調査委員推薦	同 十四年十二月四日	滿期
柴田政治郎	大正十一年一月十七日	臨時市是調査委員推薦	同 十四年十二月四日	滿期
豐島半七	大正十一年一月十七日	臨時市是調査委員推薦	同 十四年十二月四日	滿期
佐分利新右工門	大正十一年一月十七日	臨時市是調査委員推薦	同 十四年十二月四日	滿期
森吉兵衛	大正十一年一月十七日	臨時市是調査委員推薦	同 十四年十二月四日	滿期
坂川新吾	大正十四年十一月十八日	臨時上下水道委員推薦	昭和四年十一月四日	滿期
小島克實	大正十四年十一月十八日	臨時上下水道委員推薦	昭和四年十一月四日	滿期
	昭和四年十一月二十一日	臨時上下水道委員推薦	同 六年三月九日	辭職
森幾松	大正十四年十一月十八日	臨時上下水道委員推薦	昭和四年十一月四日	滿期
	昭和四年十一月二十一日	臨時上下水道委員推薦	同 六年三月九日	辭職
山內源七	昭和四年十一月二十一日	臨時上下水道委員推薦	同 六年三月九日	辭職
岩田孫六	昭和四年十一月二十一日	臨時上下水道委員推薦	同 六年三月九日	辭職
柴田春吉	大正十四年十一月十八日	臨時上下水道委員推薦	昭和四年十一月四日	滿期
	大正十四年十一月十八日	臨時上下水道委員推薦	昭和四年十一月四日	滿期
	昭和四年十一月二十一日	臨時上下水道委員推薦	同 六年三月九日	辭職
淺井藤三郎	昭和八年六月十六日	臨時上下水道委員推薦	同 八年十一月四日	滿期

森下賢一	大正十四年十一月十八日	臨時上下水道委員推薦	昭和四年十一月四日	滿期
岩田由太郎	大正十四年十一月十八日	臨時上下水道委員推薦	昭和四年十一月四日	滿期
福井英一	昭和四年十一月二十一日	臨時上下水道委員推薦	同 六年三月九日	辭職
舟橋松治郎	昭和四年十一月二十一日	臨時上下水道委員推薦	同 六年三月九日	辭職
大竹梅次郎	昭和四年十一月二十一日	臨時上下水道委員推薦	同 六年三月九日	辭職
脇田市太郎	昭和六年三月九日	臨時上下水道委員推薦	同 八年十一月四日	滿期
森文左工門	昭和六年三月九日	臨時上下水道委員推薦	同 八年十一月四日	滿期
粟田竹治郎	昭和六年三月九日	臨時上下水道委員推薦	同 八年十一月四日	滿期
林利雄	昭和六年三月九日	臨時上下水道委員推薦	同 八年十一月四日	滿期
	同 八年十一月二十一日	臨時下水道委員推薦	至 現在	
酒井秋太郎	昭和八年十一月二十一日	臨時下水道委員推薦	昭和九年一月十五日	死亡
中井代次郎	昭和六年三月九日	臨時上下水道委員推薦	同 八年十一月四日	滿期
山口民三郎	昭和六年三月九日	臨時上下水道委員推薦	同 八年十一月四日	滿期
鈴木龜次郎	昭和六年三月九日	臨時上下水道委員推薦	同 八年十一月四日	滿期
	昭和八年十一月二十一日	臨時下水道委員推薦	至 現在	
今井末之信	昭和六年三月九日	臨時上下水道委員推薦	昭和八年十一月四日	滿期
	昭和八年十一月二十一日	臨時下水道委員推薦	至 現在	
瀧多賀男	昭和六年三月九日	臨時上下水道委員推薦	昭和八年六月十六日	辭職
森鋤三郎	昭和八年十一月二十一日	臨時下水道委員推薦	至 現在	
丹菊仁三郎	昭和八年十一月二十一日	臨時下水道委員推薦	至 現在	
岩井藤九郎	昭和八年十一月二十一日	臨時下水道委員推薦	至 現在	
後藤宗一	昭和九年六月二十七日	臨時下水道委員推薦	至 現在	
尾關德次	昭和八年十一月二十一日	臨時下水道委員推薦	至 現在	
田中利左衞門	昭和八年十一月二十一日	臨時下水道委員推薦	昭和九年六月二十六日	辭職
宮木彥八郎	昭和九年二月二十七日	臨時下水道委員推薦	至 現在	

(三、市會議員

水野房治郎	大正十年十一月五日	當選	大正十四年十一月四日	滿期
山內源七	大正十年十一月五日	當選	同 十四年十一月四日	滿期
	同 十四年十一月五日	當選	昭和四年十一月四日	滿期
	昭和四年十一月五日	當選	同 八年三月二十七日	逝

吉田友右工門	大正十年十一月五日	當選	大正十四年十一月四日	滿期
	同　十四年十一月五日	當選	昭和三年八月二十一日	死亡
田中鉄三郎	大正十年十一月五日	當選	大正十四年十一月四日	滿期
吉田萬次	大正十年十一月五日	當選	同　十四年十一月四日	滿期
	昭和四年十一月五日	當選	昭和八年十一月四日	滿期
	昭和八年十一月五日	當選	至　現　在	
森林右工門	大正十年十一月五日	當選	大正十四年十一月四日	滿期
	同　十四年十一月五日	當選	昭和四年十一月四日	滿期
	昭和四年十一月五日	當選	同　八年十一月四日	滿期
	同　八年十一月五日	當選	至　現　在	
田中安逸	大正十四年十一月五日	當選	昭和四年十一月四日	滿期
	昭和四年十一月五日	當選	同　八年十一月四日	滿期
	昭和八年十一月五日	當選	至　現　在	
小島太左工門	大正十年十一月五日	當選	大正十四年十一月四日	滿期
岩田由太郎	大正十年十一月五日	當選	同　十四年十一月四日	滿期
	同　十四年十一月五日	當選	昭和四年十一月四日	滿期
平林秀一郎	大正十年十一月五日	當選	大正十四年十一月四日	滿期
	同　十四年十一月五日	當選	昭和四年十一月四日	滿期
伴野八左工門	大正十年十一月五日	當選	大正十四年十一月四日	滿期
伴喜幸	大正十年十一月五日	當選	同　十四年十一月四日	滿期
田中利左衞門	大正十年十一月五日	當選	同　十四年十一月四日	滿期
	同　十四年十一月五日	當選	昭和四年十一月四日	滿期
	昭和四年十一月五日	當選	同　八年十一月四日	滿期
	同　八年十一月五日	當選	至　現　在	
鈴木龜次郎	大正十年十一月五日	當選	大正十四年十一月四日	滿期
	昭和四年十一月五日	當選	昭和八年十一月四日	滿期
	昭和八年十一月五日	當選	至　現　在	
近藤彦三郎	大正十年十一月五日	當選	大正十四年十一月四日	滿期
星野致知	大正十年十一月五日	當選	同　十四年十一月四日	滿期
土川彌七郎	大正十年十一月五日	當選	同　十四年十一月四日	滿期
宮木貫之烝	大正十年十一月五日	當選	同　十四年十一月四日	滿期
	大正十四年十一月五日	當選	昭和四年十一月四日	滿期
田邊小三郎	大正十年十一月五日	當選	同　十四年十一月四日	滿期
林利雄	大正十年十一月五日	當選	同　十四年十一月四日	滿期
	同　十四年十一月五日	當選	昭和四年十一月四日	滿期
	昭和四年十一月五日	當選	同　八年十一月四日	滿期
	同　八年十一月五日	當選	至　現　在	

太田藤吉	大正十年十一月五日	當選	大正十四年十一月四日
森幾松	大正十年十一月五日	當選	同十四年十一月四日
	同十四年十一月五日	當選	昭和四年十一月四日
	昭和四年十一月五日	當選	同八年三月二十七日
柴田政治郎	大正十年十一月五日	當選	大正十四年十一月四日
豐島半七	大正十年十一月五日	當選	同十四年十一月四日
佐分利新右工門	大正十年十一月五日	當選	同十四年十一月四日
森吉兵衛	大正十年十一月五日	當選	同十四年十一月四日
柴田喜七	大正十年十一月五日	當選	同十四年十一月四日
佐藤忠左工門	大正十年十一月五日	當選	同十四年十一月四日
加藤源一	大正十年十一月五日	當選	同十四年十一月四日
	同十四年十一月五日	當選	昭和四年十一月四日
	昭和四年十一月五日	當選	同八年十一月四日
	同八年十一月五日	當選	至現在
河村清兵衛	大正十年十一月五日	當選	大正十四年十一月四日
伴清八	大正十年十一月五日	當選	同十四年十一月四日

柴田春吉	大正十四年十一月五日	當選	昭和四年十一月四日
中井代次郎	大正十四年十一月五日	當選	昭和四年十一月四日
	昭和四年十一月五日	當選	同八年十一月四日
	昭和八年十一月五日	當選	至現在
坂川新吾	大正十四年十一月五日	當選	昭和四年十一月四日
	昭和四年十一月五日	當選	同五年六月十三日
	同八年十一月五日	當選	逝
春日井鎌太郎	大正十四年十一月五日	當選	至現在
田中鉄三郎（吉藏改名）	大正十四年十一月五日	當選	昭和四年十一月四日
小笠原末太郎	大正十四年十一月五日	當選	昭和四年十一月四日
今井信太郎	大正十四年十一月五日	當選	昭和四年十一月四日
山口民三郎	大正十四年十一月五日	當選	昭和四年十一月四日
	昭和四年十一月五日	當選	同八年十一月四日
速水康次	大正十四年十一月五日	當選	昭和四年十一月四日
脇田市太郎	大正十四年十一月五日	當選	昭和四年十一月四日
	昭和四年十一月五日	當選	同八年十一月四日
	同八年十一月五日	當選	至現在

淺井藤三郎	大正十四年十一月五日	當選	昭和四年十一月四日	滿期
	昭和四年十一月五日	當選	昭和八年十一月四日	滿期
	同　八年十一月五日	當選	至　現在	
小島克實	大正十四年十一月五日	當選	昭和四年十一月四日	滿期
	昭和四年十一月五日	當選	同　八年十一月四日	滿期
	同　八年十一月五日	當選	至　現在	
森下賢一	大正十四年十一月五日	當選	昭和四年十一月四日	滿期
林曹五郎	大正十四年十一月五日	當選	昭和四年十一月四日	滿期
福井英一	大正十四年十一月五日	當選	昭和四年十一月四日	滿期
	昭和四年十一月五日	當選	同　八年三月二十七日	迄
鈴木金兵衛	大正十四年十一月五日	當選	昭和四年十一月四日	滿期
森文左工門	大正十四年十一月五日	當選	昭和四年十月四日	滿期
	昭和四年十一月五日	當選	同　八年十一月四日	滿期
粟田竹治郎	昭和四年十一月五日	當選	昭和八年十一月四日	滿期
瀧多賀男	昭和四年十一月五日	當選	昭和八年十一月四日	滿期
今井末之信	昭和四年十一月五日	當選	同　八年十一月四日	滿期
	同　八年十一月五日	當選	至　現在	

豐島豐七	昭和四年十一月五日	當選	同　八年十一月四日	滿期
伴利三郎	昭和四年十一月五日	當選	同　八年十一月四日	滿期
大竹梅次郎	昭和四年十一月五日	當選	同　八年十一月四日	滿期
伊藤彥三郎	昭和五年八月二十五日	補欠當選	同　七年　九月四日	死亡
祖父江小三郎	大正十四年十一月五日	當選	昭和四年十一月四日	滿期
松岡茂吉郎	大正十四年十一月五日	當選	昭和四年十一月四日	滿期
舟橋愛十郎	昭和四年十一月五日	當選	同　八年十一月四日	滿期
	同　八年十一月五日	當選	至　現在	
伴寅三郎	昭和四年十一月五日	當選	昭和八年十一月四日	滿期
	昭和八年十一月五日	當選	至　現在	
宇佐美金次郎	昭和四年十一月五日	當選	昭和七年一月十四日	死亡
舟橋松治郎	昭和四年十一月五日	當選	同　八年十一月四日	滿期
松本森治	昭和四年十一月五日	當選	同　八年十一月四日	滿期
今井九右工門	昭和四年十一月五日	當選	同　八年十一月四日	滿期
尾關德次	昭和八年十一月五日	當選	至　現在	

岩田孫六	昭和四年十一月五日	當選	昭和八年十一月四日 滿期
	同 八年十一月五日	當選	昭和十一年三月廿五日 辭職
丹菊仁三郎	昭和八年十一月五日	當選	至 現在
伴 利晴	昭和八年十一月五日	當選	至 現在
富板淺吉	昭和八年十一月五日	當選	至 現在
岩井藤九郎	昭和八年十一月五日	當選	至 現在
鵜飼猶市	昭和八年十一月五日	當選	至 現在
酒井秋太郎	昭和八年十一月五日	當選	昭和九年一月十五日 死亡
宮木彦八郎	昭和五年八月二十五日	補欠當選	同 八年十一月四日 滿期
	同 八年十一月五日	當選	至 現在
原田要市	昭和八年十一月五日	當選	至 現在
日野常太郎	昭和八年十一月五日	當選	至 現在
森鋤三郎	昭和八年十一月五日	當選	至 現在
後藤宗一	昭和八年十一月五日	當選	至 現在
佐藤次郎	昭和八年十一月五日	當選	昭和十一年三月廿六日 辭職

前田米三	昭和八年十一月五日	當選	昭和十一年三月二十六日 辭職

(四、下水道職員

(イ)市長

職名	氏名	在職期間	
市長	森林右工門	昭和九年五月三日 就職	至 現在
(前)市長	小島太左工門	昭和五年十二月二十日 就職	昭和八年十二月十九日 退職
(元)市長	日野常太郎	大正十年十二月二十七日 就職	大正十四年十二月二十六日 滿期
		同 十五年一月二十二日 就職	昭和五年一月二十一日 滿期
		昭和五年三月四日 就職	同 年十一月九日 退職

(ロ)助役

職名	氏名	在職期間	
助役	小濱元夫	昭和九年九月六日 就職	至 現在
(前)助役	前島次郎	昭和五年十二月二十四日 就職	昭和九年七月九日 退職

職名	氏名	在職期間	
(元)助役	杉山竹治郎	大正十三年二月二十八日 就職 昭和三年二月二十三日 再薦	昭和五年十一月九日 退職

(八)収入役

職名	氏名	在職期間	
収入役	佐分薫	昭和三年五月一日 就職 同 七年四月二十六日 再薦	至 現在
(前)収入役	宇佐美儀右衛門	大正十一年一月二十五日 就職 同 十五年一月二十三日 再薦	昭和三年四月十一日 死亡

(二)顧問

職名	氏名	在職期間	
顧問	米元晋一	昭和五年九月十六日 依嘱	至 現在
(前)顧問	北澤忠男	大正十三年十一月八日 依嘱	昭和五年九月七日 解嘱

(ホ)擔當吏員

(現在)

職名	氏名	下水課在職期間	擔當事務
技師	小野寺寶一	昭和五年九月十六日 就職	下水課長
書記	鈴木德造	昭和五年十月九日 就職	庶務係
書記	大塚榮吉	昭和五年九月八日 就職	庶務係
技師補	松井幸次郎	昭和六年五月十六日 就職	設計係
技手	安藤茂保	昭和六年五月十一日 就職	工事係
雇	西垣禮雄	昭和七年八月八日 就職	工事係
雇	戸松治兵衛	昭和十年三月二十六日 就職	抽水場係
雇	安藤力	昭和九年七月十二日 就職	設計係
雇	熊澤進	昭和八年五月一日 就職	庶務係
臨時雇	木村三万士	昭和九年七月十二日 就職	庶務係

(ヘ)囑託員

(現在)

職名	氏名	下水課在職期間	擔當事務
囑託	中島賢治	昭和十年十一月四日　囑託	下水道誌編纂事務
囑託	笹永二	昭和十年十月二十一日　囑託	工事係

（ト）兼務吏員

（現在）

職名	氏名	下水課在職期間	
技師	岡田茂吉	大正十三年十月二十九日　就職	工事係
主事補	神戸直太郎	大正十三年四月一日　就職	庶務係
技手	伴儀一	大正十三年十月二十九日　就職	工事係
技手	平出章	大正十四年三月二十五日　就職	設計係
技手	江頭兵作	昭和七年三月二十二日　就職	工事係
技手補	小谷津清	昭和七年三月二十二日　就職	工事係

（チ）退職吏員

（他課ニ轉ジタル者ヲ含ム）

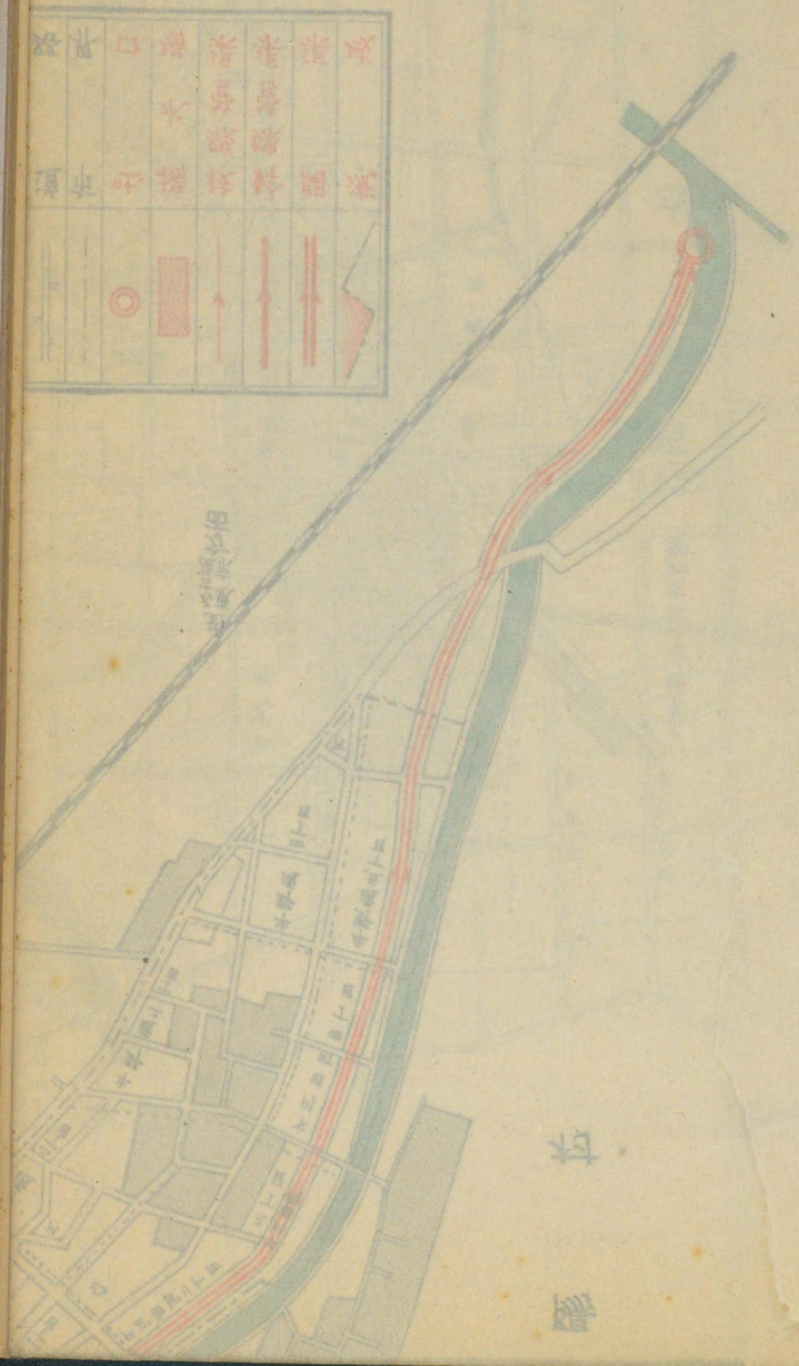
職名	氏名	下水課在職期間		擔當事務
主事	淺野嘉九郎	大正十三年四月一日　就職	昭和五年十一月六日　退職	庶務係
主事	兼松富次郎	昭和六年五月一日　就職	同　十年六月十二日　退職	庶務係
技師	村本武	大正十三年十月二十九日　就職	大正十五年六月七日　退職	設計係
技師	葛山鉄造	昭和二年二月二日　就職	昭和五年七月十八日　退職	課長
主事補	谷信一	大正十三年十月二十九日　就職	昭和十年八月三十一日　退職	庶務係
書記	宮田銀三郎	昭和四年四月四日　就職	同　五年九月八日　退職	庶務係
書記	岩田富士一	昭和五年九月八日　就職	同　年十月十日　退職	庶務係
書記	小島米逸	大正十四年十一月三日　就職	昭和五年九月八日　退職	庶務係
書記	伊藤桂一	大正十四年十月二十一日　就職	昭和二年四月一日　退職	庶務係
書記補	江口敏彦	昭和六年六月十九日　就職	同　十年八月六日　退職	庶務係
技手	加藤均一	大正十四年三月四日　就職	昭和五年七月十八日　退職	工事係
技手	筧一郎	昭和二年四月一日　就職	同　五年七月二十九日　退職	工事係
技手	小塚義雄	昭和三年十月三日　就職	同　五年七月十八日　退職	工事係

技手	今井一忠	昭和四年三月二十九日	就職	同 五年七月二十九日	退職
技師	齊藤義弘	昭和五年十一月九日	就職	同 九年十一月五日	退職
技手	笹永二	昭和五年九月十六日	就職	同 十年五月六日	退職
技手	松岡金次郎	昭和五年十一月十四日	就職	同 十年六月四日	退職
技手	井田文治	昭和五年十二月一日	就職	同 十年八月十六日	退職
技手	石川政繁	昭和五年十一月十日	就職	同 十年八月十六日	退職
技手補	森春三郎	昭和三年十月三日	就職	同 五年七月十八日	退職
技手	菅原恒夫	昭和六年五月四日	就職	同 九年十一月五日	退職
技手補	西岡敏雄	昭和七年三月二十八日	就職	同 十年四月一日	退職
雇	安藤要	大正十五年十一月九日	就職	昭和二年五月十一日	退職
雇	齊藤立夫	昭和七年十月三日	就職	同 八年十一月十一日	退職
雇	棚橋行藏	昭和八年二月二十日	就職	同 十年九月十四日	退職
雇	植松茂	昭和九年七月十二日	就職	同 十年五月十日	退職
臨時雇	庄本菊太郎	昭和六年八月二十四日	就職	同 八年一月九日	退職

工事係	工事係	工事係	抽水場係	工事係	設計係
工事係	工事係	抽水場係	設計係	設計係	工事係

折り込み部分

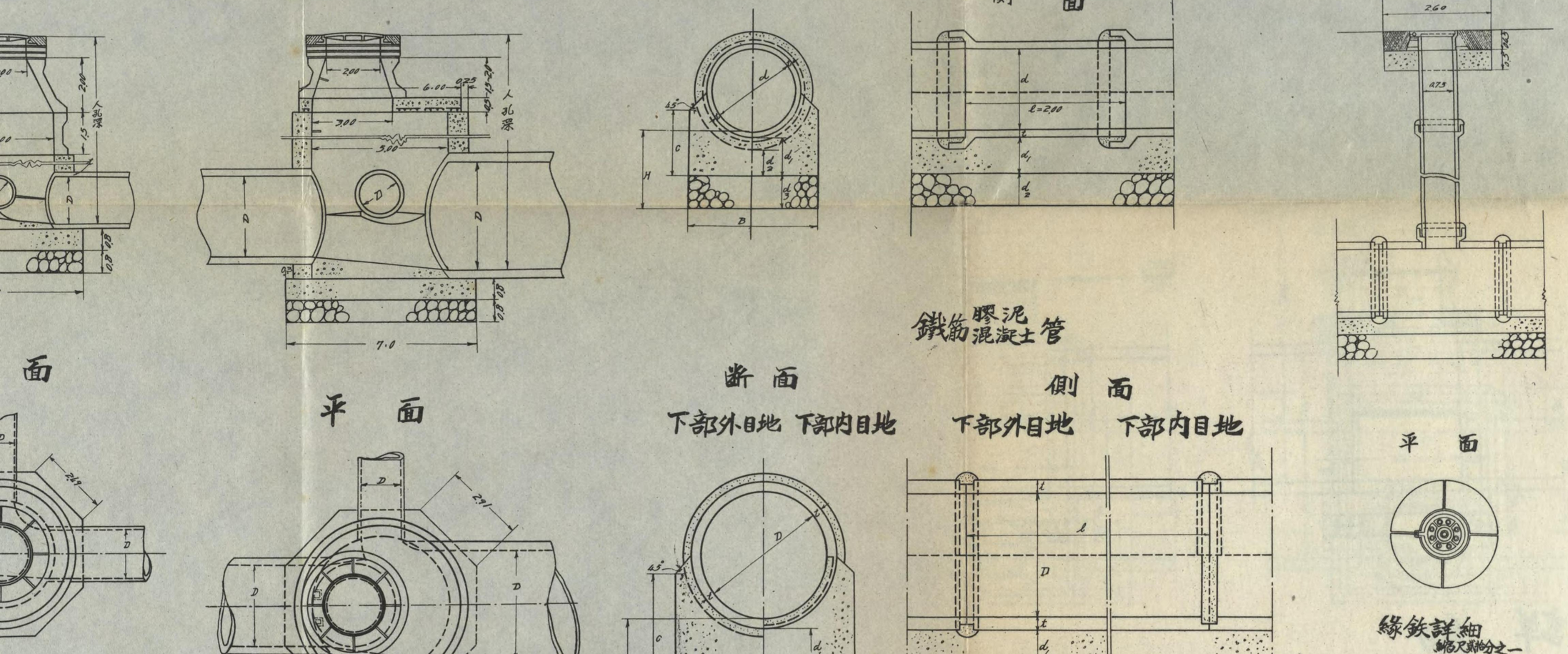
未撮影



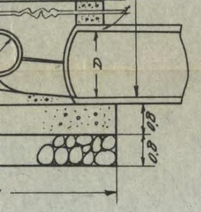
造物標準圖 其一

縮尺六拾分之壹

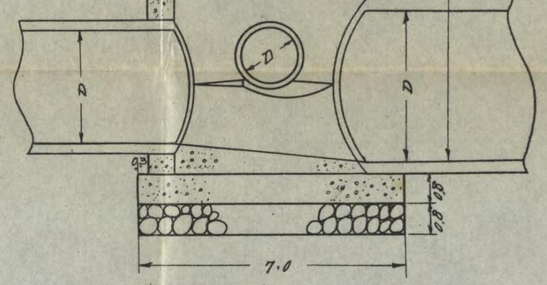
陶管



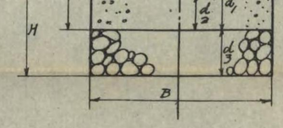
鐵筋膠泥混凝土管

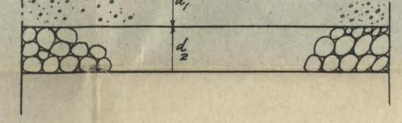


面

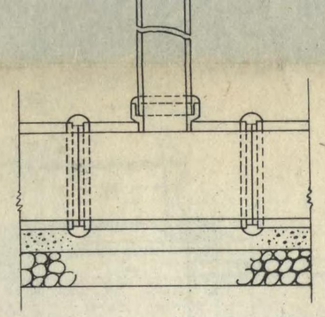


平　面





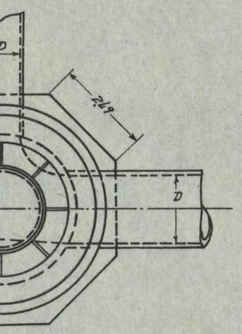
鐵筋膠泥混凝土管

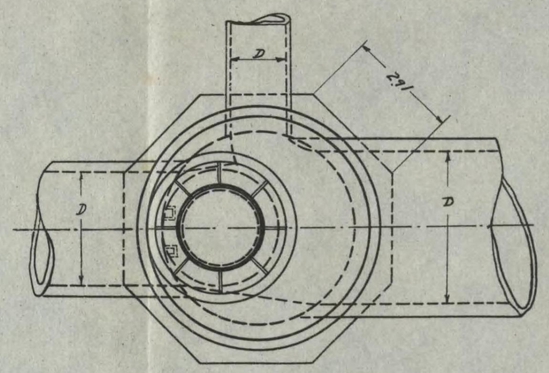


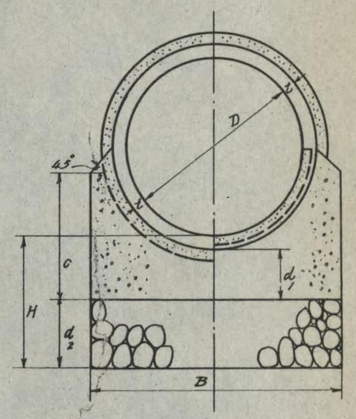
側　面

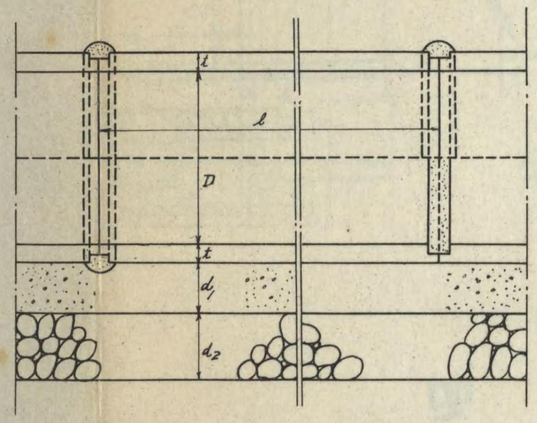
斷　面

下部外目地　下部内目地　　下部外目地　下部内目地

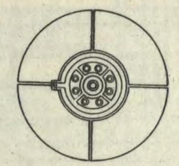






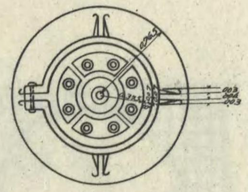


平　面

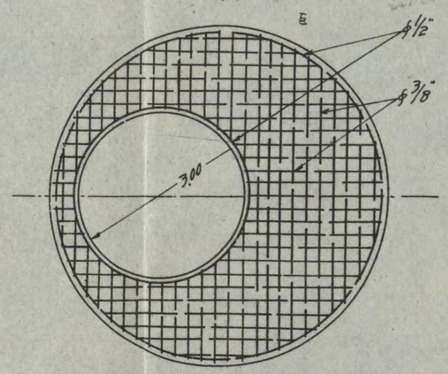


緣鉄詳細
縮尺四十分之一

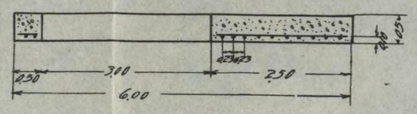
平　面



内径五尺円形人孔用スラブ平面
縮尺四十分之一



断　面

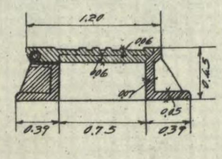


法材料表

混凝土配合	容積	鉄階
1:2:4	6.09	
1:2:4	5.16	
1:2:4	7.03	

材料表

混凝土配合	容積	鉄階
1:2:4	6.33	
1:2:4	4.83	
1:2:4	3.29	



断　面

陶管伏設寸法表（単位尺）

d	l	t	B	d1	d2	H	C	d3
0.50	2.00	0.06	1.00	0.29	0.20	0.65	0.40	0.30
0.75	〃	0.076	1.29	0.374	0.276	0.87	0.645	0.40
1.00	〃	0.09	1.58	0.45	0.310	0.94	0.840	〃
1.25	〃	0.11	1.85	0.44	0.29	0.95	0.975	〃
1.50	〃	0.125	2.14	0.495	0.325	1.22	1.170	0.60

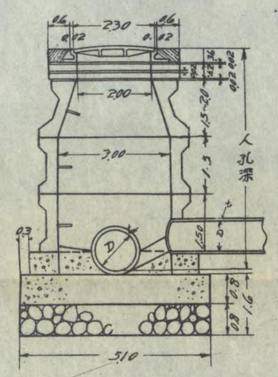
鉄筋モルタルコンクリート管伏設寸法表

D	l	t	d1	d2	B	H	C
1.50	3.00	0.17	0.40	0.60	3.26	1.17	1.12
1.75	〃	0.17	〃	〃	2.69	1.17	1.245
2.00	〃	0.19	〃	〃	2.78	1.19	1.390
2.25	〃	0.21	〃	〃	3.07	1.21	1.535
2.50	〃	0.23	0.50	〃	3.36	1.33	1.780
2.75	〃	0.25	〃	〃	3.65	1.35	1.925
3.00	〃	0.27	〃	0.80	3.94	1.57	2.070
3.50	〃	0.31	〃	〃	4.52	1.61	2.360
4.00	2.00	0.34	0.60	〃	5.08	1.74	2.760
4.50	〃	0.37	〃	〃	5.64	1.77	3.020
4.75	〃	0.40	〃	〃	5.95	1.80	31.75

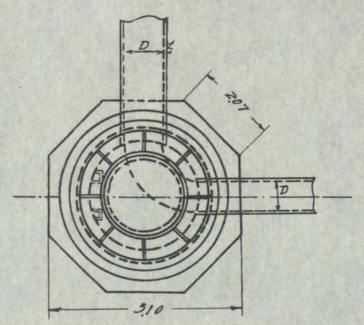
構造物標準圖

縮尺六拾分之壹

内径三尺円形人孔
（壁塊積）

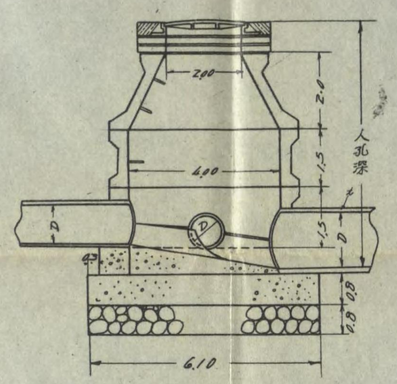


平面

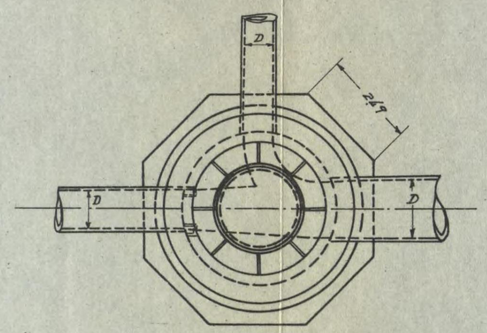


人孔上部ブロック断面

内径四尺円形人孔
（壁塊積）

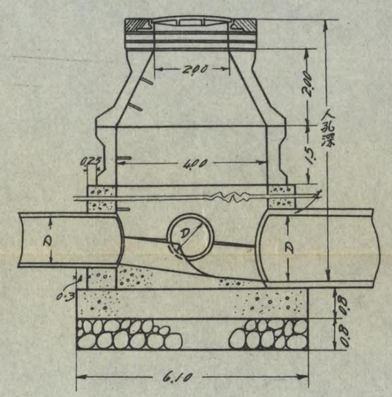


平面

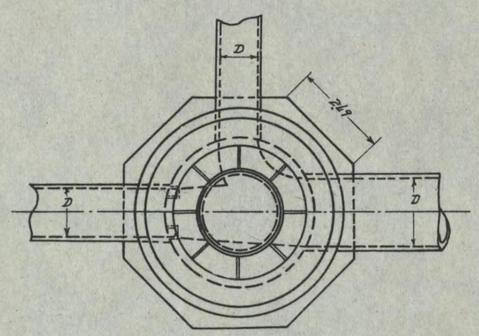


人孔中部ブロック

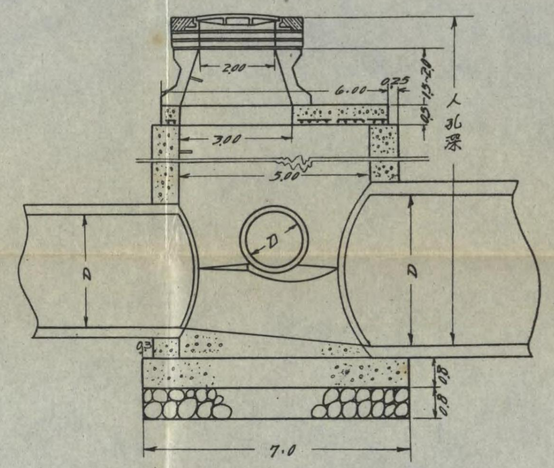
内径四尺円形人孔



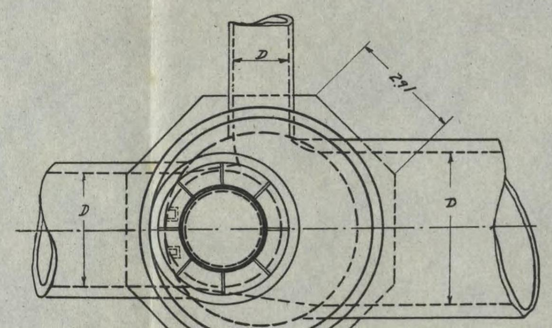
平面



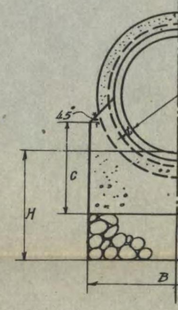
内径五尺円形人孔



平面

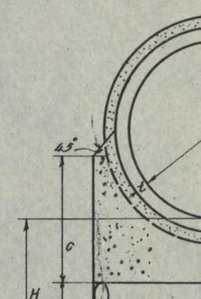


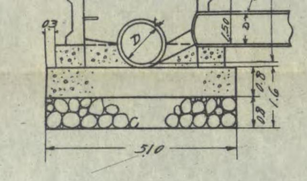
断



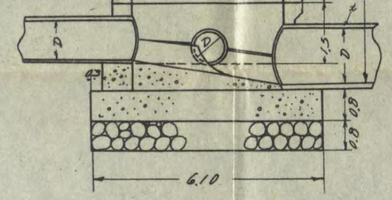
断

下部外

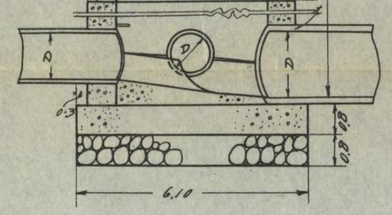




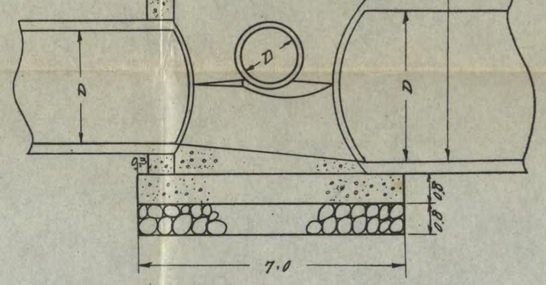
平　面



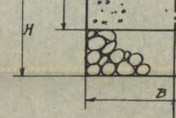
平　面



平　面

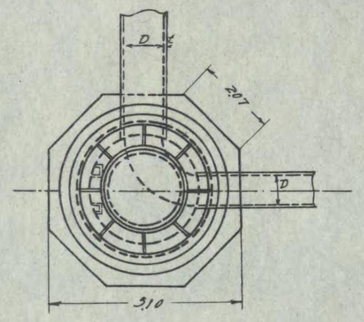


平　面

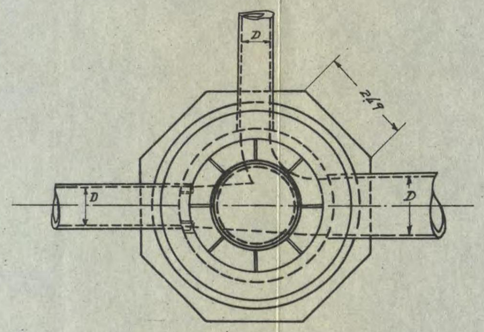


断

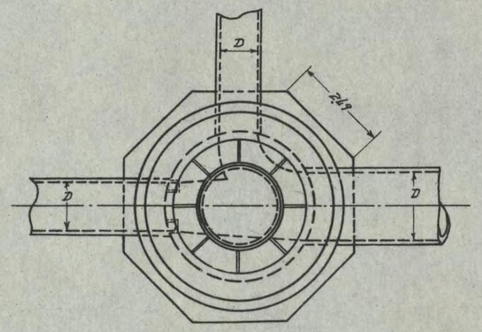
下部外

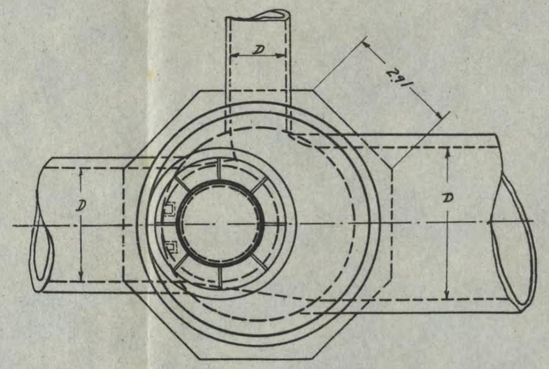


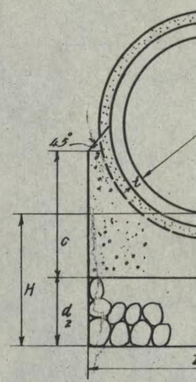
人孔上部ブロック断面



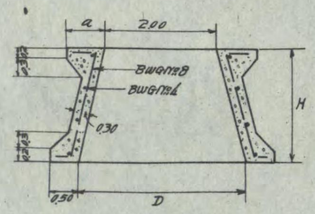
人孔中部ブロック
断面



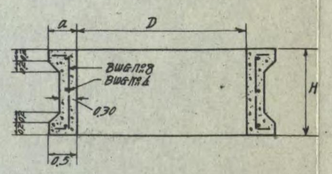




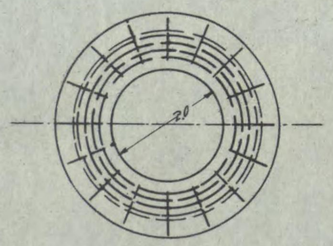
内径五尺円形人孔用スラブ平面
縮尺四十分之一

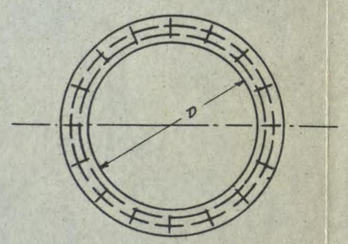


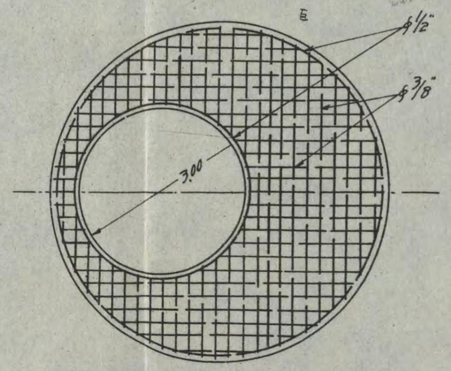
平　面



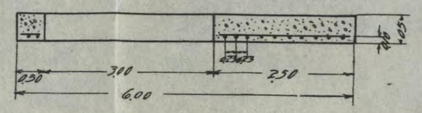
平　面







断　面



人孔上部ブロック各部寸法材料表

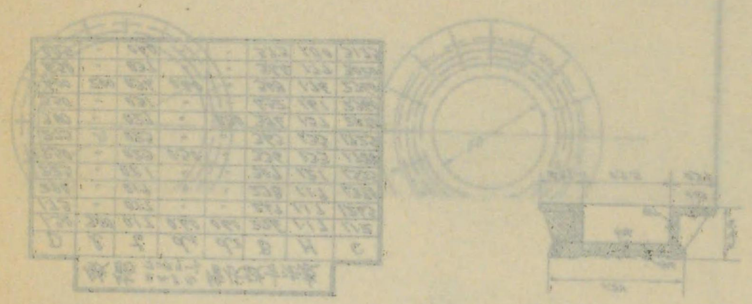
No.	D	H	a	横鉄筋 BWG	横鉄筋 本数	縦鉄筋 BWG	縦鉄筋 本数	混凝土配合	容積	鉄階
1	3.0	2.0	0.7	No.4	4	No.8	16	1:2:4	6.09	
2	3.0	1.5	0.7	No.4	3	No.8	16	1:2:4	5.16	
3	4.0	2.0	0.7	No.4	4	No.8	20	1:2:4	7.03	

人孔中部ブロック各部寸法材料表

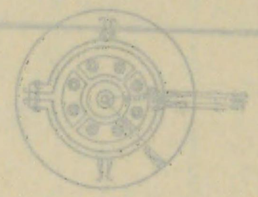
No.	D	H	a	横鉄筋 BWG	横鉄筋 本数	縦鉄筋 BWG	縦鉄筋 本数	混凝土配合	容積	鉄階
1	4.0	1.5	0.5	No.4	3	No.8	24	1:2:4	6.33	
2	3.0	1.5	0.5	No.4	3	No.8	16	1:2:4	4.83	
3	2.25	1.5	0.5	No.4	3	No.8	12	1:2:4	3.29	

陶管伏設寸法

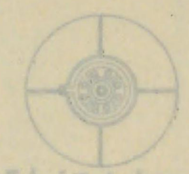
d	l	t	B	d1
0.30	2.00	0.06	1.00	0.29
0.75	〃	0.076	1.29	0.37
1.00	〃	0.09	1.58	0.45
1.25	〃	0.11	1.85	0.44
1.50	〃	0.125	2.14	0.47



側面

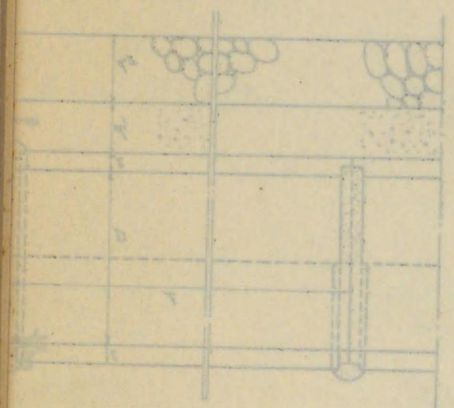


背面

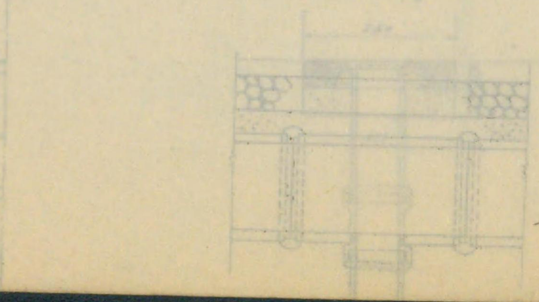


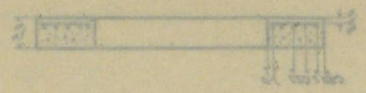
內孔七寸五分灯孔

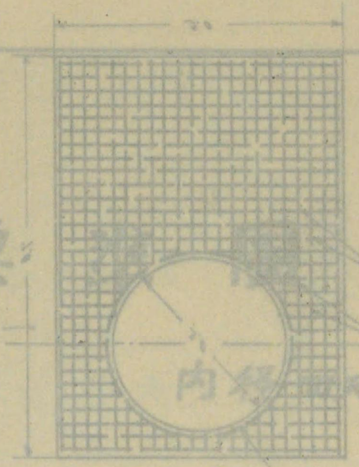
本體

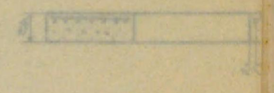


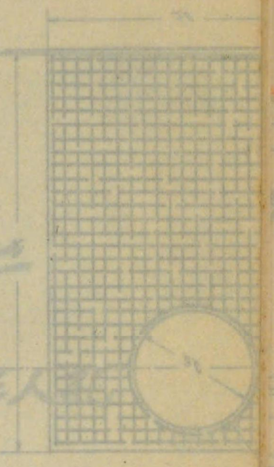
洗目代式





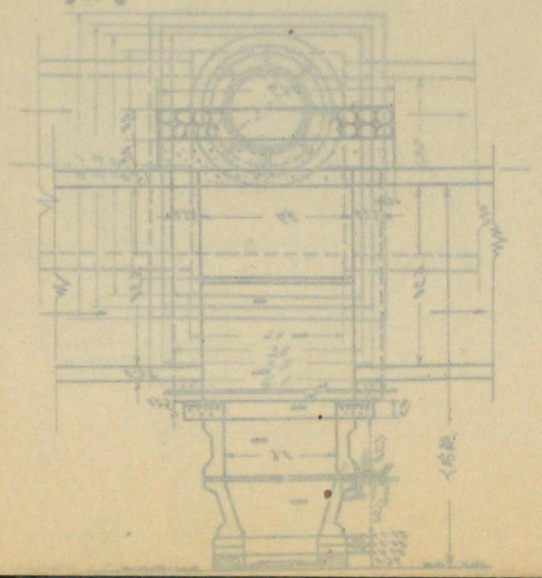


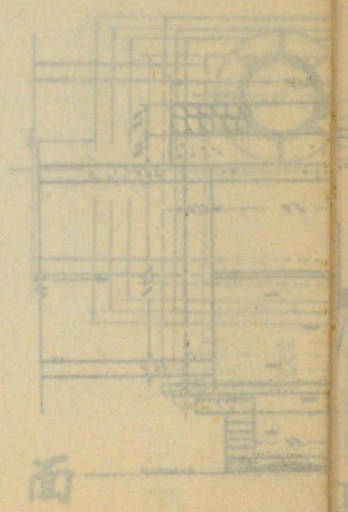




平面

側面



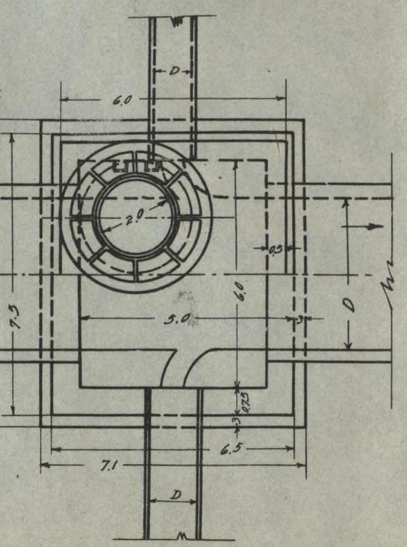


構造物標準圖　其二

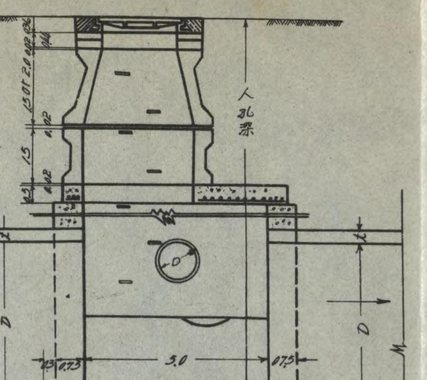
縮尺六十分之一

內径五尺六尺矩形人孔

平面

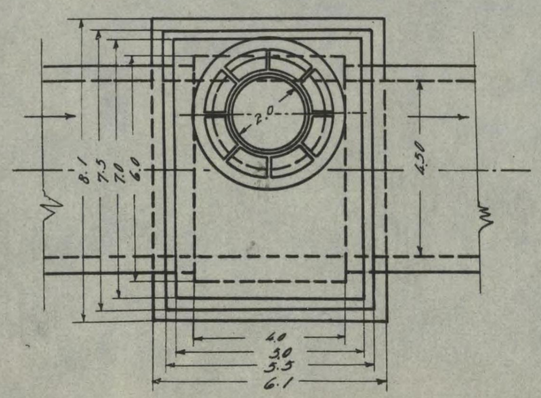


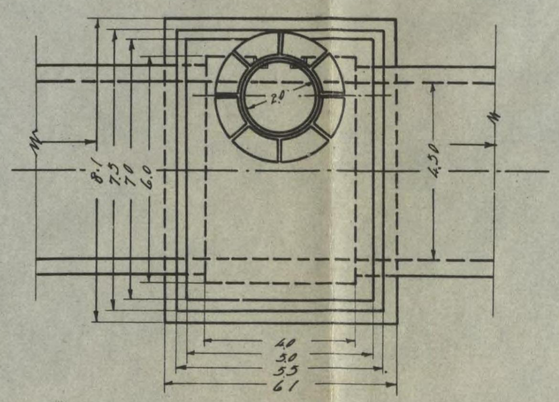
斷面



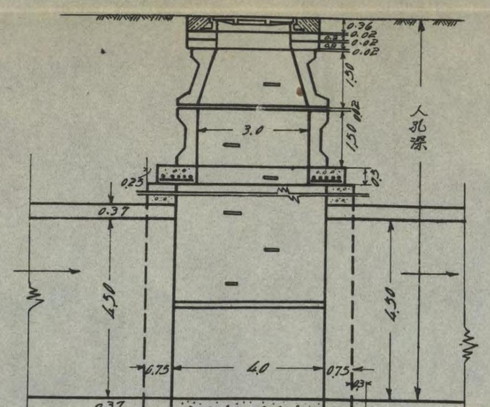
內径四尺六尺矩形人孔

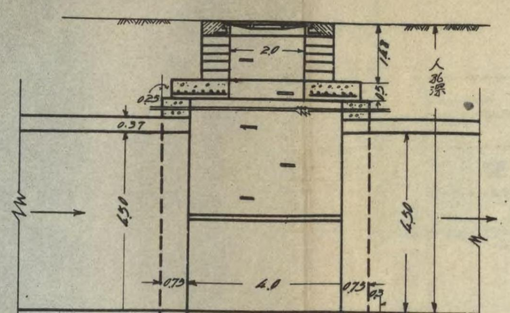
平面





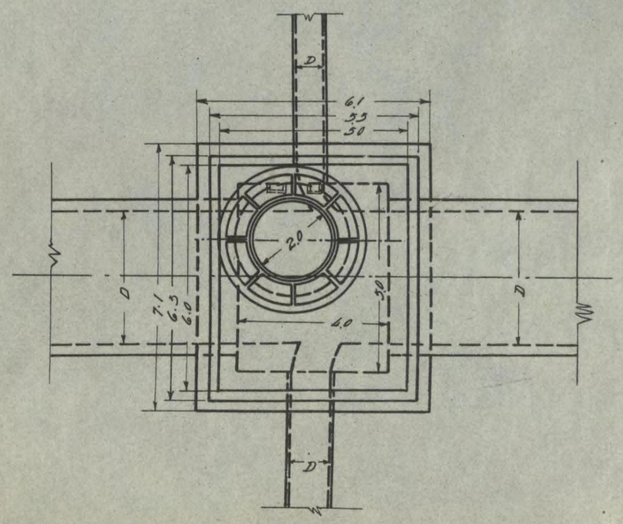
斷面



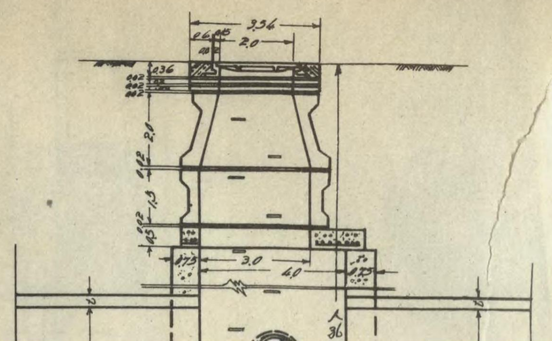


內径四尺五尺矩形人孔

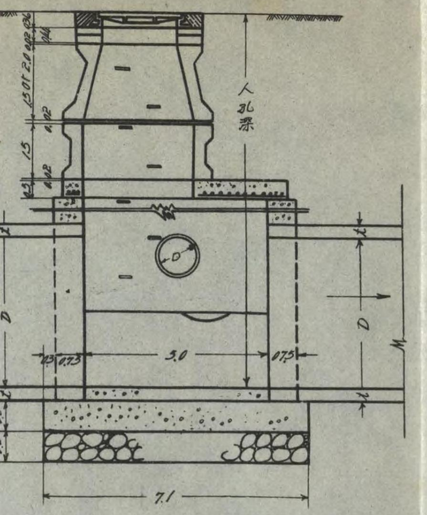
平面

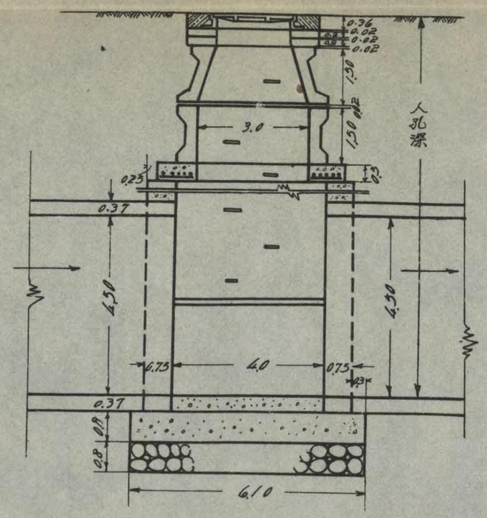


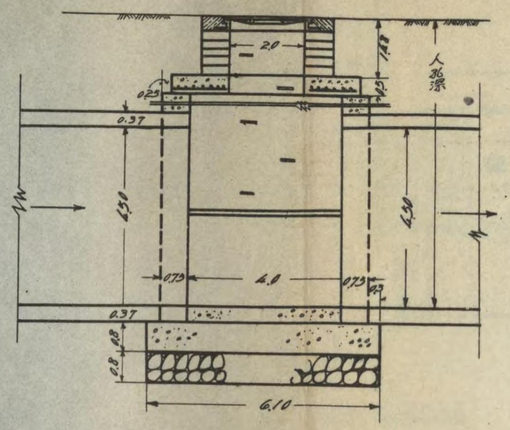
斷面



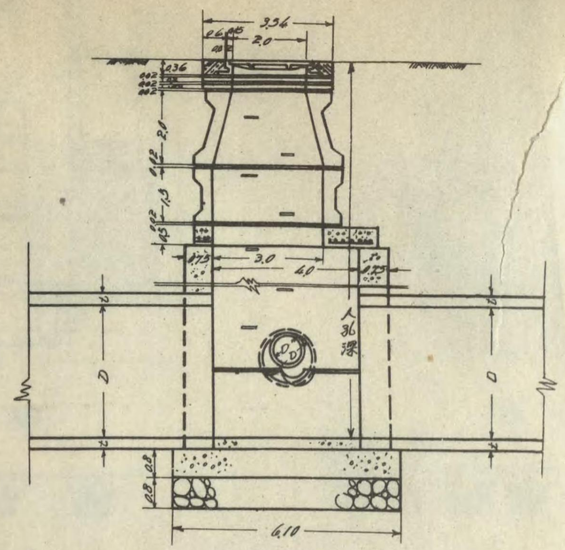
断面





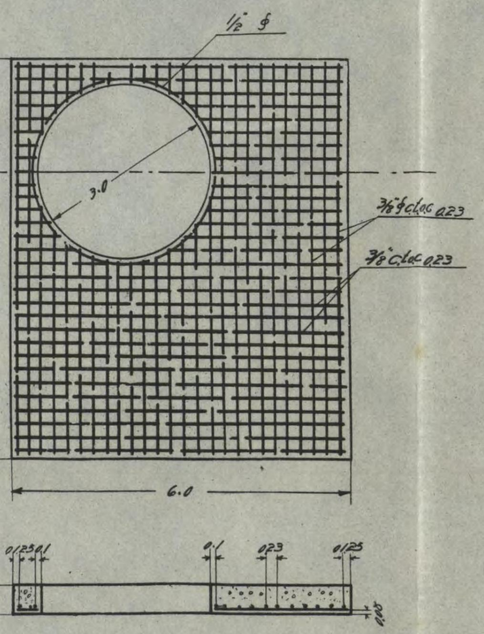


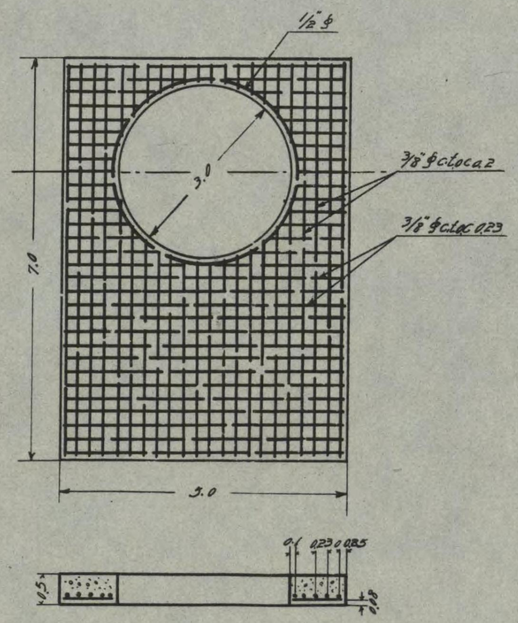
断面

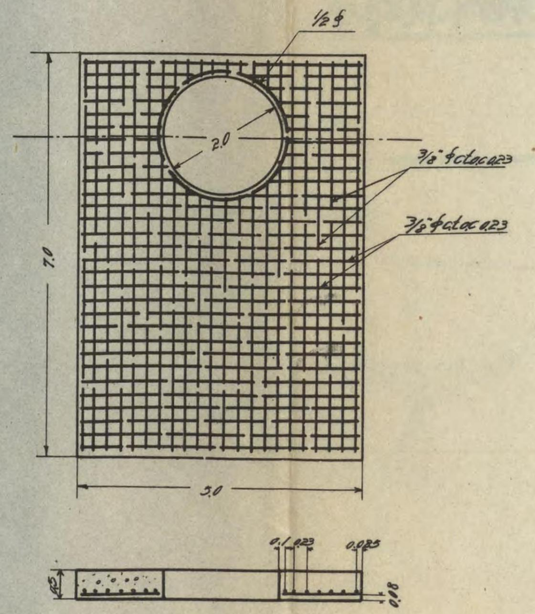


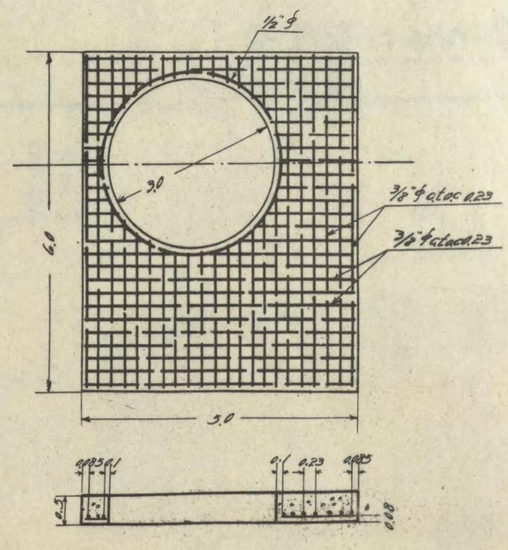
スラブ詳細

縮尺四十分之一







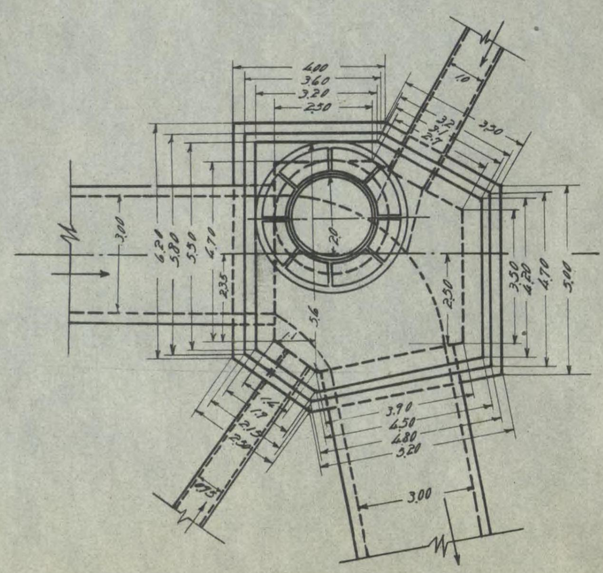


構造物標準圖

縮尺六十分之一

異形人孔

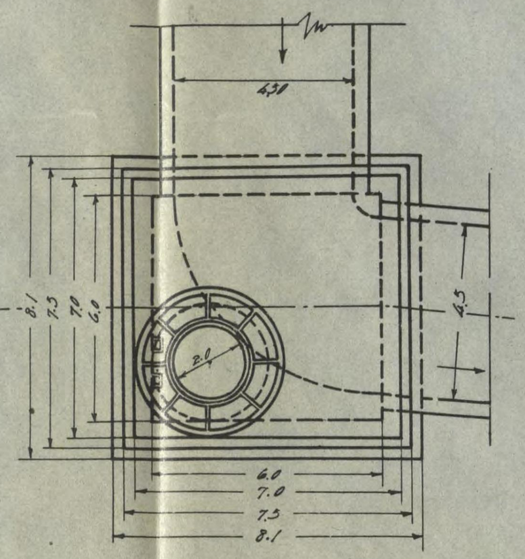
平面



斷面

內徑六尺六尺矩形人孔

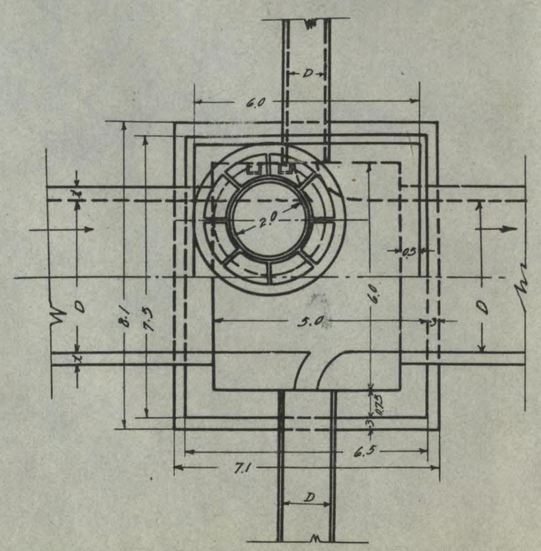
平面



斷面

內徑五尺六尺矩形人孔

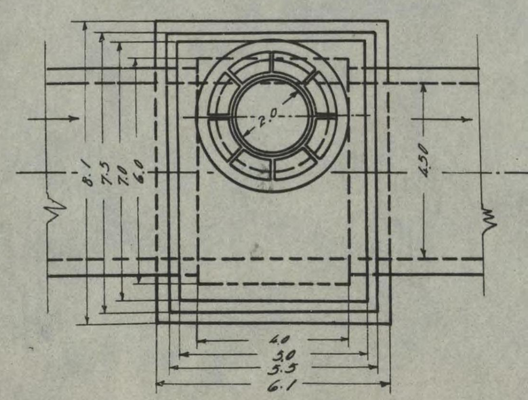
平面



斷面

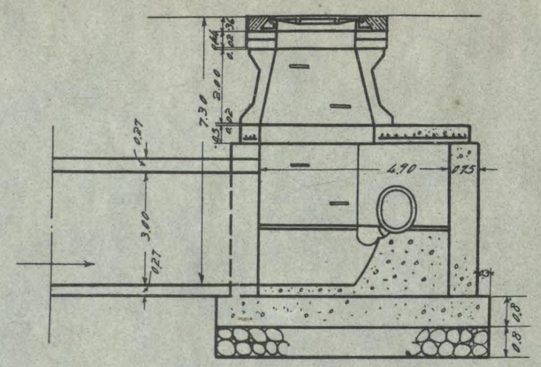
內徑四尺六尺

平

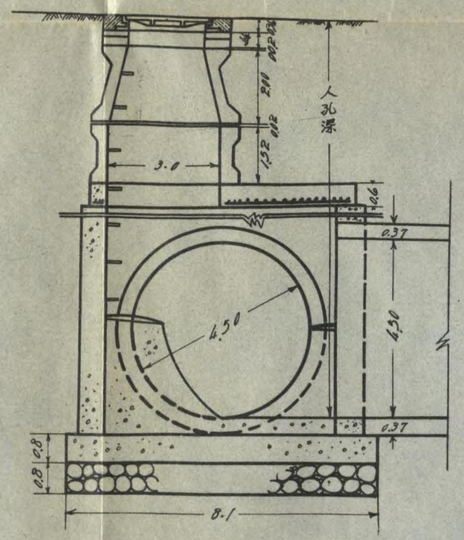


斷

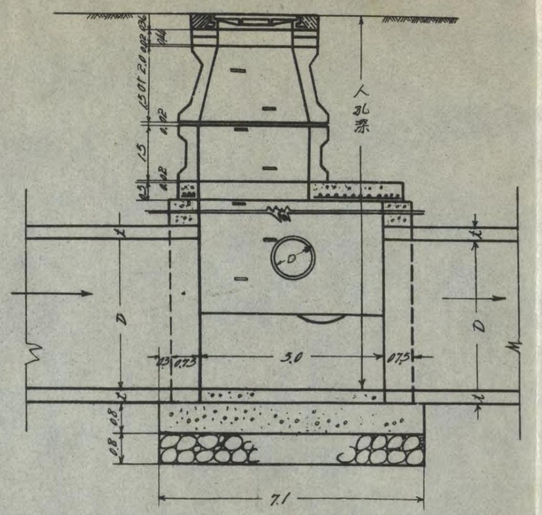
断面

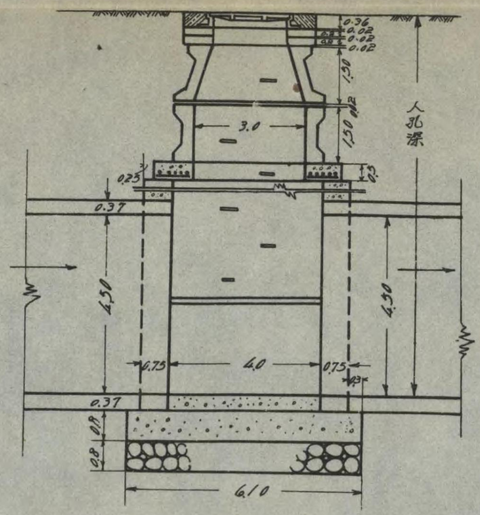


断面



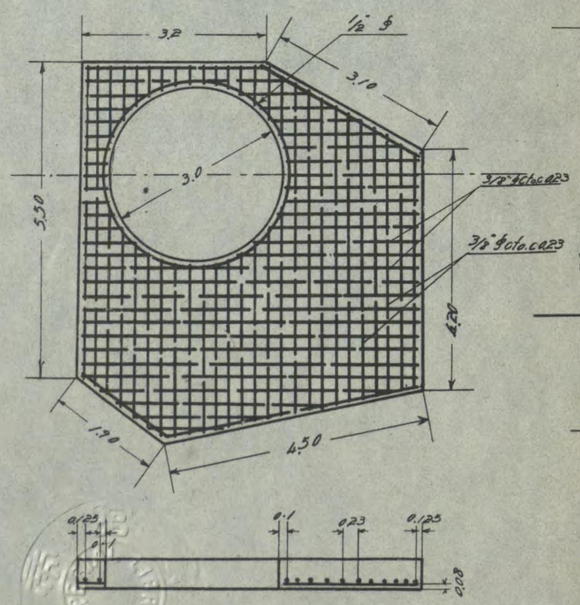
断面

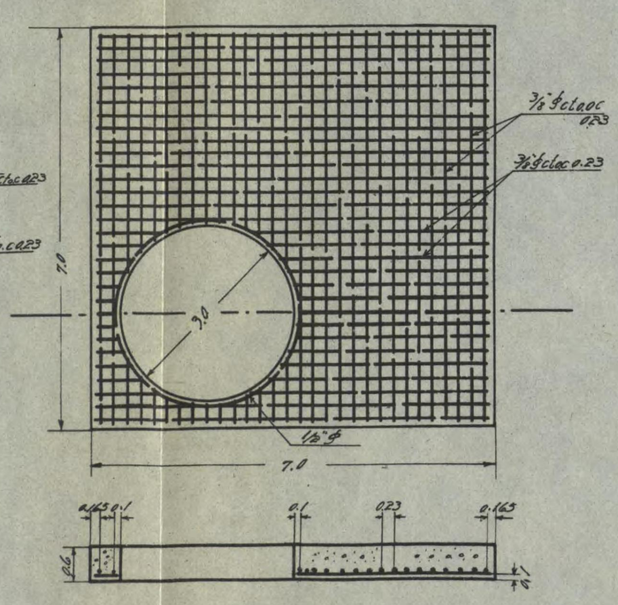


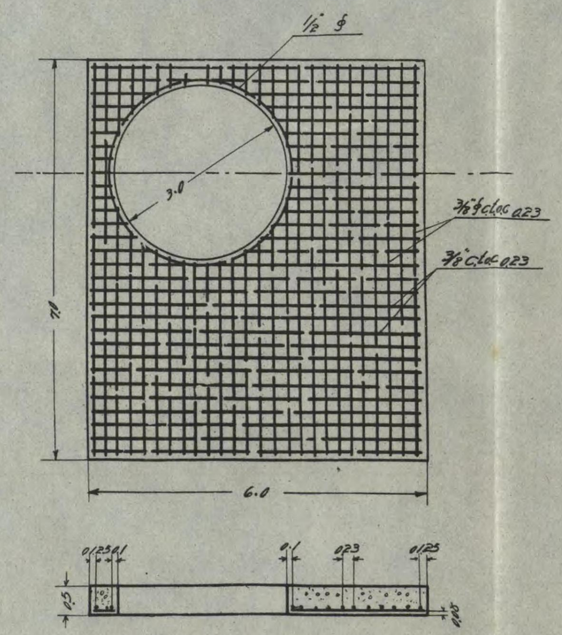


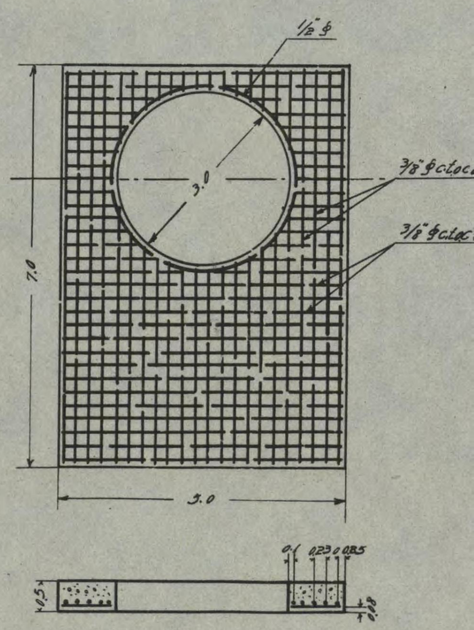
スラブ詳細

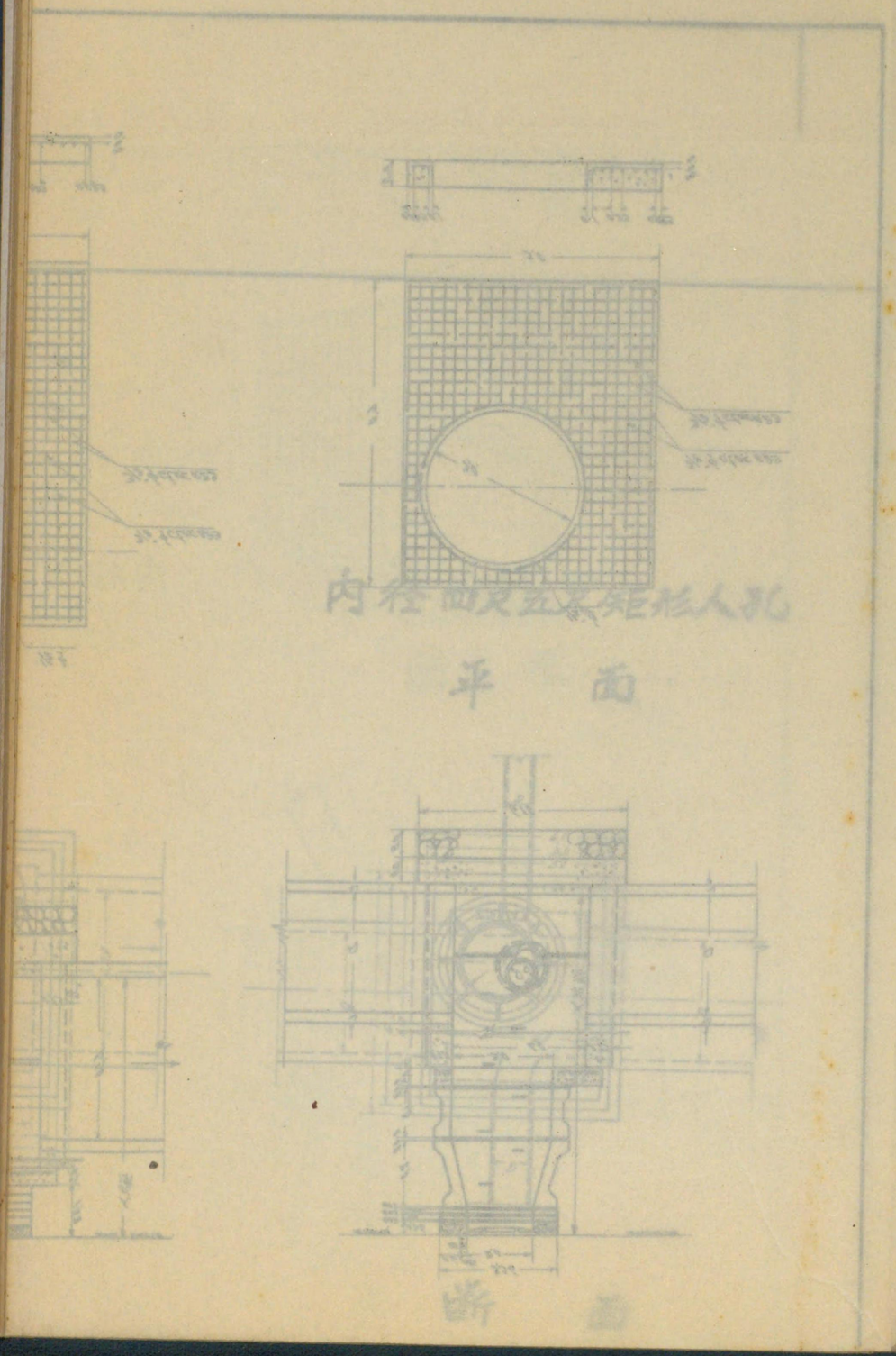
縮尺四十分之一

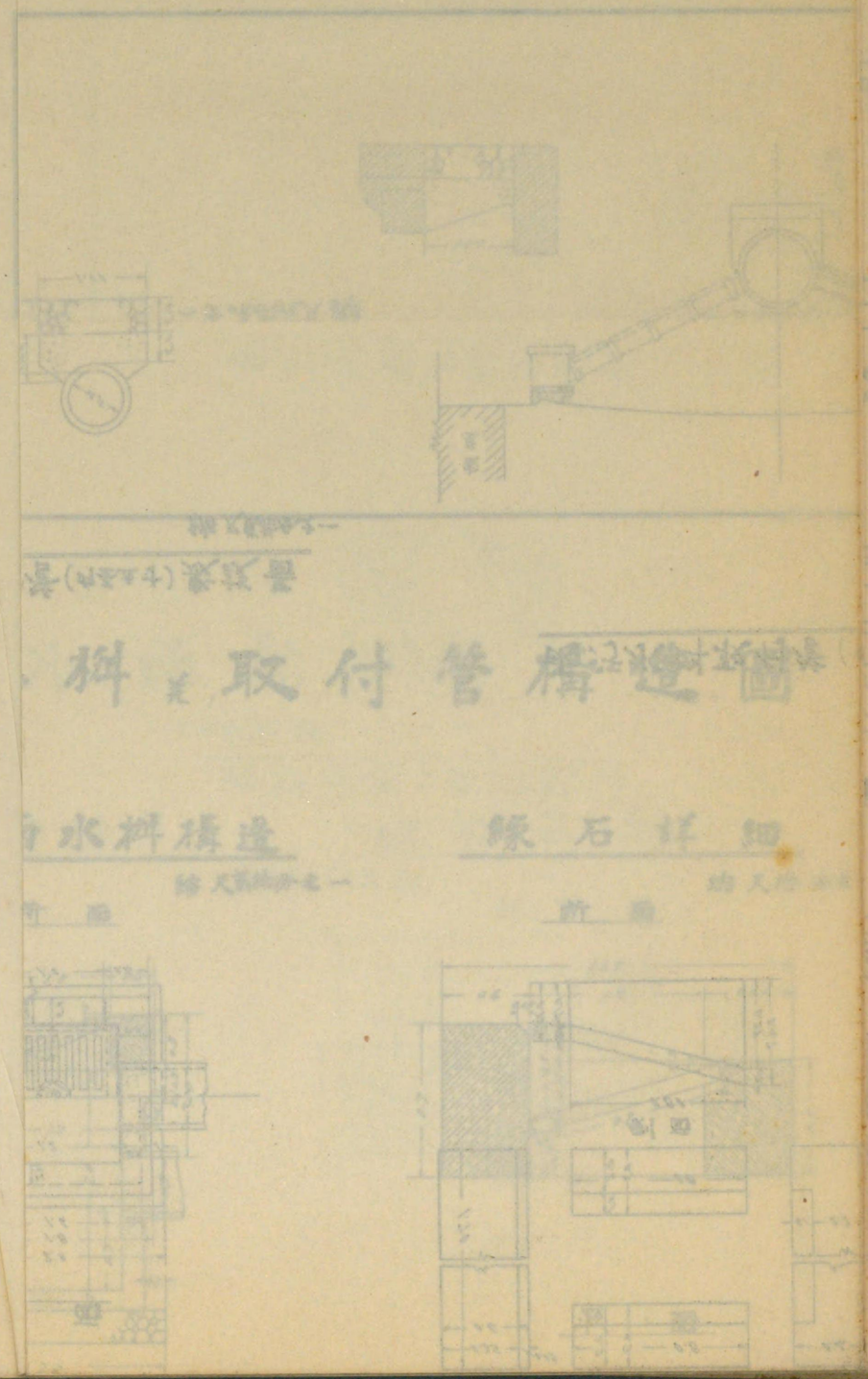








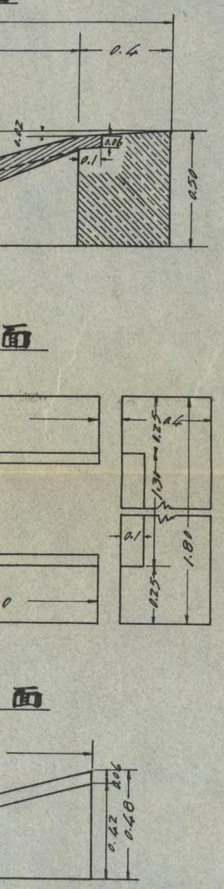

内径四尺五寸矩形人孔
平面
斷面


圖造構管付取及料
造構料水
一之分縮尺縮
前面
縁石詳細
縮尺四分之一
前面

側溝雨水桝及取付管構造圖

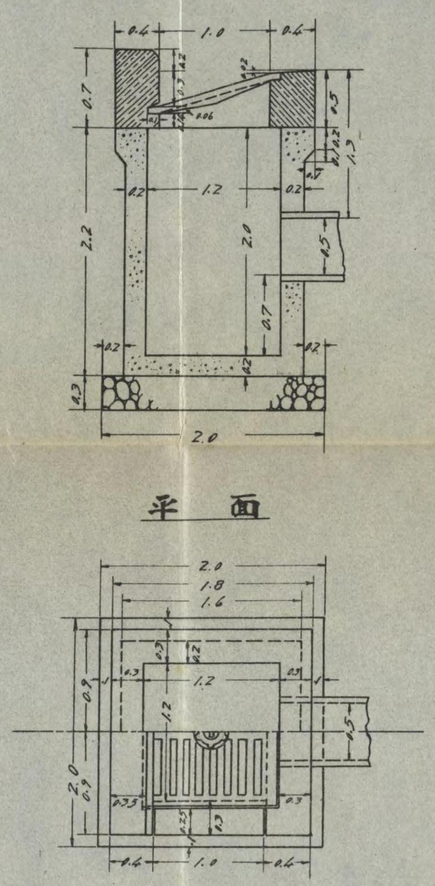
詳細

縮尺拾分之一



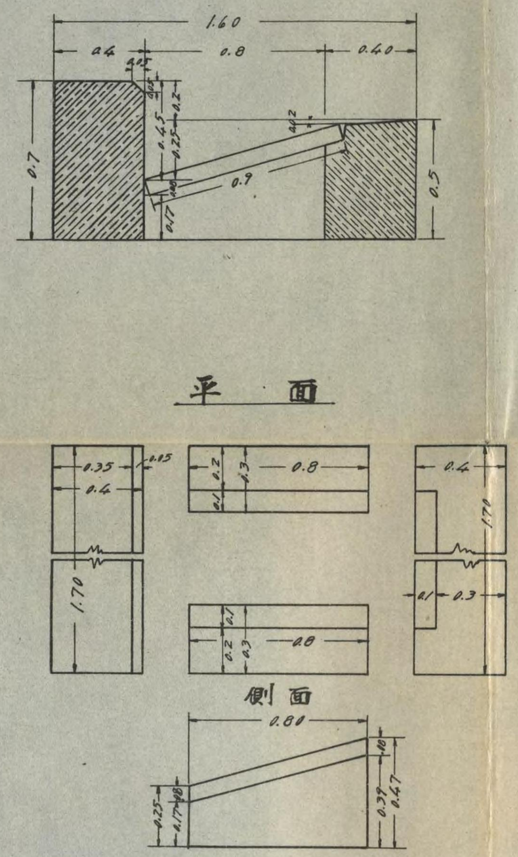
乙種雨水桝構造

縮尺貳拾分之一



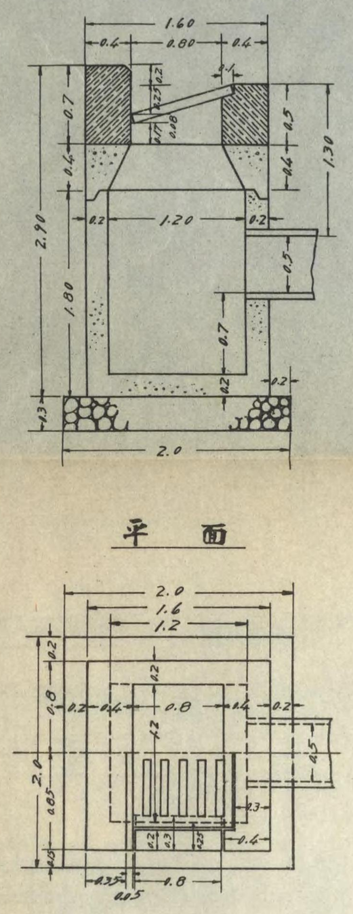
縁石詳細

縮尺拾分之一



甲種雨水桝構造

縮尺貳拾分之一



側溝二號型詳細